すみそめの袂はいとゝけふの端午にも赤染衛門はいとゝなき人を戀て音をなく事蔑からんと也泥を戀路にそへ菖蒲の根を音にそへてよめり

これをたにかたみとしぬしはの袖は八雲抄四位の異名云々葉かへやしつるとは三位に加階せし事なるへし服をたに故院の御形見と思ふを都人は加階し悅ふ事よと也山法師なとのしわさにしなして都にはなとよませ給へり此事枕双紙に委あり

里にまかり出侍て　後朱雀院病中に御譲位なれば也榮花物語卅六に正月十日の程いみじうおもくおらせ給ぬれは内大臣の女御まかてさせ給ふ云々こそよりも色こそ　故後朱雀院を思ふ紅涙のかゝる心なるへし

衛門也マサヒラ

赤染匡衡にをくれてのち五月五日讀て遣しける　美作三位

すみそめのたもとはいとゝこひちにてあやめの草のねやしけるらん

一周忌の法事也

六十四代圓融院の法皇うせさせ給ひて又の年の御はてのわさなとの頃にや

一條院御如何と也四位なりしか加階せしにや

有けん内に侍ける御乳母の藤三位の局にくるみ色の紙に老法師の手のまねをして書てさし入させ給ひける　一條院御製圓融院御子

これをだにかたみと思ふをみやこには葉がへやしつるしぬしはの袖

寛德二年正月十六日受禪後朱雀御病中也

後冷泉院位につかせ給ひけれは里にまかりいて侍て又の年の秋東三條のつほねのまへにうへて侍ける萩を人のおりてもてきたりけれは　後朱雀去年崩給ふて也　麗景殿前女御後朱雀院女御右大臣頼宗公女

こそよりもいろこそこけれ萩の花なみたの雨のかゝる秋には

筑前守成順にをくれ侍て又の年はてのわさし侍けるに　伊勢大輔成順妻也

わかれにしその日はかりは忌日はかりは歸りくれと御山法師女とし頃住侍ける女にをくれて又の年はてのわさつかうまつりける成順は逢かたき歎也

とし頃住侍ける女にをくれて又の年はてのわさつかうまつりける　紀時文貫之子

とし頃をへてなれたる人もわかれにしこそはことしのけふにそ有ける別離苦の理に六年へし中者も別たる其日はけふにて有ける也

わかれにしこそはことしのけふにそ有ける　清原元輔

わかれけん心をくみてなみた川おもひやるかなこそのけふをも心は明也

後一條院御時皇太后宮　妍子三條院の后宮也御堂御女號二枇杷殿ト

かのみやより　枇杷皇太后宮のうませ給ふひめみや一品宮陽明門院是也

わか身にはかなしき　心明也悲しき事つきれはは

おもひかれかたみに　心明也五文字心を付けて吟味すへし

うすくこく衣の色は　心は明也

後一條院御時皇太后宮うせ給ひてはてのわさにさはる事有てまいらさりけれはかのみやよりきのふはなとまいらさりしなといひにをこせて侍けるに讀る　江侍従

わか身にはかなしきことのつきせねはきのふをはてとおもはさりけり

重茂也

ちゝのふくぬき侍ける日よめる　平棟仲周防守安藝守重茂子

おもひかねかたみにそめしすみ染のころもにさへもわかれぬるかな　平敦成是も重茂子

うすくこく衣のいろはかはれともおなしなみたのかゝる袖かなふくぬき侍けるによめる　藤原定輔朝臣女

うきなからかたみにみつるふちころもはてはなみたになかしつるかな
服し故きる藤衣なれはうきなからさすかになきあさの是をたにかたみと見つるさの心也是は除服せしむを涙になかしつるさ也

一條院　拾芥云一條南大宮東二町笙花物語九云御物のはなさ様々とげきさま也義比一條院にそおはします云々是此院の御なやみの内の事也

きえにけるゑじの焼火　彼院の御事也御士は衛門の捕官火を焼者也

菩提樹院　乗花物語四十云二條院　拾芥　故院也一條の御墓所に御堂立させ給て菩提院と東山なる所に三昧堂立られたる云々故院の御影を書奉たり似させ給ひぬさ御直衣姿

十月はかりに物へまかりける道に一條院をすくとて車を引入て見侍けれはひたき屋なとの侍けるを見てよめる　赤染衛門

きえにけるゑじのたくひの跡をみてけふりとなりしきみそかなしき

菩提樹院に後一條院の御影を書たるを見て見なれ申ける事なと思ひ出て讃侍ける　出羽弁

いかにしてうつしとめけんくもゐにてあかすかくれし月のひかりを

匡衡にをくれて後石山にまいり侍ける道に新しき家のいたうあれて侍けるを問せけれは親にをくれて二とせにかくなりて侍なりと

いひけれはよめる　赤染衛門

ひとりこそあれゆくとこはなけきつれ如しなきやとはまたもありけり

源信宗朝臣　小一條院の御[illegible]熊野にまうで侍けるに小一條院のかよひ給ひける難波といふ所に子左中將正四位下民部大[illegible]　三條院皇子　とまりてむかしをおもひいでゝよめる

輔紹運録有

いにしへになにはの事はかはらねとなみたのかゝる旅はなかりき

かくむかしを思ふ涙のかゝる旅はむかしにはなかりしかは是斗はむかしにかはりしこの心也

おもひやるあはれなにはのいにしへになにはの事はかはらねとなみたのかゝる旅はなかりき

小一條院の御あとはさひしく成てさそれなき給ふらんと思ひやるとも芦の浮根の流るゝ音を鳴るに添て也

伊勢大輔

としことにむかしは遠くなりにけりとしことにむかしはとをくなりゆけとうかりし秋は又も來にけり

昔は年ことに隔たりゆけと別てうかりし秋は又來しと也うき秋は來て昔は歸ぬ歎也

源重之

おもひやるあはれなにはのうらさひてあしのうきねはさそなかれけん

秋身まかりける人をおもひ出てよめる

しかはかりちきりし物をわたり川かへるほとにはわするへしやは

しかはかりちきりし物を

義孝少將の死後に人に夢に見えし歌也　次の詞のさまにて明なりしかはかりはさほとにさいふ詞也　さほと約束せし事を渡り川を歸らんほとに忘るへき事やはと也

此歌よしたかの少將煩ひ侍けるになくなりたりともしはしまて經よみはてんといもうとの女御にいひ侍て程もなく身まかりて

のち忘れてとかくしけれは其夜母の夢に見え侍けるうた也　懐子花山院國母冷泉院女房

しくれごはち草の花そ　しくれごはち草の花そちりまかふなにふるさとに袖ぬらすらん

こゝには時雨と思給ふへけれとわか浄土にてはまんたらけまんしもしやけ等の種々の花なるをかくあてたき身に生れぬる身を何に古郷には袖ぬらし給ふそと也袋草子には此歌の次に昔契二蓮華宮裡一月六合遊二極樂界中風一此句詩をそへてあり

賀縁法師　ひえの山の阿闍梨なりし也

母のかくはかり戀るを賀縁の義孝にいひし詞なり

きてなれし衣の袖も心はあきらか也

いもうとの夢　義孝の妹女御の外に恒徳公の北方道信の母なり

あふ事をみな暮にとにいかてあひみんとて夕くれごとにはいてたてともあふ事はえあらす夢ならてはかひなしと也

むすめかの女のもとに夢に見えたる父の歌を遣したるなり

この歌義孝かくれ侍て後十月はかりに賀縁法師の夢に心ちよけにて笙をふくと見るほとに口を只ならすになん侍ける母のかく鳴賀縁の立を義はかり戀るを心ちよけにてはいかにといひ侍けれはたつを引と孝のとめて也めてよめるとなんいひつたへたる

きてなれし衣の袖もかはかぬにわかれし秋になりにけるかな

此歌身まかりてのちあくる年の秋いもうとの夢に少將よしたかゝ歌とて見え侍ける

あふ事をみなくれごとにいてたてとゆめちならてはかひなかりけり

ある人のいはく此歌おもふ女ををきて身まかりにけるおとこのむすめの夢にかの女にとらせよとてよみ侍ける

むすめかの女のもとにやるとてよみ侍ける

よみひとしらす

なくなくもきみにはつけつなき人のまたかへりことといかゝいはまし

女いみしうなきてかへりことによみ侍ける

さきにたつなみたを道のしるへにてわれこそゆきていはまほしけれ

なくなくもきみにはなき人のまたかへりことといかゝいはまし

又此世に歸り來よとはいかゝいはむといふに返事をいはんよしなき事をそへてよめり

さきにたつなみたを　我こそ冥途にゆきて直に此返事をいはまほしきと也

東宮と申しける　後朱雀院一條院皇子母上東門院寛弘六年十一月廿五日降誕寛仁元年八月九日立東宮九歳　長元九年四月十七日受禪二十八歳

ほのかにもしらせてし哉
春霞かすみのうちは重詞也うちにおほしこむる思ひをほのかにもしらせまほしきと也ほのかも霞の縁の詞也

木の葉ちる山の下水　なかれもやらぬ物思ふとはうつ[illegible]
ちむすぼれて忘れやらぬ心なる人[illegible]
いかなればしらぬにおふる[illegible]
しらぬは沼にいひかけて也ぬなはは[illegible]
かくなんとあまの漁火　折よくはかくおもふとほのめかし傳へよと女のめのとに[illegible]

後拾遺和歌集第十一

戀一

東宮と申ける時故内侍のかみのもとにはしめてつかはしける　嬉子道長公女治安元年二月入内十五歳東宮十三　後朱雀院御製

ほのかにもしらせてしかな春かすみかすみのうちにおもふこゝろを
俗のときなるへし　はしめたる人につかはしける　叡覺法師右少辨定成子俗名信綱

木の葉ちる山の下水うつもれてなかれもやらぬものをこそおもへ
題しらす　むまのないし拾遺作者

いかなればしらぬにおふるうきぬなはくるしやこゝろ人しれすのみ
女をかたらはんとてめのとのもとにつかはしける　源頼光朝臣攝津守滿仲子攝津守四位

かくなんとあまのいさりひほのめかせいそへの波のおりもよからは
めのとの返しの心也　源頼家朝臣母從三位忠信女頼光子筑前守

返し
しらぬは沼にいひかけて也ぬなはは[illegible]
かくなんとあまの漁火折よくはかくおもふとほのめかし傳へよと女のめのとに[illegible]
海邊の縁語也

沖津波うちいてん　沖津なみはうち出んの枕詞也そなたに思ひ給ふとあれと慥におもひはるへなられは我きみにうち出申入ん事つゝましきと也

かくかへりけれは　頼光のかくうたよみおこせし事也

霜かれの冬野に　序歌也むちすいき穂さうけてほのめかさはやと也

しのひつゝやみなん　是も始て女につかはしける心也心は明也

おほめくな誰さもなくて
我思ふ心のかよひてさためて皆々に夢にも誰さなくて見えけん我そのの見えたる人そおほめき給ふなと也

かくさたにえやはいふき　玄旨云伊吹は近江美濃兩國の名所也さしも草此山に讀習はせり蓬也心はもゆる思ひをえいひやられは人はさしもいかてしらんと也さしもしらしなはさそありさもしらしと也三光院御[illegible]えやはと切てえもいひかたき

沖つなみうちいてん事そつゝましきおもひよるへのみきはならねは
ある人のいはく此歌中納言惟仲にをくれて侍けるおりかくいへ　此女はしめ惟仲の妻なりし也

はしめたる女につかはしける　平經章朝臣

霜かれの冬野にたてるむらすゝきほのめかさはやおもふこゝろを
しのひつゝやみなんよりはおもふことありけるとたに人にしらせん　大江嘉言

おとこのはしめて人のもとに遣しけるにかはりてよめる　和泉式部

おほめくな誰さもなくてよひくにゆめに見えけん我そその人
女にはしめてつかはしける　藤原實方朝臣

かくさたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを
はしめの戀をよめる　實源法師山の僧也律師也

と也秀句は只自然になるやうによめと也

なき名たつ人たに君を戀る事をしらせまほしき心よりかくよめり心は明也

年もへぬ長月の　其夜の佛を忘れす年へし心なるへし

くみてしる人もあら　人しれぬ思ひを夏山の茂りの下水になそらへてくみてもしれかしとの心也

小舟さしわたのはら　蜑を我に比しいもうとを玉藻に比して姉にしろへせよとの心也はらからをいひかけてなるへし

ひとりして詠る宿の　宿のつまは軒なり忍草をいひかけておもふ心をしらせまほしきこゝろ也

おもひあまりいひ出る　よき人はかろ〳〵しく物をいひ出ましきにかく思ひあまりていひ出るにつけてとの心なるへし

なき名たつ人たに世にはある物をきみこふる身としられぬそうき

月みる女をみし心也

月あかき夜詠めしける女に年へて後に遣しける　源則成周防守信濃守通成子

年もへぬ長月の夜の月かけのありあけかたのそらをこひつゝ心かけたる人につかはしける　藤原長能

くみてしる人もあらなん夏山の木のした水は草かくれつゝはらから侍ける女のもとにをとゝをおもひかけてあねなる女の許諸本如此衍文歟に遣しける　讀人しらす

小舟さしわたのはらからしるへせよいつれかあまの玉もかるうら題しらす　藤原通頼權左少辨雅成子右衛門尉

ひとりして詠る宿のつまにおふるしのふとたにもしらせてしかな　道命法師和泉式部に名立し人

おもひあまりいひ出るほとに數ならぬ身をさへ人にしられぬるかな八月はかり女のもとに薄のほにさして遣しける　祭主輔親

しのすゝきしのひもほに出るとは色にあらはるゝ心也上のしのすゝきはしのひもあへぬの枕詞也心は明也

いはぬまはまたしらし　わかおもひまいらすへき人はわれにてありともいはすは君かしらしと也

わきもこか袖ふり　序歌也袖ふりかけしうつりかのけさは身にしむさいふにきのふのありさまの猶忘られぬ心をもこめたるにや扨心は身にしむ物思ひするとの心なるへし

かひつくろひ　五節の舞妓の理髮の役ゝる女なるへし江次第十五節御前試事

理髮一人童女二人蘇爐茵等也云々

雲のうへにさはかり　五節には人々日陰の糸をかくる事あるを日の影にそへて也君かつらさのとけぬと也

とけなん　東風解レ氷立春の候也月令にあり打とけよといはんため也

しのすゝきしのひもあへぬ心にてけふはほにいつる秋としらなん　題しらす　藤原兼房朝臣前讃岐守中納言兼隆子

いはぬまはまたしらしかしかきりなくわかおもふへきひとはわれとも袖なと引しなるへし　女をひかへて侍けるに情なく入にけれはつとめてつかはしける　源兼澄加賀守鎮守府將軍信孝子

わきもこか袖ふりかけしうつりかのけさは身にしむものをこそおもへ五節に出てかひつくろひなとし侍ける女につかはしける　中納言公成中納言實成子

雲のうへにさはかりさし、日かけにもきみかつら、はとけすなりにきはしめて女のもとに春たつ日つかはしける　藤原能通朝臣但馬守皇太后宮永頼子

とけなん氷のうす氷けふはるかせにうちもとけなん　題しらす　能因法師

こほりとも人の心を　是も前の歌と大かた同し心なるへし

みつしほのひるまに　島の跡も見えすと返事なき事をいはんとて也上句は汐のひるまなき心なるへし汐ひる浦にこそ島の跡はみやへけれしほひぬ浦にはみえぬ心なるへし

しほたるゝわか身のかたは　我には難而とてこの人には返事する事を恨て海邊の汐やくことの縁にてよめるにや

おもひわひきのふ山へに　躊躇ぬを文見ぬにそへて返事せぬ歎きをよめる也雲ゐにてちきりし人年に一度もあふ事かたければ七夕の逢もうちやまれさ也

あふ事のいつとなき　心はあきらか也七夕のわかれも一度はあひての事なり我はいまだあはまれは七夕のわかるゝまへう

ちやまし也

あふことのとゝこほるまは　こほりとも人の心をおもはやけさたつ春のかせにとくへき

ゝこほるに氷をそへて也

心明也

藤原顯季　三位修理大夫攝津守正四位下隆經子

しきのふすかり田に　鳴の伏也序歌也いなとは人のきいはんため也心はあきちか也

あふさかの名をも逢さい　ふ名を頼て戀すれと清水に袖ぬるゝうき事有と也

逢ことはさもこそひとめ　人目の障有かたければ逢事はさこそかたくもあちめ心斗はとけよと也

おもふらんしるしたに　伊勢物語「下ひものしるしとするもとけなくにかたるかことは戀すそあらまし此歌の心人に戀らるれは下紐をのつからとくると也其心にてよめり心明也

したきゆる雪まの草の　上はめつらしくとの序歌也心は明なるへし

文つかはしける女の返りことせさりけれは讃る　祭主輔親

みつしほのひるまたになき浦なれやかよふちとりのあとも見えねは

かへりことせぬ女のこと人にはやるときいて　道命法師

しほたるゝわか身のかたはつれなくてことうらにこそけふりたつなれ

返事せぬ人に山寺にまかりて遣しける

おもひわひきのふ山へにいりしかとふみ見ぬ道はゆかれさりけり

女の家近き所にわたりて七月七日に遣しける　前大納言公任

雲ゐにてちきりし中はたなはたをうらやむはかりなりにけるかな

七夕後朝に女のもとにつかはしける　藤原隆資（武蔵守越前守安房守）

あふ事のいつとなきにはたなはたのわかるゝさへそうらやまれける

人の氷をつゝみて身にしみてなといひて侍ければ　馬内侍

題不知　藤原顯季朝臣

しきのふすかり田にたてる稲くきのいなとは人のいはすもあらなん

殿上人也

うへのおのことも所の名をさくりて歌奉侍けるにあふ坂の關の戀　御製（今上御製白河也）

あふさかの名をもたのまし戀すれはせきのし水に袖もぬれけり

題しらす　道命法師

逢ことはさもこそ人めかたからめこゝろはかりはとけて見えなん

返し　よみ人しらす

おもふらんしるしたになきしたひもにこゝろはかりの何かとくへき

したきゆる雪まの草のめつらしくわかおもふ人にあひ見てしかな　和泉式部

おく山の槇の葉しろく　序
歌也心は明也槇の葉しのきは古今奥山の菅の葉しのきふる雪のけぬとかいはん戀のしけきに此詞なるへし

うれしきをわする、　五文字はかの童女の名をふめり人の名を五文字によむ事万葉憶良か歌にあり又其名をよむ事後頼かしつかゝきれ古今の見へききみさし數多あり今は常は好むへからすとそ

こひそめし心をのみそうらみつるひとのつらさをわれになしつゝくつらき人を戀初し我心を恨むと也人のつらさの恨みを我とわかとかになしつゝの心也人は恨てかひなけれは也

いかにせんかけても今はつらきなからえ思ひきられぬを歎く心也

入道一品宮に侍けるみちの國かもとにつかはしける　源頼綱朝臣

おくやまの槇の葉白くふる雪のいつとくへしと見えぬきみかな

うれしきといふわらはに文かよはし侍けるにことの字なしと人に物いはれてほともなく忘られにけりときゝてつかはしける　源政成朝臣式部大丞越前權守經任子

うれしきをわする、人もあるものをつらきをこふるわれやなになる

題しらす　平兼盛

こひそめし心をのみそうらみつるひとのつらさをわれになしつゝ

文かよはす女ことかたさまに成ぬと聞てつかはしける　藤原爲時刑部少輔雅正子紫式部父也

いかにせんかけてもいまはたのましとおもふにいとゝぬるゝたもとを

公資朝臣にあひくして侍けるに中納言定頼恐ひてをとつれけるを隙なきさまにや見えけん絶まかちに音なひ侍けれは　さかみ

あふことのなきよりかねてつらけれはさもあらましにぬる、袖かなぬ以前より早かく絶間かちなれはあらましに袖ぬるゝと也あらましは兼てよりの心也

まてといひし秋もなかはに成ぬるをたのめかをきし露はいかにそかをきしは約束しをきしやらんとおほゆる露はかり物いはんといひしことはいかにそやとの心也

あふまてとせめて命のせめてはしぬての心也逢まてなからへはやとしぬて命をおしめはとの心也袋草子云長元歌合の日能因きぬかぶりて縞に入て聞と之に戀歌に「黒髪の色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そ老ぬるといふ歌を讀たりと思ひて勝負を聞に參入也而敵方より「逢まてとせめてといふ歌を講出を聞て縞に退出云々非レ敵之由存歟

あふことのなきよりかねてつらけれはさもあらましにぬる、袖かな　大中臣能宣朝臣

春より物いひける女の秋になりて露はかり物いはんといひて侍けれは八月はかりにつかはしける

まてといひし秋もなかはに成ぬるをたのめかをきし露はいかにそ　堀川右大臣

宇治前太政大臣家の卅講の、ちの歌合に

あふまてとせめていのちのおしけれはこひこそ人のいのちなりけれ

やむことなき人を思ひかけたる男にかはりて　さか

つきもせすこひに涙をわかすかなこやなゝくりのいてゆなるらん　藤原道信朝臣

女のもとにつかはしける

あふみにかありといふなるみくり生る人くるしめのつくまえのぬま　永源法師

題しらす

つきもせす戀に　七久里出湯信濃也

あふみにかありといふ　みくりはくる物なれは人くるしめといはんため也戀に人苦しめ給ふ人なからあふみに有といへは

たのもしきさかこつ心也　ごひしてふことをしらでやみなましつれなき人のなき世なりせは
戀してふことをしらで　心
は明也　赤染衛門
つれもなき人も哀と　我戀
するほとの淵からぬなし
らせはと也　源道濟
身をすて、ふかき淵にも入ぬへしいか
なる心にてかくの給ふそ
と藏の心しらまほしさに
と也　大中臣能宣朝臣
こひ〳〵てあふとも夢　戀
のれさめは苦しきに逢夢
覺れおもはいとゝ侘し
となり
前駈つかうまつり　祭に馬
はのりて供奉する事也青
色の袍を着するよし也青
色とは麹塵の袍天子の御
衣也藏人召おろしを給ひ
て着也江次第六云祭日覽二前駈一同二禊日一若寄色不レ具之前駈者先參入付二藏人一奏二此由一有三仰召二藏人一青色給之云々
女の淵に身をなけよといひ侍ければ
題しらす
こひ〳〵てあふとも夢にみつるよはいとゝねさめそわひしかりける
賀茂の祭の歸さに前駈つかふまつれりけるに青いろのひものおち
て侍けるを女の車よりからきぬのひもをときてとちつけ侍けるを
尋ねさせけれと誰ともしらてやみにけり又の年のまつりの垣下に
其女を何人と尋れさせし也
集賢院にまいりて侍けるに女のいつらつけしひもはとをとつれて
侍けれはつかはしける
から衣むすひしひもはさしなからたもとは、やくくちにし物を
返し
くちにける袖のしるしは下ひものとくるになとかしらせさりけん
題しらす　能因法師
錦木はたてなからこそくちにけれけふのほそぬのむねあはしとや
すまの蜑のうらこく舟の跡もなく見ぬ人こふる我や何なる　西宮前左大臣
女のもとにつかはしける
さりともとおもふこゝろにひかされていまゝてよにもふるわか身かな　小野宮太政大臣女實賴公女
返し
たのむるにいのちのゝふる物ならはちとせもかくてあらんとやおもふ
題しらす　小辨
おもひしる人もこそあれあちきなくつれなきこひに身をやかへてん

くちにける袖のしるしは　よみ人しらす
袖朽るほとは我も思ふこと
らは其しるしの下紐とく
る事あらんになと其しる
しみせてしらせさるそ實
否おほつかなしと也
錦木はたてなからこそ　にし木ともいへり能因歌
枕云にし木とは薪をこ
りて東の夷の懸想文やる
につけてかふ女のもとに
やる也云々猶説々袖中抄
委けぶのほそ布とは八雲
云後糟云鳥毛にても織た
るといへり拂猥くて胸合
すといへり云々錦木も取
入れは朽たり逢ましきさ
にやとの心を皆奥州の事にてよめり
すまの蜑の浦こく　序歌也
さりともと思ふ心に　賴む心に死なて有と也
たのむるに命の　賴むに死ぬといへるをかめてさあらはあはて賴めて斗干させもあらんとやとの返歌也
おもひしる人もこそあれ　戀に身をかへて死なは哀と思ひ知こそせんにさてやかへましと也

ひとしれずあふを待まあ[illegible]
ふにかへでこそあるへけ[illegible]
れ人しれす戀しなはいた[illegible]
つらならん歎きなるへし
こひしなんいのちはことの
命のおしさは數にもあら
でかく難面人のなれる果
を見まほしき也
つれなくてやみぬる今は
たいさいへるに心をこめ
られ侍にや
文にかゝんに艶書なるへ
し[illegible]
あされかみいたれて朝寢
髪はみだれてといはん枕
詞也逢ばば戀のみだれも
おさまるべき物をこの心
にあふよしもかなもとも
ひにせんとよめり
から衣そてしのうちの序
歌也唐衣ば袖師の枕詞也
袖師浦は出雲也空貝ばみのなきをいへはむなしき戀にとつゝけんため也

平　兼盛

ひとしれすあふを待まつまにこひしなはなにゝかへたる命とかいはん

長久二年弘徽殿女御家に歌合し侍けるによめる

永源法師

こひしなんいのちはことのかすならてつれなきひとのはてそゆかしき

俊綱朝臣の家に題を探りて歌讀侍てけるに戀を讀る

中原政義　大納言重賴子大外記從五位下

つれなくてやみぬるひとにいまはたゝこひしぬとたにしらせてしかな

文にかゝんによかるへき歌とて俊綱朝臣人〻によませ侍けるによめる

良暹法師

あさねかみゝたれてこひぞしとろなるあふよしもかなもとゆひにせん

藤原國房

から衣そてしのうらのうつせかひむなしきこひに年のへぬらん

師實公也號京極入道作者部類

關白前左大臣家に人〻經年戀といふ心を讀侍けるに

左大臣　作者部類俊房公云々土御門右大臣子

われか身はとかへるたかとなりにけりとしはふれともこひはわすれす

右大臣　作者部類顯房公云々

とをへてはかへぬやまのしゐしはやつれなきひとのこゝろなるらん

ひころけふとたのめたりける人のさもあるましけに見え侍ければ

道命法師

うれしともおもふへかりしけふしもそいとゝなけきのそふこゝちする

われか身はとかへる鷹年へて戀を忘ぬを鳥屋に飼る鷹の木居を忘ぬに比してよみ給ふ也

とをへてはかへぬ心は明也拾遺「はし鷹のとかへる山の椎柴の葉かへはすともきみはかへせじ此詞也難面き色のかはらぬと也

うれしとも思ふへかりしけふしもそ心は明也

後拾遺和歌集第十二

戀二

をんなにあひて又の日つかはしける　　祭主輔親

ほともなくこふる心はいかなれやしらてたにこそとしはへにしか

實範朝臣のむすめのもとにかよひそめてのあしたにつかはしける　　源頼綱朝臣

いにしへの人さへけさはつらきかなあくれはなとかかへりそめけん

惟任朝臣にかはりてよめる　　永源法師

夜をこめてかへるそらこそなかりつれうらやましきはありあけの月

平行親朝臣のむすめのもとにまかり初て又のあしたによめる　　藤原隆方朝臣（備中守隆光子　但馬守）

くるゝまはちぎせをすくす心ちしてまつはまことにひさしかりけり

題しらす　　源定季（參議頼定子　右少將）

ほともなくこふる心　前夜にあひて其ほともなくはや戀しきはいかなる心そ絶てあひしらてたにとしへて有しかわりなき心やと也

いにしへの人さへけさ　明れは歸る物にしそめし其古の人もつらきと別をおしむ心よりいへり

夜をこめてかへるそら　夜をこめてかへるうさにあくるまてありし月のうらやましかりしの心也

くるゝまはちぎせを　暮をまつまの久しきをよめりまつは暮を待也松をそへて千年を過す緣語也

けふよりはとくゝれ竹　けふよりはとく暮て夜は長かれといはんとて吳竹をそへてふしことによはなかゝれなと竹の緣也是も後朝の歌なるへし

きみかためおしからさりしかれては一度の逢瀨には命もおしからさりしかと逢てのちかまさりに猶久しく生て逢見まほしき心也思ひける哉といへるに見所あり云々此哉をはかへる哉といふとそ

けふくるゝほと待たにもけふ一日の暮をたに待久しきにあはて心をかけていつしかと思ひしほとはいかて過けんと也

かへるさのみちやはかはる　とくるは雪の事に女のうちとけしをそへて近まさりにまさふ心をよめり

あけぬれは暮る物　玄旨云後の夕を又頼む中とはよく分別しなから當意の別の切なるまゝに明れは暮る理をも忘たる心哀深く面白き趣向にや

けふよりはとくゝれたけのふしことに夜はなかゝれとおもほゆるかな　　少將藤原義孝

女のもとよりかへりてつかはしける

きみかためおしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

人のもとにかよふ人にかはりてよめる　　伊勢大輔

けふくるゝほとまつたにも久しきにいかてこゝろをかけてすきけん

女のもとより雪ふり侍ける日歸てつかはしける　　藤原道信朝臣

かへるさのみちやはかはるかはらねとくるにまとふけさのあは雪

あけぬれはくるゝ物とはしりなからなをうらめしきあさほらけかな

ある人のもとにとまりて侍けるに晝は更に見苦しとて出侍さりけれはよめる

ちかのうらに波よせ　千賀浦は奥州也袖のひるまなきに蓋間の逢瀬なかりしを添て也

あひみての後こそ　逢て後戀のまさりてわりなけれはあはて難面き人をもうらみましきを也

うつゝにてゆめはかり　現にて少時(シハラク)の逢瀬のはかなきを現ほとたしかなる夢になさまほしを也

たまさかにやき　適に逢に夜をとをしはてすやかて別る事を行逢といひかけて關守のとをさぬにそへて也

しる人もなくてやみ　汨の袖にもるを世にもらすやうの事にそへて也

たのむるを頼むへき　まてを頼むるをも誠を頼むへきにはあらねとさすかにかくの給へは待とはなくて待れもやせんを也

暮やくはかりなを　拾遺「現にも夢にも人によるしあへは暮やくはかり嬉しきはなし

ちかのうらに波よせかくるこゝちしてひるまなくてもくらしつるかな

題しらす　永源法師

あひみてのゝちこそこひはまさりけれつれなきひとをいまはうらみし

女に遣しける　西宮前左大臣

うつゝにてゆめはかりなるあふ事を現はかりの夢になさはや

題しらす　藤原道信朝臣

たまさかにゆきあふ坂の關守は夜をとをさぬそわひしかりける

清原元輔

しる人もなくてやみぬる逢事をいかてなみたの袖にもるらん

男のまてといひをこせて侍ける返事に讀侍ける　さかみ

たのむるを頼むへきにはあらねともまつとはなくてまたれもやせん

とき〳〵物いふおとこ暮ゆくはかりなといひて侍けれはよめる

なかめつゝことあり　彼本歌の詞をうけて心は明なるへし

やすらはてれなまし　玄旨やかてもれすして若やと待休らひしを後悔したる也やすらふは猶豫(ユウヨ)する心也惣の心はあた人を待更てさりとも思ふに月さへ傾たるを見んさまけにいと〳〵思ひ深かるへし落着は人を恨みたる歌也

おきなからあかしつる哉　共寝せぬ鴨に身を比したる心もあるにや霜は置といへは起なから待あかす心を云也

ゆふ露をあさちかうへと　心は明也袖に置てを起て明すに添たり

いかにせんあなあやにく　文惡(アヤニク)わりなき心なり春の日は永くて暮の待遠成に逢夜のかやうに長からはよからん物をとの心なり

なかめつゝことあり　歌の詞をうけて心は明なるへし

やすらはてれなまし　やかてもれすして若やと待休らひしを後悔したる也やすらふは猶豫(ユウヨ)する心也惣の心はあた人を待更てさりとも思ふに月さへ傾たるを見んさまけにいと〳〵思ひ深かるへし落着は人を恨みたる歌也

おきなからあかしつる哉　共寝せぬ鴨に身を比したる心もあるにや霜は置といへは起なから待あかす心を云也

ゆふ露をあさちかうへと　心は明也袖に置てを起て明すに添たり

いかにせんあなあやにく　文惡わりなき心なり春の日は永くて暮の待遠成に逢夜のかやうに長からはよからん物をとの心なり

なかめつゝことありかほに暮してもかならすゆめに見えはこそあらめ

中關白少將(道隆公)に侍ける時はらからなる人に物いひわたり侍けりたのめてこさりけるつとめて女にかはりてよめる　赤染衛門

やすらはてねなまし物をさよ更てかたふくまての月を見しかな

人のたのめてこす侍けれはつとめてつかはしける　和泉式部

おきなからあかしつるかなともねせぬかものうは毛の霜ならなくに

越前守景理夕さりこんといひて音せさりけれは讀る　大輔命婦(左大臣雅信家女房)

ゆふ露をあさちかうへと見し物を袖にをきてもあかしつるかな

女のもとにつかはしける　藤原隆經朝臣(左中辨賴任子前美作守)

いかにせんあなあやにくの春の日や夜半のけしきのかゝらましかは

返し　童　木治部丞茨田重賴女

うはたまのよはのけしきはさもあらはあれひとの心をはる日ともかな　源重之

題しらす

よとのへとみまくさかりにゆく人もくれにはたゝにかへるものかは

女のもとにまかりけるにかくれて逢さりけれは歸てつかはしける　源師賢朝臣（左中辨 參議資通子）

かへりしはわか身ひとつとおもひしをなみたさへこそとまらさりけれ

左大將朝光女のもとにまかれりけるになやまし歸りねといひ侍けれは歸りてのあした女のもとよりつかはしける

あま雲のかへるはかりのむら雨にところせきまてぬれし袖かな　よみ人しらす

物いひ侍ける男の晝はかよひつゝ夜とまらさりけれはよめる　一宮紀伊

わかこひはあまのはらなる月なれやくるれはいつるかけをのみ見る

大貳高遠物いひ侍ける女の家のかたはらに又恐ひて物いふ女の家すきてゆく月をも「月の宿」の前過てやきてさしよらぬはさもあるへき事なれは恨へきにあらす只月待わか身の悲しきさ也さやうのたのむかひなき人を待か哀にはかなきさ也杉たてる門ならませは　心の松を心の中にのみ下待をいかてかしるへきさそへて也彼三輪の山本を本歌也

津のくにのこやとも　昆陽（コヤ）

来やにそへて也来れとも（キタ）人にいはまほしきを隙なきさ也芦の八重ふけるやれの隙なきにそへて也公任卿に赤染と式部との歌讀の勝劣を問けれは式部はこやとも人をとよみし物也と答給へりと無明抄にあり式部か中の秀逸にやこそ侍

人めのみ忍けきみ山の青つゝらくるといひかけて也心は明也

こぬもうくくるも苦しき青つゝらいかなるかたにおもひたえなん

侍けり門の前より恐ひてわたり侍けるをいかてか聞けん女のもとより遣しける　よみ人しらす

すきてゆく月をも何に恨むへきまつわか身こそあはれ成けれ

返し　大貳高遠

杉たてる門ならませはとひてましこゝろのまつはいかゝしるへき

題しらす　和泉しきふ

津のくにのこやとも人をいふへきにひまこそなけれあしのやへふき

兼仲朝臣のすみ侍ける時忍ひたる人かたゝにあふ事かたく侍けれはよめる（兼仲の也）　高階章行朝臣女

人めのみしけきみ山の青つゝらくるしき世をもおもひわひぬる

題しらす　よみ人しらす

こぬもうくくるも苦しき青つゝらいかなるかたにおもひたえなん

人めのみ忍けきみ山の青つゝらくるといひかけて也心は明也

こぬもうくくるも青つゝらは是もくる絶るなといはんとてなりこぬかたに思ひ絶えんかくるに思ひたえんかあやにくなる事の心なるへし

しるらめや身こそ人め　し
るらめやよもしらしさい
ふ心の詞也憚關八雲抄奥
州云々心は明也
なさか物むつかしけに　何
とて氣むつかしけにある
そさうちさけしたしき人
の間也
もろともにいつかさく　あ
ふことのかたきさいひか
けて我思ふ人もいつもろ
ともにうちさけんいてや
あふ事はかたき中なる物
なと心中に歎く心なり
ふちはせになさいへり　古
今「飛鳥河淵は瀬になる
世なりとも思ひ初てん人
は忘れじ
ふちやさは瀬にはなり　淺
きを深くなす世ならは深
きも淺くかはらん頼みかたしと也淵やさはは淵も扨は瀬に成らんと也
あひ見ではありぬへし　田舍へやき給はんに逢見すしては有れぬへしやと　兼て心見る程は先堪かたく苦しまことに田舍へ

人のむすめの親にもしられでものいふ人侍けるをおや聞付ていひ男を侍けれは男まうてきたりけれと歸りにけりと聞て女にかはりてつかはしける　讀人不知

しるらめや身こそ人めをはゝかりの關になみたはとまらさりけり

忍ひて物思ひ侍りける頃色にやしるかりけんうちとけたる人なとのものむつかしげにといひ侍けれは心のうちにかくなん思ける　さかみ

もろともにいつかとくへきあふ事のかたむすひなる夜半のしたひも

物いひわたる男のふちは瀬になさいへりける返事によめる　赤染衛門

ふちやさは瀬にはなりける飛鳥川あさきをふかくなす世なりせは

道濟かぬ中へまかり下りけるに女のもとより遣しける　よみ人しらす

あひ見ではありぬへしやと心見るほとはくるしきものにそ有ける

別て後はいかゝあらんも不知とふくめたる心也
わか心こゝろにもあらて我心と思絶んさは思はれと心の外に思絶てつらき事あらはこぬ一夜のかた見に是をせよと也
こぬまてもまたきし物を夕卦をもとはてあらはこんといひし人なれはたとひこぬまても待て頼もしからんを夕卦を問て來ぬを知て中々に心ほそきと也
夜かれして　來ぬ事也
きえかへり露もまた　此五文字はわか身の今夜待侘る思ひにさま〳〵消歸りしを露の緣にてなかれしなるへし露もまたひぬは泪也下句は九月なれは折節時雨の降しなるへしこぬよの袖のひぬ上にわりなの時雨のぬらしそふる事よとの心也
あかつきの露は枕に　人のもとより歸りて我もさには立もよらて歸り給ふを恨ての心也曉の露は泪なるへし

心ならすとたやへき事也さかしらなと有しほとにや
心ならぬ事や侍けんかたらひける女のもとにまかりて枕にかきつけ侍ける　右大臣

わかこゝろ心にもあらてつらからは夜かれんとこのかたみともせよ見ィ

男のこんといひ侍けるを待わつらひてゆふけをとはせけるによに夕卦うらなはする事也　よに
こしどつけ侍けれは心ほそくおもひてよみ侍ける　よみ人しらす

こぬまてもまたまし物を中〻にたのむかたなきこのゆふけかな

入道攝政九月はかりのことにや夜かれして侍けるつとめて文をこ（後拾遺家公也）（あくる朝也）せて侍ける返事につかはしける　大納言道綱母

きえかへり露もまたひぬ袖の上にけさはしくる〻そらもわりなし

中關白女のもとより曉に歸りて内にもいらてとにゐなから歸侍け（道隆公）（よそのかへさに立なからとひて歸給ふ也）れはよめる　高内侍（高階成忠女儀同三司母是也）

あかつきの露はまくらにをきけるを草葉のうへとなにおもひけん

あすのほとにまでこんといひたるおとこに

きのふけふなけくはかり
昨今の歎きほどあらはあ
すにもあはて死やせんと
の心也
泪の雨の袖に　泪の袖にふ
る事をいふなるへしさし
て歌の詞にもあるましく
や
見し人にわすられて　彼人
の袖にふる事をいへるを
さかめて見し人に忘らる
る我身にこそ身の幸をし
る雨はやまず降なれと也
かの伊勢物語の身幸あら
は此雨はふらしといひし
返事に「數々に思ひ思は
すとよみし心をうけて也
わすらるゝ身をしる雨は
雨はふられとも降しとい
ひてこゝろさに袖はかり
ぬれしとの心也身を知雨は前の歌の心と同
こえにける波をは　松はちよふるにつけて也人の心のかはるはしらて久しくと頼しはかなさよとの心也

きのふけふなけくはかりの心ちせはあすにわか身やあはしとすらん
雨のいたうふる日泪の雨の袖になといひたる人に

さかみ

和泉式部

見し人にわすられてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまね
輔親物いひ侍ける女のもとによへは雨の降しかはは、かりてなと
いへる返事にとくやみにし物をとて女のつかはしける

よみ人しらす

わすらるゝ身をしる雨はふらねとも袖はかりこそかはかさりけれ
恐ひてかよふ女の又こと人に物いふと聞て遣しける

藤原能通朝臣（但馬守皇太后宮大夫永頼子）

こえにける波をはしらてするの松ちよまてとのみたのみけるかな
かたらひ侍ける女のこと人に物いふと聞て遣しける

藤原實方朝臣

うらかせになひきに　里の蜑阿波名所也あまの藻をたく煙のなひくを彼女の心よはさにそへて也師説女の貞心ならぬを恨也
わすれすよ又忘すよ　上は重詞也瓦屋は煙こもる物なれは下むせひつゝといはんため也下の思ひに打むせひて忘れすとの心也風のをとの身にしむ　人の心の秋かたになりて風の冷やかなる音も悲しき心なるへし
ありまやまゐなの　玄旨云是は只そよといはむため斗の序也いてとは我心をおこしてつかふ詞也「いて人はことのみそよき「いて我を人なとかめそなと讀りいてそよ人を忘やはするとは枯々ある男のかへりておほつかなきなといへるを恨て我心を述出せる也かくいへる内に人を忘るゝ物にやと男にあたりていへる心あり有馬山猪名野攝津名所也
うらむともいまは見えしと　せめてはあまりなと云心也あまりにつらけれは一向恨む氣色をも見えしたとひうらむともか

うらかせになひきにけりな里の蜑のたくものけふりこゝろよはさは
清少納言人にしらせでたえぬ中にて侍けるに久しう音つれ侍さり
けれはよそ〳〵にて物なといひ侍けり女さしよりて忘にけりなと
いひ侍けれは讀る
わすれすよ又わすれすよかはらやのしたゝくけふりしたむせひつゝ
男かれ〳〵に成侍ける頃よめる　よみ人しらす
風のをとの身にしむはかり聞ゆるは我身に秋やちかくなるらん
かれ〳〵なるおとこのおほつかなくなといひたりけるによめる

大貳三位

ありまやまゐなのさゝ原風ふけはいてそよ人をわすれやはする
右大將道綱久しふをとせでなどうらみぬそといひて侍けれはむす
めにかはりて

赤染衛門

うらむともいまは見えじと思ふこそせめてつらさのあまりなりけれ

ひあらしと思ふやへ猶恨るよりは深きそこの心也

こよひさへあらはかくこそ毎夜こんといひてこぬうらみのつらさに今夜も亦生てあらはかくつらき思ひをせんに只暮ぬまに死まほしきこの心なるへし恨みあまりての心と見ゆ

あすならは忘らるゝ　又は更に音せしといひし人なれはあすは音もせられす忘らるゝ身なるへしさやうのうきめみぬさきにかく音つれらるゝほとに死はやと也

いとふとはしらぬに　いとふとは知なから猶えやます戀しきは我心にもあらぬ心そと也

あふ事はたなはたつめに　あふ事は星にかしなから猶あはまほしきこの心なるへし小大君「七夕にいしつと思ひし逢事を其夜なき名の立にける哉

夜ごとにこんといひて夜かれし侍けるおとこのもとにつかはしける　和泉式部

こよひさへあらはかくこそ思ほえめけふくれぬまのいのちともかな

おとこうらむることや有けんけふをかきりにて又はさらにをとせしといひて出侍にけれといかにおもひけんひるつかた音つれて侍けるに讀る　赤染衛門

あすならはわすらるゝ身に成ぬへしけふをすくさぬいのちともかな

題しらす　藤原長能

いとふとはしらぬにあらすしりなからこゝろにもあらぬ心なりけり

七月七日二條院の御方に奉らせ給ひける　後冷泉院御製

あふ事はたなはたつめにかしつれとわたらまほしきかさゝきのはし

陽明門院　禎子内親王三條院皇女。後朱雀院后後三條院母后。はしめは一品宮と申治暦五年四月廿八日於閑院院號

あやめ草かけし袂の　端午に藥玉とて菖蒲の根をかくれはかけし袂の根を絶てと也泥を戀路にそへて也久しく皇后の入せ給はぬを戀奉らせ給ふとの心なるへし

藤衣はつるゝ袖の　序歌なから服衣のさまをよめり扨糸よはみたえてとつゝけたり

見るめこそあふみの　水海なれは也たとひあひみる事なくとも音信たにあれかしと也

秋かせになひきなから　一度はあひそめおからうらめしくあはぬ事を葛の裏見るにそへてよめり

後拾遺和歌集第十三

戀三

陽明門院皇后宮と申ける時久く内に入せ給はざりけれは五月五日内より奉せ給ける　後朱雀院御製

あやめ草かけし袂のねをたえてさらにこひちにまよふころかな

ぶくに侍ける頃怨ひたる人につかはしける　清原元輔

藤ころもはつるゝ袖のいとよはみたえてあひみぬほどそわりなき

高階成順石山にこもりて久しうをとし侍らさりけれはよめる　伊勢大輔

見るめこそあふみのうみにかたからめふきたにかよへしかのうらかせ

あひそめて又も逢侍さりける女につかはしける　叡覺法師

秋かせになひきなからも葛のはのうらめしくのみなとか見ゆらん

あからさまに　かりそめなる心暫の心也

こひしきになにはの　京の人の戀しさに何の事もおほえぬ物を誰住ふしとはいふそと也其人とすまれは難波もかひなしと也

又つかへ人あひすみ　輔親の内裏のあひしりたるなり

伊勢の國に　輔親の祭主なれは也

都戀しう　遠古かむすめを戀る也

わかおもふみやこの花　歌林良材云とふさは木の末也しつえは沈める枝也又下枝也我思ふ人のもとの女なれは花のとふさやへ其方もしつ心なからんといはんとてしつえのと木の緣にしよめり

かたしきの衣のすそは　かたしく衣はひとりれの泪に氷てやかてかへり給はん春までは堪かたくおほゆると也

津の國にあからさまにまかりて京なる女に遣しける　大江匡衡朝臣

こひしきになにはの事もおもほえすたれすみよしの松といひけん源遠古かむすめに物いひわたり侍けるにかれかもとにありける女を又つかへ人あひすみ侍けりいせの國に下りて都戀しうおほえけるにつかへ人もおなし心にや思ふらんとをしはかりてよめる　祭主輔親

わかおもふみやこの花のとふさゆへきみもしつえのしつこゝろあらし橘則光朝臣陸奥守にて侍けるにおくのこほりにまかり入とて春なんかへるへきといひをこせて侍けれは女の讃る　光朝法師母

かたしきの衣のすそはこほりつゝいかてすくさんとくるはるまてとをき所なる女につかはしける　藤原國房主殿頭能光子石見守

こひしさは思ひやる　遠き所なれは身はやきやらて心はかりは思ひやりてたにせめて慰む心なるへしかく思ひやりてたに慰むは行てあはゝいかに嬉しからんに心のやくやうに身はえやかぬはつらきと也

人をかへして　行過てのち人を返したるなるへし

いつかたを我なかめ　玉さかにふしきにかく行あひたれはこそ東路とも知てせめて詠やる方もあれかくあらすはいつかたともしらす彌悲しからんとの心也

行かへりのちにあふ　後にはあふ事もあるへけれとも先只今はこれに越る物思ひなしと也別をかなしむ心に關こやる心をそへたるへし

あつまちの旅の空　心は明也

おもひやれしらぬ　月の行衛いつくともしらぬ雲路なからせめて都の方なれは是より外の詠もなきありさまを思ひやれと

こひしさはおもひやるたになくさむを心にをとる身こそつらけれ

人のかたらふ女を恐ひて物いひ侍りけるに物にまかりて歸りける道に此女を男の中へゐて下り侍りけり逢坂の關に行あひてせんかたなく思ひ侘て人をかへしていひつかはしける　大中臣能宣朝臣

いつかたを我なかめまし玉さかにゆきあふさかのせきなかりせはよみ人しらす

返し

行かへりのちにあふともこのたひはこれよりこゆる物おもひそなき　民部卿經信

あつまちの旅の空をそおもひやるそなたに出る月をなかめて　康資王母

返し

おもひやれしらぬ雲路も入かたの月よりほかのなかめやはする　左近中將隆綱左中辯賴任子

おなし人につかはしける

かへるへきほとをかそへてまつ人はすくる月日そうれしかりける　康資王母

返し

あつま屋のかやか下ふしみたるれはいまや月日のゆくもしられす　藤原惟規越後守爲時子

題しらす

霜かれのかやか下おれとにかくにおもひみたれてすくす頃かな　鳴海尾張也

物へまかりけるになるみのわたりといふ所にて人を思ひ出てよみ侍ける

かひなきは猶人しれすあふことのはるかなるみのうらみなりけり　增基法師

とをき所に侍ける女につかはしける

おもひやるこゝろの空にゆきかへりおほつかなさをかたらましかは　右大辨通俊

清家か父の供にあはの國に下りて侍ける時かのくにの女に物いひわたり侍けり父津の國になりうつりてまかりのこりけれは女たよりにつけてつかはしける　よみひとしらす

也

かへるへきほとをかそへてまつ人はすくる月日そうれしかりけるきと也

あつまやのかやか下ふし四阿を東にそへ萱か下臥亂るといひて萱の亂るにそへてかく東に思ひ亂れてあれは我は月日の行過ていつ歸るへき比なとも覺すと也

霜かれのかやか下折　序歌也下明也

かひなきは猶人しれす　逢事の遙なる恨を猶人しれす思へともかひなしと也

遙なる身のうらみに鳴海浦をそへて也

おもひやる心の空に　此おほつかなさを語らはうれしからんと也身はえやきやられは心のみかよふにこの心の思ふ事をかたるよしもかなとの心也

清家か父　伊豫守藤原清家

攝津守範永子

こゝろをはいくたの　生田森津の國也生といふ詞によりて心は津の國生田にかよへさも戀しきには生かたしと也

たのめしをまつに日數　契をきてまつにこすして日數過るに堪かれて命も絶んと也緒のよはきはきれやすき故玉のをよはみ絶ぬへしと也

あさましや見しは夢　かゝるあた人は驚かすともかひあらしとおもふをあまりあたなる逢瀬は夢にて有しかと思ふほとに驚かすにもなりぬへしと也

はる〳〵と野中に　忘水攝津住吉郡序歌也たえま〳〵をなけくといはんための上句也心は明也

いかはかりうれしからまし　面影は我忘ぬからに常に見ゆれはあふ夜をかく常にあらまほしき心也

ひまなきさまをみて　密夫のあふへき隙なきさまをみて也

こゝろをはいくたのもりにかくれとも戀しきにこそしぬへかりけれ

たのめたるわらはの久しう見え侍さりけれはよみ侍ける　律師慶意文章得業生章輔子

たのめしをまつに日數の過ぬれは玉のをよはみたえぬへきかな

源頼綱朝臣父のともにみの、國に下り侍ける後かのくにの女にあひて又をともし侍らさりけれは女のよめる　よみひとしらす

あさましや見しは夢かととふほどにおとろかすにもなりぬへきかな

中納言定頼かもとにつかはしける　大和宣旨大和守藤忠要故流大和中納言惟仲女

はる〳〵と野中に見ゆるわすれ水たえま〳〵をなけくころかな　大納言忠家大納言長家子

題しらす

いかはかりうれしからましおもかけに見ゆるはかりのあふ夜なりせは

男ありける女を恐ひて物いふ人侍けりひまなきさまをみてかれ

我やとの軒の忍ふ〻本の男に忍ふといふによせて忘給へるはうらめしとの心也軒の忍草を忘草ともいはなり

宮にまいりて侍ける　成資

朝臣皇太后宮へまいられと其車の内へなるへしあふことをいまはかきりかきりと見るといひかけて杉のすきにしと重ていはんため三輪山とよめり心は明也五せちに出て五節の事前に委

杉むらといひてしるし　彼

「尋てきませの歌を本歌にて杉村と教て其しるしもなく尋來たまはぬ事と恨む心を女に替りて讀なり

すみよしのきしなられ共人しれぬ心のうちに待さいふに松をそへて也

我やとの軒のしのふに事よせてやかてもしけるわすれくさかな

成資朝臣やまとのかみにて侍ける時物いひわたり侍けりたえて年へにけるのち宮にまいりて侍ける車にいれさせて侍ける　よみ人しらす

あふことをいまはかきりとみわの山杉のすきにしかたそこひしき

五せちに出て侍ける人を必尋んといふ男侍けれとをとせさりけれは女にかはりてつかはしける　よみ人しらす

杉むらといひてしるしもなかりけり人もたつねぬみわのやまもと

題しらす　さかみ

すみよしのきしならねとも人しれぬこゝろのうちのまつそわひしき

おもひけるわらはの三井守にまかりて久しくをとし侍さりけれは讀侍ける　僧都遍救

あふさかのせきのし水逢坂は三井寺に行道なり入にし人の影のみえぬは清水のにたれるにやと也なみたやは又もあふへきつまになる〻へくもあらしにかく思ひあまりてなくに慰むはいかゝとの心也此歌も彼賀宮に密通の顯れての比の歌の由袋草紙にみも又も逢へきつまは逢へきはしならんとの心なりよそ人になりはてぬ畢ぬなるへしそなたの心かはりをうらむとてよそ人になりしとや思ふらんさはあらす恨むも思ふ故なれは忘さる物をとの心也つらしともおもひしらて

あふさかのせきのし水やにこるらん入にし人の影も見えぬは　左京大夫通雅伊周公子

題しらす

なみたやは又もあふへきつまならんなくよりほかのなくさめそなき

かたらひ侍けるわらはのこと人に思ひ付けれは久うをともせて侍けるにさすかにおほえけれはよみてつかはしける　前律師慶遲宇佐大宮司公宣子

よそ人になりはてぬとや思ふらんうらむるからにわすれやはする

わすれじと契りたる女の久しう逢侍さりけれはつかはしける　大中臣輔弘神祇權大副神祇權大輔輔宗子

つらしともおもひしらでそやみなましわれもはてなきこゝろなりせは

久しくとはぬ人のをとつれて又をとせすなりにけれはよめる　和泉式部

はてなきは末とをらぬ心なるへし我もさいふに人の末とけぬ事をこめて我もそなたのことく末とけはてぬ心ならはかく契たかへてあはぬをつらしとも思知まじと也

中〻にうかりしまゝにやみにせはわするゝほとになりもしなましつらしともおもひしらて

中〻にうかりしまゝにやみにせはわするゝほとになりもしなましはてなきは末とをらぬ心なるへし我もさいふに人の末とけぬ事をこめて我もそなたのことく末とけはてぬ心ならはかく契たかへてあはぬをつらしとも思知まじと也

中〻にうかりしまゝにやみにせはとはやみにしならはの心也はしめをとつれぬうかりしまゝにてやみにしならは今は漸

〻忘るべきを又音つれて
絶給へは中〻忘れもやら
すうきさ也

題しらす　源　政成

うき世をも又たれにかはなくさめんおもひしらすもとはぬきみかな

うき世をも我は君によりてこそ
慰むに思ひ知てとひ給ふ
べき事をこの心也是も式
部歌也

物いひわたり侍ける女おやなとにつゝむ事有て心にもかなはさり
けれはよめる

あふまてやかきりなるらんと思ひしをこひはつきせぬものにそ有ける

あふまてをかきりなるらん
逢てのちも猶戀しき心な
るべし

三條院皇女常子内親王
伊勢の齋宮わたりより（いまかりのほり）のほりて侍ける人に忍ひてかよひける事を
天子也
おほやけもきこしめしてまもりめなとつけさせ給ひて忍ひにもか
よはすなりにけれはよみ侍ける　左京大夫道雅童名松君

あふ坂はあつまちとこそ
聞給ふを逢
坂の關になそらへて心つ
くしなる事を歎きたる心
也

あふ坂はあつまちとこそきゝしかとこゝろつくしのせきにそありける

さかき葉のゆふしてかけしそのかみにをしかへしてもわたるころかな

さかき葉のゆふして此内
親王はしめ齋宮にておは
しける時榊に木綿かけな
ときよまはりて男女の語らひなかりしそのかみをふたゝひ押返したるこゝろく逢奉らて過る歎きなるへし

いまはたゝおもひ絶なん人逢事はかなはされは今は只思ひ絶なんと斗をたに人傳ならて直に申度と也

みちのくのをたえの橋は蹈縁（フムエン）にて文見るにも見ぬにも心をまとはす事をいはんとて也袋草紙云おほやう心にしみぬる事

いまはたゝおもひたえなんとはかりを人つてならていふよしもかな

又おなし所にむすひつけさせ侍ける

みちのくのをたえの橋や是ならんふみゝふまずみこゝろまどはす

〻には宜き歌出來る物也道雅三位はいと歌仙とも不聞に齋宮密通の間の歌は多秀逸也是志在レ中詞顯レ外之謂歟此事榮花物語十二十三の巻に委

こひしさも忘れやはてゝさまに成てのち石山にこもりあひて侍ける

こひしさも忘れやはする中ふにこゝろさはかすしかのうらなみ

さまに成ても忘れす戀し
きはかく籠合て中〻心さ
はくと也波驚く緣也

前大納言經輔帥隆家子

中納言定頼いまは更にこじなといひて歸りてをともし侍らさりけ
れは遣しける　さかみ

こしとたにいはでたえなはうかりける人のまことをいかてしらまし

こしとたにいはてたえ　更
に來じといひてのち誠に
こさりけれは其人のまこ
とをこれにて知たりさも
いはて絶たらは知さらん
といひてうき事にのみ誠
有て今迄誠は見さりし事
ないへり

心さし侍ける女のことさまに成てのち石山にこもりあひて侍けれ
はよみ侍ける

たか袖に君かさぬらんから衣よな〳〵われにかたしかせつゝ　和泉式部

たか袖に君かさぬらん
おとこに忘られてさうそくなとつゝみて送り侍けるにかはの帶に
かたしかせて君は又誰と夜々ぬるらんと也

くろかみのみたれもしらす打ふせはまつかきやりし人そこひしき　清原元輔

くろかみのみたれ
うつりかのうすく
うつりかのうすくなりゆく燒物のくゆるおもひにきえぬへきかな

ある女に

物思ひにぼけ果て髪のみたるゝも知すふすにつけても先是をかきやりれたりし人の戀しきさ也

れし夜の名殘のうつりがのあはて程ふるまゝにうすく成に付ても思ひきゆへきさ也

なきながす涙に〻涙に堪すして結付侍ける　和泉式部

なきながす涙にたへでたえぬれはなたのおひのこゝちこそすれ

題しらす　さかみ

中たゆるかつらき山のいは橋はふみ見る事もかたくそ有ける

二條院に侍ける人のもとにつかはしける　大貳良基中納言藤原頼子參議

わすれなんとおもふさへこそ思ふことかなはぬ身にはかなはさりけれ

題しらす　高階良成

忘れなんと思ふにぬるゝたもと哉こゝろなかきはなみたなりけり

大納言忠家母遠江守源高雅女從三位懿子

いかはかりおほつかなさをなけかましこのよのつねとおもひなさすは

權僧正靜圓三井二條關白子

あふことのたゝひたふるの夢ならはおなしまくらに又もねなまし

心ちれいならす侍ける頃人のもとにつかはしける

人の疎くなるも世のつれの習と思ふにこそなくさむれとの心也

ひたふるは一向におなし逢事の一向に夢ならは見し夜の同枕に又もれてみん物をと也

あらさらんこのよのかくては死なんするにさもなくならん來世の思ひ出に今一度逢まほしと也扨も又あはてやなくならんといふ心をこめて哀なる歌なるへし

みやこにも戀しきもの往んを生んとそへてかく煩とも生て京に行て逢みんとの心也

ちきりしにあらぬつらさ契たるやうにもあらすかはりてつらきをも逢てこそ恨むへけれあはてはいかていはんと也

わすれなんそれも恨す忘るゝをも我は恨す只そなたをのみ思ひ戀(コフ)べしせめて思ふらんこふらんと思ひをこせたにせよと也

年の中にあはぬ年に一たひもえあはれは七夕にも我は忌れんと也

七夕をもとかしとのみ心は明也イネもとかしと思ふ我身しもと有

あらさらんこのよのほかのおもひでにいまひとたひのあふこともかな

父のもとにこしの國に侍ける時おもく煩ひて京に侍ける齋院中將此集作者　藤原惟規

かもとに遣しける

みやこにも戀しきことのおほかれはなを此たひはいかんとそおもふ

心かはりたる人のもとに遣しける　周防内侍

ちきりしにあらぬつらさも逢事のなきにはえこそうらみさりけれ

題しらす　西宮前左大臣

わすれなんそれもうらみす思ふらんこふらんとたにおもひをこせよ

七月七日女のもとにつかはしける　藤原道信朝臣

年の中にあはぬためしの名をたてゝわれたなはたにいまるへきかな

七夕をもとかしとのみわか見しもはてはあひみぬためしとそなる

增基法師

くもてさへかきたえ　蜘手とは蜘の糸かくるたよりの所也逢たよりもなきたさへ成へし

題しらす　馬内侍

くもてさへかきたえにけるさゝかにのいのちをいまはなに、かけまし

後拾遺和歌集第十四

戀四

心かはり侍ける女に人にかはりて　清原元輔

ちきりきなかたみに袖をしほりつゝするのまつやま波こさじとは

中納言定頼かもとにつかはしける　公圓法師母

あしのねのうき身の程と知ぬれはうらみぬ袖も波はたちけり

としころあはぬ人にあひて後につかはしける　道命法師

あひみしをうれしき事とおもひしもかへりてのちのなけきなりけり

題しらす　藤原元眞

みやま木のこりやしぬらんと思ふまにいと、おもひも、えまさるかな

いはしろの森のいはしとおもへともしつくにぬる、身をいかにせん　惠慶法師

ちきりきなかたみに　此五文字契しよなといふ心也

かたみはたかひに也かく思かはす中ももしかはらはなど悲しみつゝ必かはるなかはらじなさたかひに袖をしほりて契ては有しよな。扨其詞の末はいかゝし給へるぞと心をふくめ恥しめたる心也末の松山の波越る事前に註

あしのねのうき身の　うきは池なさを云也うき身をつゝけんとて芦のねのとをけり心は明也

あひみしなうれしき　心は明なるへし

みやま木のこりや　我に逢し事をこりけんと思ひやるまにわが思ひはいとゝもえまさるさ也深山木を樵(コル)にそへてもえまさるさ也

いはしろの森のいはしと　岩代森紀伊國也　いはしといはん枕詞也　雫にぬるゝは森の絲にて思ひあまる恨に袖のぬるゝ心也

あちきなし我身に　人の戀路に身を捨るを見てはあちきなしともどきし物を身の上にはまことに身にかへておもふよと也

我といかにつれなく　我もつれなくつらくは人の忘るましきかこゝろみんに我といかにしてかつれなくなりてましと也

あやしくもあらはれ　心は明なるへし忍ひあまる思ひを歎く心也

うちしのひなくと　心は明也

こひすともなみたの　戀には泪のいろのわりなくかはりてやかて人にもをしはかりしらるゝ歎き也

人しれぬこひにしなは　心は明也古今戀死なはたか名はたゝし世の中の常なき物といひはなすとも

人しれすかほには袖　心は明なるへし

あちきなし我身にまさる物やあるとこひせし人をもときしものを　　そねのよしたゝ

和泉式部

我といかにつれなくなりて心みんつらき人こそわすれかたけれ

忍ひて物おもひける頃によめる　　さかみ

あやしくもあらはれぬへきたもと哉しのひねにのみぬらすとおもへは

西宮前左大臣

うちしのひなくとせしかと君こふるなみたはいろにいでにけるかな

承暦二年内裏歌合によめる　　辨乳母

こひすともなみたの色のなかりせはしはしは人にしられさらまし

題しらす　　源道濟

人しれぬこひにしなはおほかたの世のはかなさと人やおもはん

恐ひたる女に　　堀河右大臣

人しれすかほには袖をおほひつゝなくはかりをそなくさめにする

おもひわひかへす衣の　夜の衣を返して夢に見んとする袂より泪の氷のちるを也五文字深切なる心あり心をつくへし衣を返すといふにて夜の戀の心也

なくさむる心はなくて　夢にも見て慰めんとすれと夢にもみれは慰る心はなくて只泪のみこほるゝ心也

世の中にあらはそ　死ましかはうき人もあはれまんとおもふにしも命にかけてつらき戀哉と悲き心なるへし

よな〳〵はめのみさめ　いれす思ひあかす心の君をも驚かすへきにやと也

おもふてふ事はいはて　いひ出ぬさきも思ひはせしかは今いひ出てつらしとてこと思ひにもあられはさしてつらしとも思はしと也つらき思ひのそはぬにはあられと人はいひしかひもなけれは我と慰めてかく讓心なるへし

おもひやるかたなき　あまりやるかたなきまゝに忘れんと思へと忘られれはかくよめる心也

冬夜の戀をよめる　　藤原國房

おもひわひかへす衣のたもとよりちるやなみたのこほりなるらん

題しらす　　清原元輔

なくさむる心はなくてよもすからかへすころものうらそぬれける

世の中にあらはそ人のつらからんとおもふにしもそ物はかなしき　　よみ人しらす

よな〳〵はめのみさめつゝ思ひやるこゝろやゆきてをどろかすらん　　道命法師

おもふてふ事はいはても思ひけりつらきもいまはつらしと思はし　　平兼盛

男のたえて侍けるにほとへてつかしける　　中原頼成妻

おもひやるかたなきまゝに忘れゆくひとのこゝろそうらやまれける

ねやちかき梅のにほひ　師説古今「宿近く梅の花うへじを本歌也

題しらす　能因法師

ねやちかき梅のにほひにあさな〳〵あやしくこひのまさるころかな

あやうしと見やるさ絶（タエ）人のさ絶をく中の危（アヤウキ）にさま〳〵物思ひて我何とてかやうの物思ひするそはかなしやと思ひ返す心を橘の縁語にて讀也

相摸

あやうしと見ゆるとたえのまろ橋のまろなとかゝる物おもふらん

世中に戀てふ色は　心は明也

和泉式部

世の中にこひてふいろはなげれともふかく身にしむものにそありける

さゝかにのいつくに人は　さゝかにのいさゝひかけて細きも其縁也心は明也

清原元輔

あり所しらぬ女に

さゝかにのいつくに人はありとたにこゝろほそくもしらてふるかな

こひしさのうきに　人のうきをうきとおもふに戀しき心のまきるゝ物ならは又二たひとは君を見待らんや又見ましけれとうきにまきれねゝへ又遠見たきさ也

ほり川の右大臣のもとにつかはしける

大貳三位

こひしさのうきにまきるゝ物ならは又ふたゝひと君を見ましや

あれはこそ人もつらけれ　死たらはうき人もよもあはれと思はてはあるましきに命なからへは又あふ事もあらんと頼むはあやしきさ也

題しらす

藤原有親（伊豫守元尹子内匠頭）

あれはこそ人もつらけれあやしきはいのちもかなとたのむなりけり

庭のおもの　物思ふ袖のよはの露けさを萩にて知らんさ也

露をきたる萩にさして女のもとにつかはしける

源道濟

わか袖を秋の草葉　心はあきらか也

庭のおもの萩のうへにて知ぬらん物おもふ人の夜半のたもとを

ありそ海のはまの　獨ぬるよの物思ひの數はかきりなけれは何を數とりにせん有磯海の濱の眞砂を皆〳〵ほしきさ也

題しらす　さかみ

わか袖を秋の草葉にくらへはやいつれか露のをきはまさるとかそふれはそらなる　九曜七星廿八宿なとの星もかそへしらるれと人のつらさの數はかそへられぬさの心なるへし

ありそ海のはまのまさこをみるもかなひとりぬるよのかすにとるへく

藤原長能

つれ〳〵さおもへは長き　心は明也優なる歌なるへし

かそふれはそらなるほしもしる物をなにをつらさの數にとらまし（たかゝ）

二月はかりに人のもとに遣しける　藤原道信朝臣

ひたすらに軒のあやめ　上は序也つく〳〵と思ひつゝけて音をなく心をかくよめり

つれ〳〵とおもへはなかき春の日にたのむこゝはなかめをそする

五月五日に人のもとに遣しける　和泉式部

たくひなくうき身なりけり思ひ知人たにあらはとひこそはせめ

ひたすらに軒のあやめの　たくひなくうき身　戀のうきを思ひ知人たにあらは問こそすへきに問ものもなきは我たくひは世になくうき身さ也

ひとつもうせぬ物にそ有ける

きみこふる心はちゝに　心明也

きみこふる心はちゝにくたくれとひとつもうせぬ物にそ有ける

泪川おなし身より　こひを火にそへて心は明なるへし　なみた河おなし身よりはなかるれとこひをはけたぬ物にそ有ける　小辨

我こひはますたの池のうきぬなはくるしくてのみとしをふるかな　源道濟

田池大和也浮草はくるといふ縁あれは苦しとの枕詞也

おほかたにふるとそ見えし五月雨はものおもふ袖の名にこそ有けれ　西宮前左大臣

おほかたにふるとそ　泪のおほき事をよめり

よそにふる人は雨とやおもふらんわか目にちかき袖のしつくを　藤原元眞

よそにふる人は雨とや　心はあきらか也

日にそへてうき事のみもまさる哉くれてはやかてあけすもあらなん　天德四年内裏歌合によめる

日にそへてうき事　日にそへて人のうき事まされはあすはいよ〳〵まさりやすへきなれはけふ暮てはやかてあけすもあれかしと也

きみこふとかつはきえつゝふる物をかくてもいける身とやみるらん　題しらす

きみこふとかつは　戀にかつ消つゝありふる物を猶生たる身とやみるらんかくつらきはとの心也

戀しさのわすられぬへき物ならはなにしかいける身をもうらみん　中納言定頼かもとにつかはしける　大和宣旨

戀しさの忘られ　生るかきりはえ忘るましき戀なれは生てかひなき身をうらむる心よりかくよむなるへし何しかは何にかとおなしこと助字也

こひしさをしのひも　戀しさを忍ひもあへすれにもたてつゝうつゝの心もなく成しと也イ忍ひもあへぬ空蟬のはせみのれにな〳〵く事をそへてなるへし

こひしさをしのひもあへすうつ蟬のうつしこゝろもなくなりにけり　小辨

きみかためおつる心は明也

かもとにつかはしける　民部卿經信

ちきりあらはおもふかきみかためおつるなみたの玉ならはつらぬきかけて見せまし物を　題しらす　西宮前左大臣

ちきりあらはおもふ　君と我前世に契りある中ならは我思ふか如く君も思はんに君はおもはて我のみ思ふはあやしや何の報ひそと也

けふしなはあすまてはおもふかことそ思はましあやしやなにのむくひなるらん　女に遣しける　入道攝政

けふしなはあすまて　死なんと思ふにさへかなはぬかうきと也

思ひにはけふしなはあすまて物はおもはしとおもふにたにもかなはぬそうき　題しらす

思ひには露の命　日影に露の消るをそへて思ひに露命消へきを言葉にかけて哀とたにいへとの心也露は葉にかゝるものなれは也

思ひには露のいのちそきえぬへきことの葉にたにかけよかしきみ　さかみ

やくとのみ枕のしたにしほたれてけふりたえせぬとこのうらかな　永承六年内裏歌合に

やくとのみ枕　役とれに鳴思ひを鹽やくにそへて也

うらみわひほさぬ袖たにある物をこひにくちなん名こそおしけれ　題しらす

うらみわひほさぬ　離面き人を恨てほすまなき袖のやうく朽もけは扨もかくうき人故にかひなき袖をくたすさへあるに

はかなき戀やへ名をさへ　神な月夜半のしぐれにごとよせてかたしく袖をほしそわづらふ
くたさん事よと也　和泉式部

神な月夜半の　時分から哀

深きにや　さま〳〵におもふこゝろはある物ををしひたすらにぬるゝ袖かな
さま〳〵におもふ心は　思　藤原長能

ひはさま〳〵なるに袖は
一向にぬるゝと也

わか心かはらん物か　わきかへり思ふ心のあらたまる事もなき歎き也かはらん物か瓦屋の下たくなさ詞つかひ心をつくべし

わか心かはらんものかかはら屋のしたたくけふりわきかへりつゝ
かれ〳〵になり侍ける男によめる　藤原範永朝臣女

うちはへてくゆるもくるしいかてなを世にすみかまのけふりたえなん
題しらす　いつみしきふ

人の身も戀にはかへつなつむしのあらはにもゆと見えぬはかりそ
がるもかきふすゐのとこのいをやすみさこそねられめかゝらすもかな
女のもとにつかはしける　入道攝政

かるもかきふすゐの　童蒙抄云かるもさは枯たる草也其草をかき集めて猪はふす也猪の永居さて七日迄伏さいへり愚案伏猪
もやすくれられんに我は戀にれられぬをかくあらすも哉と也ィれさらめは序歌也我戀にさこそれられさらめ是迄にはあ
らすともと也

我こひは春の山へに　戀を火にそへて春の山やく事によせて也

春の野につくる　方々の野火なれはと也

春日野は名のみなり　春日野の烽火前抄註かすかの〻とふひは名はかりにて今はもえす我身こそといふ儀也

いつとなく心そらなる　心はあきらかなるへしいつとなくといふ五文字より富士をよせたるにや古今に「人しれぬおもひを常にするかなる」後撰に「戀をのみ常にするかの山なれはなとよみしよせなるへし

うしとてもさらに思ひそ　戀は表裏なく直なる物にてうしとて思ひかへし變改しかたしと也

なにはかた汀の芦の　序歌也芦の生るといひかけて老の世にと也　老て人にもきらはる〻と恨てふるこ也　老人にかくあるへき事かはとの心也浦見てといふをそへて也

我こひは春のやまへにつけてしをもえても君かめにもみえなん

返し　大納言道綱母

春の野につくる思ひのあまたあれはいつれをきみかもゆるとか見ん

おなし女に　入道摂政

春日のは名のみなりけり我身こそとふひならねともえわたりけれ

永承四年内裏歌合によめる　相模

いつとなく心そらなるわかこひやふしのたかねにかゝるしら雲

堀河右大臣

うしとてもさらに思ひそかへされぬこひはうらなき物にそ有ける

つらかりける女に　平兼盛

なにはかたみきはの蘆のおひの世にうらみてそふる人のこゝろを

題しらす　源重之

松しまやをしまの磯に　玄旨云松嶋や雄嶋とつくる時は皆すみてよむへしと也心は明也

かきりそとおもふに　うき人の心は是まてそと思ふに泪は限もなしと也くちぬはかりは朽ぬるほとに也不のぬにあらすとそ

かきくらし雲間もみえぬ物思ひたえぬ身の泪つきせぬをかくいへり

なみたこそあふみの　見る事なきを湖水には海松和布ふきにそへて也なかめせしは物思ふかたち也小町か歌の詞なるへしィなけきは心明也

しらつゆもゆめもこの世もまほろしもたとへていはゝひさしかりけりも久しと也

松しまやをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

盛少將

かきりそとおもふにつきぬなみた哉をさふる袖もくちぬはかりに

藤原長能

雨のふり侍ける夜女に

かきくらし雲間も見えぬさみたれはたえす物おもふわか身なりけり

題しらす　さかみ（なけきィ）

なみたこそあふみのうみとなりにけれ見るめなしてふなかめせしまに

露はかりあひそめたるおとこのもとにつかはしける

和泉式部

しらつゆもゆめもこの世もまほろしもたとへていは（いへはィ）、ひさしかりけり

みなはかなく久しからぬ物をあけて我此露はかりあひてあかずはかなき中にたとへていはゝ是

雜　四季戀哀傷なとさまくゝましはれり

としふれはあれのみ　をとろへたる家のあれまさりて誰とふ人もなく成やくに月は猶むかしにかはらすゝめは心長くもとよめり是も荒たる宿のすきまかちなるさまをいへるなるへし

月かけのいるをおしむも心は明也

我ひとりなかむと思ひし世に述懷有て山居して月をみてよめるにや我一人思ふ事有て山居せりと思へは何思ふ事あるましき

月もすめりと也

みなれさほとらてそ　月のさすを舟さすにそへて月に乘して竿もとらさるさま優なるにや

月かけのかたふく　月の西にかたふくにつけて池水も西へなかれて月をさそふかとおもふ心也

後拾遺和歌集第十五

雜一

たいしらす　善滋爲政朝臣

としふれはあれのみまさる宿の内にこゝろなかくもすめる月かな

宇治忠信母（女ィ）諸陵頭高階資長女

月かけのいるをおしむもくるしきに西には山のなからましかは

藤原爲時

我ひとりなかむとおもひし山里におもふことなき月もすみけり

舟中月といふ心をよみ侍ける（もイ）　源師賢朝臣

みなれさほとらてそくたす高瀨舟月のひかりのさすにまかせて

池上月を讀る　良遲法師

月かけのかたふくまゝに池水をにしへなかるとおもひけるかな

後冷泉御時きさいの宮にて月をよみ侍ける　大倉卿長房

月かけは山のは出る　更行空は夜も閑に心も澄まされは月も照まさる心ちするにや此歌長房卿秀歌三首の一首と袋双紙にみやしきたへの枕のちりや　連夜はよをつられて也幾夜もいれす見あかせは枕に塵もつもらんと也月のさかりは十四夜より廿日比まてをいふといへり

輔親か六條の家　海橋立是也前註

家のつまに出ぬて　はしつかたに輔親の月を詠ぬし也

同し心にもなと　懐圓の尋來ると輔親のおきぬたると月を愛する事同心と也

池水はあまの川にや　秋水天をうかへて月のすみとをれるを愛してよめり折ふしと所からとを思ひやりて見侍るへし歌の心はあきらか也

いつかたにやくとも　雲あれは月のやく事見えやすし青天には月のやくとは見えさるさま也

月かけはやさのは出るよひよりもふけゆくそらそてりまさりける

連夜看レ月ニミルヲといふ心をよみ侍ける　源頼家朝臣

しきたへのまくらのちりやつもるらん月のさかりはいこそねられね

月のいとおもしろう侍ける夜きしかたゆく末も有難き事なと思ふ月の面白事也

給へてうちより輔親か六條の家にまかれりけるに夜更にけれは人もあらしと思ひ給けるに住あらしたる家のつまに出居て前なる池に月のうつりて侍けるを詠めてなん侍ける同し心にもなといひてよみ侍ける　懐圓法師

池水はあまの川にやかよふらんそらなる月のそこに見ゆるは

中納言泰憲近江守にて侍ける時三井寺にて歌合し侍けるに月をよめる　永胤法師

いつかたにゆくとも月の見えぬかなたなひく雲のそらになけれは

永承四年内裏歌合に月をよめる　江侍從

いつよりもくもりなき夜

いつにすくれての心也雲にいる物なれと雲なけれは月の入所なきに見る人もあかて入かたきと也

山の端のかゝらましかは

池水には月の入ともかくれす山の端もかくあらましかはよからんと也ィいるとも月はかくれさらましも月はかくれさりけりしは山の端の池のことくならはこの心にややとことにかはらぬ　心は明也

われひとりなかめて　おほろは大かたなる心也今宵の月のおほろけならさるやへに客來て諸共に詠るとの心なるへし

賀陽院　高陽院と同し拾芥云高陽院中御門南堀河東南北二町南一町後入二賀陽親王家一云々　榮花物語卅六云高陽院殿のありさまいと面白くおかし西對を例の清涼殿にて寢殿を南殿なとにてこしん殿とて又いとおかしくてさし双ひ山は誠の奥山と見え瀧こくらき中よりおち池のおもて遙に澄渡り左右の釣殿なとなへてならすおかし下略

岩まよりなかるゝ水　心明也所のさま思ふへし

いつよりもくもりなきよの月なれは見る人さへにいりかたきかな

麗景殿女御家の歌合に　麗景殿ノ昭子後三條院女御頼宗公女　堀河右大臣頼宗公女御父君

山の端のかゝらましかは池水にいれとも月はかくれさりけり

題しらす　加賀左衛門

やとことにかはらぬ物は山のはの月まつほとのこゝろなりけり

依月客來ニカクルといふ心をよめる　永源法師

われひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のおほろなりせは

賀陽院におはしましける時石たて瀧おとしなとして御覽しける頃　高イ

九月十三夜になりにけれは　後冷泉院御製

岩まよりなかるゝ水はやけれとうつれる月の影そのとけき

月の夜中納言定頼かもとにつかはしける　彈正尹清仁親王ノ井ンキヨヒトノ花山院御子

板まあらみあれたる宿のさひしきにこゝろにもあらぬ月を見るかな

其夜返しはなくて二三日はかりありて雨の降けるにみこのもとに

つかはしける　中納言定頼

雨ふれはねやの板まもふきつらんもりくる月はうれしかりしを

人のもとより今夜の月はいかゝといひたる返事につかはしける　藤原範永朝臣

月見ては誰もこゝろそなくさまぬをはすてやまのふもとならねと

おほやけの御かしこまりにて侍ける頃賀茂の社による〳〵まいり

ていのり申けるに月おもしろく侍けれは　賀茂成助（神主成真子前註）

かくはかりくまなき月をおなしくはこゝろもはれて見るよしもかな

くらまより出侍ける人の月のいとおかしかりけれは鞍馬の山もか

くこそはなと思出けるを聞て　齋院中務（齋院長官爲理女）

すみなるゝみやこの月のさやけきになにかくらまの山はこひしき

かくはかりくまなき月をおなしくはこゝろもはれて見るよしもかな

くらまより出侍ける人の月のいとおかしかりけれは鞍馬の山もか

くこそはなと思出けるを聞て　齋院中務（齋院長官爲理女）

すみなるゝみやこの月のさやけきになにかくらまの山はこひしき

住馴るに澄といふ詞をそへてくらまを聞き心にそへてかくすみなるゝ都の月をみて何にくらまのこ

ひしきそと也

もろともに山のは　諸共に出し月なれは都に在なからもわすれすと也

あまのはら月は　心は明也

むかしの世に夜の字をそへたるへし

いつとてもかはらぬ　月は秋ことにいつにかはらぬをみるに付てもかはれるむかしのこひしきと也

さきの藏人　六位藏人の巡爵にあつかりて藏人をおりたるをいふなるへし

つれよりもさやけき　叙爵しなから藏人なられは殿上をおりてもとの地下となる事なれはあはれこひしき雲の上哉と也藏人にて昇殿せし時をこふれは懐舊の頌の心也

法住寺　拾芥云法性寺北太政大臣爲光建立

返し

もろともに山のは出し月なれはみやこなからもわすれやはする

月のあかく侍ける夜小一條のおほいまうちきみむかしをこふる心（真信公也）

をよみ侍けるによめる　清原元輔

あまのはら月はかはらぬそらなからありしむかしのよをやこふらん

月のまへにおもひをのふといふ心をよみ侍ける　藤原實綱朝臣

いつとてもかはらぬ秋の月見れはたゝいにしへのそらそこひしき

さきの藏人にて侍ける時對月懐舊といふこゝろを人〻よみ侍けるに　源師光（美濃守頼國子信濃守五位）

つねよりもさやけき秋の月をみてあはれこひしき雲のうへかな

齊信民部卿のむすめにすみわたり侍けるにかの女身まかりにけれは法住寺といふ所にこもりゐて侍けるに月をみて　民部卿長家

もろともになかめし人も
なかめし人は北の方也我
もなきさは今法住寺に有
て宿には居給はれば也
月見みれは山のは高く　か
く月はとく出て山のは高
く成しを月出はむかへに
こんといひし人に見せは
やと也ィつけはや猶面白
きにや
山のはに入ぬる月の　世を
捨て山に入まてこそかた
けれ一たひ入とならは又
はうき世に出ましきに月
は又いつる事よと也思ふ
事有と云に心を付へし
山に住侘て　比叡山也
むかし見し月のかけにも
知人もなく栖もことなれ
と月は山にもかはられはわれとともに山を出しにやと也
うちの御物忌に籠る　禁中の御物忌にはおろしこめて外人まいらす只侍臣なと御とぎにこもる事をいふと也
女にかはり　赤染の妹也

もろともになかめし人も我もなきやとにはひとり月やすむらん
兼房朝臣月いてはむかへにこんとたのめてをこもせさりけれはよ
み侍ける　江侍従
月見れは山のはたかくなりにけりいてゝとゝいひし人に見せ(つけィ)はや
おもふこと有ける頃山寺に月を見て讀侍ける　源爲善朝臣
山のはに入ぬる月のわれならはうきよの中に又はいてじを
山にすみわつらひてなら(東大寺)にまかりて住侍けるに知たる人もなく又
見し世のすみかにもにさりけれは月の面白く侍けるを詠て讀る　聖梵法師東大寺
むかし見し月のかけにもにたるかなわれとともにや山をいつらん(てけィ)
中關白少將(道隆公)に侍ける時うちの御もものいみにこもるとて月のいらぬ
さきにと急き出けれはつとめて女にかはりて遣しける

いりぬとて人の急　出てのちは中關白の出給ひしのちも猶久く月は入さりしにさも急きて歸り給ひし事よと恨む心なるへし
こゝろにもあらてうき世に玄旨云此御遊例故御位さらんと思召に若不意に御命もながらへさせ給はゝ此禁中の月はいか斗戀しく思召れんとなるへし此帝は御位も纔五年にて行末遠くもと思召へきをおりゐさせ給はんの御心誠に御名殘おしく思召へきにこそ其心をよく思入て此歌を見るへしとそ
いまはたゝ雲ゐの月をいかなる勅言もへかくめくり逢へきほともしられすとよませ給ふは知かたけれと大かたの風情哀なる歌にや
なをさりの空たのめ　小式部のやうに等閑の偽なくとの心也
たのめすはまたてぬる　我たのめたれはこそおきて此月をみ給へと也面白き返歌と也

いりぬとて人のいそきし月かけは出ての、ちもひさしくそ見し　赤染衛門
れいならすおはしましして位なとさらんとおほしめしける頃月のあ　三條院御製冷泉第二御在位五年云々
か、りけるを御覽して
こ、ろにもあらてうき世になからへは戀しかるへき夜半の月かな
後朱雀院御時月のあか、りける夜うへにのほらせ給ひていかなる　陽明門院三條院皇女後朱雀院后
事か申させ給けん
いまはたゝ雲ゐの月をなかめつゝめくりあふへきほともしられす
こんといひてこさりける人のもとに月あか、りける夜つかはしける　小辨
なをさりのそらたのめせて哀にもまつにかならすいつる月かな　小式部
返し
たのめすはまたてぬるよそかさねましたれゆへか見るありあけの月

たれとてかあれたる　誰ともしらぬ人のうちつけなる事の給ふとの心をこめたるへし

よしさらはまたれぬ身　をきながらはさしをきつゝなといふ心也我はさしをきつゝかやうの面白き月を見すしてれ給へるやさしからぬ君か名のたゝん事いかゝと也

なかむれは月かたふきぬ　よはひやう〳〵かたふきて此世にあるほともかほとならんと月の入方に觀したる心也

ひろ澤に　遍昭寺なるへし　寛朝僧正の寺也

山のはにかくれなはてそ　侍從尼を月に比して廣澤にこもる事を云也

もろともにおなしうき　西方は安樂世界諸人のれかふ所也　我も月も同しうき世にすみなかられかひても往生しかたきに月

月あかく侍ける夜はしとみに女ともの立て侍けるを男まいらんなといひいれさせて侍けれはよめる　よみひとしらす

たれとてかあれたるやと、いひなから月よりほかの人をいるへきこよひ必とたのめたる女のもとに月あかゝりける夜まかりて侍けるにおろしこめて女逢侍さりけれはかへりて又の日つかはしける　藤原隆方朝臣（但馬守備中守隆光子）

よしさらはまたれぬ身をはをきなから月見ぬきみか名こそおしけれ

月の山のはにいらんとするを見てよみ侍ける　僧正深覺（右大臣師輔公子東大寺）

なかむれは月かたふきぬあはれわかこの世のほともかはかりそかし

侍從のあまひろ澤にこもるとき、て遣しける　藤原範永朝臣

山のはにかくれなはてそ秋の月この世をたにもやみにまとはし

月をみてよみ侍ける　中原長國妻（前石見守頼方母）

もろともにおなしうき世にすむ月のうらやましくも西へゆくかな

は浦山しと也

れ待の月　十九日月也蜻蛉日記に外にかよひて此比類に夜枯の由みゆ

いかにせん山のはにたに　我もと、そこまり所なれは山の端に比してこゝにたにとまらて心空にして外に出ん月はせんかたもなしと也

くもるよの月と我　曇る月のゆくゑと我身のたのもしけなき人をたのむ行末とおほつかなきほとはいつれまされりけんと也

うへのおほとのこもり　帝の御寢なりし也

かくれぬにおふる　一二句は序歌也かくたのもしけなきうきねのはては難面くてやむ事よと也

河かみやあらふの池の　阿羅布池所未勘序歌也うき事ありやくる人もなしといはんためなるへし

六條齋院　禖子内親王後朱雀院皇女少くおはしませと歌をめてたくよませ給ふ候ふ人々も題を出し歌合をしなと榮花物語

入道攝政物語なとしてね待の月の出るほとにとまりぬへきになと　攝政の詞也

いひたらはとまらんといひ侍けれは讀侍ける　大納言道綱母

いかにせん山のはにたにと、まらてこゝろのそらにいてん月をは

月の朧なりける夜入道攝政まうてきて物語し侍けるにたのもしけなき事なといひ侍けれはよめる

くもるよの月と我身のゆくすゑとおほつかなさはいつれまされり　此てには前に註

村上の御時うへにのほりて侍けるにうへおほとのこもりにけれは歸りおりてよみ侍ける　齋宮女御

かくれぬにおふるあやめのうきねしてはてはつれなくなるこゝろかな

題しらす　曾禰好忠

河かみやあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなし

六條前齋院に歌合あらんとしけるに右に心よせありとき、て小辨

廿七にあり

あらはれてうらみや　右に心よせの歌を汀によせさそへてよめり

きしとをくたゝよふ　右とも左ともよろかたなき歎をせしに右に心よせなさは思はすなるうらみ哉との心也

六條前齋院に物語合　榮花物語廿七に禖子内親王の御事を云に。物語合とて今新く作て左右かた分て廿人合せなとせさせ給云々

ひきすつる岩かき沼　方の人々の小辨か物語をとめたるを引すつるとよめりけふの端午の物語合にあはんとも思はさりしに太政大臣の御陰にて逢事よと也

はゝきの國　伯耆也

やかはこそあはても　帚木は伯耆をそへていへり　奥儀抄云しなのゝ國其原ふせやと云所に帚のやうなる木の楢のよそにてかもとにつかはしける　小式部

あらはれてうらみやせまし隱ぬのみきはによせし波のこゝろを　小辨

かへし

きしとをくたゝよふ波は中そらによるかたもなきなけきをそせし

五月五日六條前齋院に物語合し侍けるに小辨をそく出すとてかた方人也小辨か物語をさゝめて也の人〻とめてつきの物語を出し侍けれは宇治の前太政大臣かの小辨か物語は見所やあらんとてこと物かたりをとゝめて待侍けれは　左右の頼道公

いはかきぬまといふ物語をいたすとてよみ侍ける

ひきすつる岩かきぬまのあやめ草おもひしらすもけふにあふかな

はゝきの國に侍けるはらからの音し侍らさりけれはたよりにつけてつかはしける　馬の內侍

ゆかはこそあはてもあらめはゝきゝのありとはかりはをとつれよかし

わつらふ人の道命をよひ侍けるにまかりて又の日いかゝとふらはみやるか木の木へ行ぬれはいづれの木とも見えさる也云々　榮花　されは此歌もやかはこそあはてもあらめと讀也下句は明也彼「そのはらやふせやに生る帚木の有とはみえてあかぬ君哉を本歌にて也おもひ出てとふ言の葉　とはぬつらさに命堪すして身まかりなはけふかく思ひ出てとひ給ふ言葉を誰有てみるへきつらくきのふおはせさりし事よと也やまさとにたつねて　一たひとひてたのめさせて又をとせれはかへりてつらき思ひそふ心をかくよむなるへし

ゆめのことおほめかれ　ゆめのおほつかなきかことくおほめかるゝ世のはかなきにとくとへかしとの心なるへし

ふみ見ても物思ふ　眞野繼橋津の國也橋のと絶は蹈て危き思ひするやうに人のと絶置を歎く心也

けはひのかはり　形勢氣色のかはるとも同心也

ひに遣したりける返事に　よみ人しらす

おもひ出てとふことのはを誰見ましつらきにたへぬいのちなりせは

わつらひて山里に侍ける比人のとひて侍けれと又をとこもせすなりにけれは　中務典侍

やまさとをたつねてとふと思ひしはつらきこゝろを見するなりけり

むまのないしかもとにつかはしける　齋宮女御

ゆめのことおほめかれゆく世の中にいつとはんとかをとつれもせぬ

ある人のむすめを語らひ付て久く音し侍さりけれは　さかみ

ふみ見ても物思ふ身とそ成にけるまのゝつきはしとたえのみして

男のもとよりけはひのかはりたるはいかに今はまかるましきかと

いひをこせて侍けれは

野かはれとあれやく　野飼してこそ駒は荒やくに野かはれとあれて我になつかぬはせんかたなし我老たる故なれはと也「大荒木の杜の下草老ぬれは駒もすさめす刈人もなし

いたつらに身はなりぬ　たとひ身のいたつらに成とてもつらからぬ人やへと思はゝいとふましきにかくつらき人故に徒にならん事よと也

あるかうへに又ぬき　夫一人あるうへに又かさぬる事を衣にそへてよみて棹をも作りあへさらんと云にそへて　操（ミサヲ）もさの八え作るましきと恥しめし心也みさをならてみさをなるさまするを操作ると云也

わりなしや心にかなふ　泪は我心のまゝなる物なから身のうき時は自由にとまらぬにまして枯々なる人をとゝめよといふはわりなしいかて留得んと也

野かはねとあれゆく駒をいかゝせんもりのしたくささかりならねはしのふことある女に中納言兼頼忍ひてかよふと聞て男たえ侍にけり中納言さへ又かれ〳〵になり侍にけれは女の讀る

よみ人しらす

いたつらに身はなりぬともつらからぬ人ゆへとたにおもはましかは

赤染右大將道綱に名立侍ける頃つかはしける

大江匡衡朝臣

あるかうへに又ぬきかくるから衣みさほもいかゝつくりあふへき

定輔朝臣かれ〳〵になりてほか心なと有けれは時〻ひきと、めよといふ人侍けれは

源雅通朝臣女

わりなしや心にかなふなみたゝに身のうきときはとまりやはする

くまのへまいるとて人のもとにいひつかはしける

道命法師

わするなよ忘るときかは三熊野のうらのはまゆふうらみかさねん

思はんとたのめたる人のさもあらぬけしきなりけれはよみ侍ける

わすれしといひつる中はわすれけりわすれんとこそいふへかりけれ

ひさしくをとつれぬ人のもとに

物いはて人のこゝろを見るほとにやかてとはれでやみぬへきかな

後冷泉院（七十代）　治暦四年四月十九日崩　うせさせ給ひて世のうき事なと思ひみたれてこもりゐて、侍けるに後三條院（七十一代）　治暦四年四月十九日受禪　位につかせ給てのち七月七日にまいるへきよし仰事侍けれは讀る

周防内侍

あまの河おなしなかれときゝなからわたらんことのなをそかなしき

源頼光朝臣女にをくれ侍ける頃霜のをきたるあしたつかはしける

小大君

このころの夜半のねさめはおもひやるいかなるをしか霜はらふらん

大貳國章妻なくなりて秋風の夜さむなるよしたよりに付ていひを

わするなよ忘るとき「みくまの〻うらの濱やふもゝえなるとよみて濱木綿といふ草いくえもかさなれる物なれは恨重んと也

わすれしといひつる　忘れんといはゝ忘ましき物をとの心也

物いはて人の心を　いはれてとふは眞實ならぬも知かたしいはてとはんこそ誠なるへけれと心見に物もいはてあるほとにやかて其まゝとはれすしてやみぬへしかくあるへきよりはとくいはまし物をとの心をふくめたり是も皆道命うた也

あまの河おなしなかれ　後冷泉後三條御兄弟にて後朱雀院の皇子なれはおなし流れとよめり帝の御事なれはあまの河といへり同し帝と思ひなから猶二君に仕ん事物うき心也

このころの夜半の　北の方の後何人か友歴すらんとの心を鴛の霜拂ふに添てよめるなるへし夫婦を鴛鴦にたとふれは也

おもひきや秋のよ風　此五文字は思ひ給へりし事かはと國章にいひかけし心なるへし「秋風の身に寒けれはつれもなき人なそ思ふ暮る夜ことに「身に寒く秋の夕風吹からにふりにし人の夢に見えつゝ

いかなれは花の匂ひも　爲頼なともろともに見し春の爲頼なくなりて戀しきをいかなれはとよみ給へる優に哀ふかく侍にやかうふり給はりて　輔親か叙爵せしなるへし

すみそめにあけの衣　服衣に赤衣をかさねしかは悲歎と喜歡との泪をこほすとなるへし

あさちはらあれたる　むかしみし人をこひ忍ふとそへて信夫郡の心をよめり

こせて侍ける返事につかはしける　清原元輔

おもひきや秋の夜風のさむけきにいもなきとこにひとりねんとは

春頃爲頼長任なとあひともに歌よみ侍けるにけふの事をは忘るなといひわたりて後爲頼朝臣身まかりて又の年の春ながたうかもとにつかはしける　中務卿具平親王

いかなれは花の匂ひもかはらぬをすきにし春のこひしかるらん

能宣身まかりてのち四十九日の中にかうふり給はりて侍けるに大江匡衡かもとより其よしいひをこせて侍ける返事にいひつかはしける　祭主輔親能宣子

すみそめにあけの衣をかさねきてなみたのいろのふたへなるかな

陸奥にまかり下りけるに信夫（シノフ）の郡といふ所にはやう見し人を尋けれはその人なくなりにけりときゝて　能因法師

あさちはらあれたる宿はむかしみし人をしのふのわたりなりけり

母にをくれ侍て又の年のわさなと過てつれ〳〵に侍ける夕暮にち

又の年のわさ　一周忌なるへし

琴のねきけは物そ　此歌上句を略せる物なるへし

なき人はをとつれもせて　心はおはの音信のみ有しに付て一入母の事を思へるよりなき人は音もせてといへるなるへし裏ある時琴の絃を斷事禮也一周忌なと過し比なれはかくよめるなるへし

源經隆　權中納言道方子前常陸介四位

しくるれとかひなかりけり埋木は時雨るれとかひなかりけりと也紅葉せし方をそ人もとふに我かことき埋木は泪時雨る比もとふ人なしとの心也

人しれすおつるなみた　心は明也

故中宮　源子敦康親王の御むすめ祐子内親王六條齋院禖子なとの御母也前註此中宮宇治關白頼通公の御養子也

りつもりたること琴也なとをしのこひてひくとはなけれと今はほとなと過にけれは折〻ならしけるをおはなりける人のあひ住けるかたより琴のねきけは物そかなしきなといひをこせて侍ける返事に讀母　大納言道綱朝臣

なき人はをとつれもせてことのをゝたちし月日そかへりきにけるはゝにをくれて侍ける頃兄弟のかたかたにはとふらひの人〻まてきけれと我かたにはをとつるゝ人も侍さりけれは　源經隆朝臣

しくるれとかひなかりけり埋木はいろつくかたそひともとひける

物思ひける頃時雨いたくふり侍けるあした今夜の時雨はなと人の音つれて侍けれは讀　少將井ノ尼長和比之人云々

人しれすおつるなみたのをとをせは夜半のしくれにをとらさらまし

故中宮うせ給ひての又の年の七月七日宇治前太政大臣頼通公也のもとにつかはしかる　後朱雀院御製

こそのけふ別し星も心はこそのけふ別し星もあひぬめりなとたくひなきわか身なるらん
明也此御うた榮花物語卅四にはわか宮に奉らせ給ふよし有て即「秋くれは流れまされと天河影たに見えぬ人そ悲しきと御返歌あり宇治殿へまいらせ給へる歌を若宮にも見せさせ給へる故此御返しなと有しを物語にはかく書しにや

後朱雀院うせ給ひてうちつゝき世のはかなき事とも侍ける頃花面白く侍けれは　小左近散位中原經相女

はかなさによそへて見れはさくら花おりしらぬにやならんとすらん

故皇太后宮うせ給て明る年その宮の櫻の花面白く咲たりけるに人ふいと口おしくなとい　辨乳母前加賀守顯時女陽明門院御乳母

はかなさによそへてみれはかゝる折は花も心あるへき事をなとの心なるへし彼今年はかりは墨染にさけとよめる心を思ふへくや

かたみそとおもはて花を見したにも風をいとはぬ春はなかりき

かたみそとおもはて　まして皇后の御形見とおもふ花には一しほ風のいとはしきと也

世中はかなくて右大將通房かくれ侍りぬとき、て　小辨

かすならぬ身のうきことはかすならぬ身のうきことは世の中のなきうちにたにいらぬなりけり

たゝにもあらて里にまかり出て侍りけるに十月はかりほとちかうなりて内より御とふらひ有ける御返事に奉りける　御産近付也　齋宮女御

かれはつるあさちか　御産のほとを心もとなく心ほそく思召ほとの歌なるへし

上東門院白河に渡り　御門の御歎によりて也榮花物語卅六云女院の御前には世の中を思召歎侘させ給て巖(イハヲ)の中求めさせ給て白河殿にわたらせ給ひぬ云々

いにしへをこふるねさめや　心は明也　榮花物語卅六云白河殿の秋の氣色いみしう哀なるにまして神な月の時雨に木葉の散かふ程は沮(トヽ)止めかたし云々扨此歌有

かれはつるあさちかうへの霜よりもけぬへきほとをいまかとそまつ

六十九代一條院皇子御母上東門院　後朱雀院うせさせ給ひて上東門院白河にわたり給て嵐のいたく吹榮花物語にはこのもりの侍從のもとにこあり　けるつとめてかの院に侍ける侍從内侍のもとにつかはしける　藤原範永朝臣榮花物語に大膳大夫云々

いにしへをこふるねさめやまさるらんきゝもならはぬみねのあらしに

入道攝政　兼家公此比兵衛佐にや柏木の木高きわたりなとかけろふの日記に有

暮にはなといひをこせ　蜻蛉日記云又程へて見え意る程雨なと降たる日暮にこんなとや有けんとて此歌有

かしはきの森の下草　頼む木下に雨もるとゝ云世諺にや頼めは雨もる如く夜枯かち成を猶此暮を頼めとかゝ也柏木森也兼家公の當官を添て成へし

まつほとのすきのみ　大井河たのむるくれといはん枕詞也大井は筏材木なとある所也樗と暮をそへて也順和名云説文云樗壁柱也和名クレ有二檜樗椙樗二云々

あさき瀬をこす　序歌也淺瀬を引こす筏の綱のよはけれは切ぬへきか危き心をいひかけて猶此暮も來ましきかとあやうしと也是も樗をそへてよめる也

後拾遺和歌集第十六

雜二

入道攝政夜かれかちに成侍ける頃暮にはなといひをこせて侍けれはいひつかはしける　大納言道綱母

かしはきの森のした草暮ことになをたのめとやもるを見る〳〵こんといひてこさりける人の暮にはかならすといひ侍ける返事に　馬内侍

まつほとのすきのみゆけは大井河たのむるくれもいかゝとそおもふ

女のもとにくれにはと男のいひつかはしたるかへりことによみ侍ける　よみ人しらす

あさきせをこす筏士のつなよはみなをこのくれもあやうかりけり

中關白かよひはしめける頃よかれして侍けるつとめてこよひはあかしかたくこそなといひて侍けれはよめる

樗　檜　椙樗二云々

ひとりぬる人やしる　君は外にても一人は寢給ふ事なけれは夜の明しかたき事を知給ふましき我こそく獨れの人や知らんさやうの人なとの君には秋の夜長く明しかたきことを告申たらんと也

春かすみたち出ん　春霞は立出んの枕詞也外に立出て逢事も思ひよらす男の氣色淺くみゆれはとの心を霞をいひ出し詞の緣に空のけしきなとよめり

そのいろの草とも　葵はあふさいふ詞の緣ある草なから其草とも見えす枯しといひて枯々なる事をよめりされは葵といひてかゝぐべきか何といひてけふはかけんそと也御生の日葵懸る故也

ふしにけりさしもおもはゞ　さしもおもはゝとはさやうに君か來たりと思はゝと也しもは助字也君かきしと思はゝ夜更てれたりともれいらすと音なすへき物をとの心を笛竹の緣にて讃也

高内侍　高階成忠女儀同三司母是也

ひとりぬる人やしるらん秋のよをなかしとたれかきみにつけつる

忍ひたる男の外に出あへなといひ侍けれは　新左衛門　散位中原經相女

春かすみたち出んこともおもほえす淺みとりなるそらのけしきに

爲家朝臣物いひける女にかれ〳〵になりて後みあれの日くれには暮にはこんとて也逢事をそへて也といひてあふひををこせて侍けれはむすめにかはりてよみ侍ける　小馬命婦　前津のかみ藤の棟世の女

そのいろの草とも見えすかれにしをいかにいひてかけふはかくへき

男の夜ふけてまうてきて侍けるにねたりときゝて歸りしといひをこせし也めてかくなん有しと男のいひをこせて侍ける返事に　和泉式部

ふしにけりさしもおもはゞ笛竹のをとをそせまし夜ふけたりとも

やすらはてたゝにたて來ぬ夜さへ宵には猶待やすらはては只にたてうき横の戸を來ても宵のまに早かへる人も有けりと也

人しれすねたさもねたし

古今「戀しくは下にを思へ紫の根摺の衣色に出なゝめ是を本歌にて我もとより逢みし事をあらはしやせんとの心也

ぬれきぬと人にはいはん

定家卿密勘云これは小式部内侍和泉式部か一子にて形姿世に勝れて又幾野の道とよみけん時の覺えさこそ侍けめ上東門院御はらからの君達御心を盡し給けるに堀河右府幽玄好色すくれたる人にて忍ひてこそ心かよはされけめ女もあなかちによをつゝみて見つともいふなあひきともこそ契けめ大二條關白おなし事と聞えなから今一入の覺ともにてをしたちあらはれ給けるに彼下になをおもへ色に出なといひし衣を今はれたし上にきんとの給へるを和泉式部只ぬれきぬとこそいはめうへにき給ふともといへるに名取河の心をはえあらかはて只とはりなきぬれきぬといひなさんとはよめるにこそ云々一條禪閤御說紫のねすりの衣は紫の根にてすれる衣也寢すりの說不用云々

秋霧はたちかくせとも　心はいろ〳〵にあらかひかくし給へとけさ見あらはしつるといふ心也鹿臥けりをしかといふ詞にそへてさやうにふしたるといはんとての枕詞に萩原にと置也

よひのほとまうてきたりける男のとくかへりにけれは

やすらはてたゝにたてうき眞木の戸をさしもおもはぬ人もありけり　敦通公也頼宗公兄也

小式部内侍のもとに二條前太政大臣はしめてまかりぬとき、てつかはしける　堀河右大臣頼宗公御堂御子

人しれすねたさもねたしむらさきのねすりのころもうはきにをせん　返し　いつみしきふ

ぬれきぬと人にはいはんむらさきのねすりのころもうはきなりとも

平行親くら人にて侍けるに忍ひて人のもとにかよひながらあらかひけるを見あらはして　兵衛内侍

秋霧はたちかくせとも萩はらにしかふしけりとけさ見つるかな

左兵衛督公信　恒德公息なり權中納言從二位

あさな〳〵おきつゝ心にかけてうかゝひけれは行賓に深くうつろひしさまを見しとの心也

あふさかのせきに心はゝ緣あさくて今へたゝりし事に猶着する事はあられとさすかにもろともに下りし東路は猶忘れぬ心なるへし

あたなる事人にいはろ　外の人をかよはしける事と人の名を立ると云る心也

れぬなはのねぬ名は　ねもせぬなき名は立ぬれは世に生ましき心ちすると也

ねぬなはは大澤皆枕詞の躰也

實方朝臣のむすめに文かよはしけるを藏人行賓にあひぬとき、て此女のつほねにうかゝひてみあらはして讀侍ける　左兵衛督公信

あさな〳〵おきつゝ見れは白菊の霜にそいたくうつろひにける

大江公資相模守に侍ける時もろともに彼國に下りて遠江寺にて侍ける頃忘られにけれはこと女をゐてくたるとき、てつかはしける　相模

あふさかのせきに心はかよはねと見しあつまちはなをそこひしき　忠義公子

左大將朝光かよひ侍ける女にあたなる事人にいはるなりといひ侍りけれは女の讀る　よみ人しらす

ねぬなはのねぬ名はいたく立ぬれはなをおほさはのいけらしやよに

太政大臣かれ〳〵に成て四月はかりにまゆみのもみちを見てよみ侍ける　藤原兼平朝臣母

すむ人のかれゆく宿は時わかす草木も秋のいろにそありける

藤原兼平朝臣母　基經太政大臣の御子三品宮内卿兼平の母にやすむ人のかれゆく宿は秋社草木枯る物なれと今は四月にも住人の枯る宿は草木も秋を見するとも也

あかつきのかれの　別を告る鐘を恨あまりて是も入相の逢瀬を急く鐘と思はゝ　嬉しからんにと也

いつくにか來ても　心は隈はかくれたる所ないへり　人家の隔てたる物の隱れある事にそへて也隔心なくかたらはんといひしをうけていつくに隱れ給はん心に隔てたる曲なければと也

やすらひにまきの戸　さりともこんと待やすらひて眞木の戸をこそあけなきつるに冬の夜はいかてかく只に明るならんと也寒天長夜に待あかしたるかひなき歎きなるへし

坊におはし　春宮にてまし〳〵ける事也

あをやきの糸に　夜來る人は我なられと柳取しなき名をとりしと也よるくるは糸の緣語也

女のもとにてあかつきかねをきゝて　小一條院

あかつきのかねの聲こそ聞ゆなれこれをいりあひとおもはましかは

男の隔つる事もなくかたらはんなといひ契りていかゝおもほえけんひるまにはかくれもしつへくなといひて侍ければ　和泉式部

いつくにか來てもかくれんへたてつる心のくまのあらはこそあらめ

こんといひてたゝにあかしける男のもとにつかはしける

やすらひにまきの戸をこそさゝさらめいかにあけぬる冬の夜ならん

七十一　後三條院坊におはしましける時女房の局の前に柳の枝をうへて侍けるを宵に物語なとして歸りたるあした其柳なかりけれはよへの人のとりたるかとてこひにをこせたりけれは　藤原顯綱朝臣（參議衆經子　前讃岐守）

あをやきの糸になき名そ立にけるよるくる人はわれならねとも

皇后宮みこのみやの女御と聞えける時里へまかり出給にけれは其

皇后宮みこのみやの女御　後三條院の御時贈皇后茂子能信卿女寶は公成卿女白河院延久元年四月廿八日に十七歳にて春宮（ミコノミヤ）に立給ふとき御母茂子を春宮（ミコノミヤ）の女御と申せし也

またさかぬまかきの菊の枯がたになるをうつろふといへはまたさかぬ菊もあるに女御は里亭にうつり給ふはいかゝと也

玉くしけ身はよそ〳〵　玉くしけは箱の事也身ふたりみな其緣語也心は明なるへし

いつかたにゆくとはかりは心は明也定めてとふ人もあるましけれは行方をいつくとも告やらぬとの心也

かくはかりしのふる雨を　心は明也ィかはかりにもかほどにといふ心かくはかりとおなし忍ふ中を忍ふる雨とそへてよめる也

あくる朝也　つとめて咲ぬ菊にさして御せうそこ有けるに　後三條院御製

またさかぬまかきの菊もある物をいかなるやとにうつろひぬらん

わすれしといひ侍ける人のかれ〳〵になりてまくらはことりにをこせて侍けるに　馬ノ内侍

玉くしけ身はよそ〳〵になりぬともふたりちきりしことなわすれそ

物へまかるとて人のもとにいひをき侍ける　和泉式部

いつかたにゆくとはかりはつけてましとふへき人のある身とおもはゝ

忍ひたる男雨のふる夜まできてぬれたるよし歸りていひをこせて侍けれは

かくはかりしのふる雨を人とはゝなに、ぬれたる袖といふらん

人のもとに文やる男を恨みやりて侍ける返事にあらかひ侍けれは

そらになる人の心は　さゝかにのはいといはんため也何とあらかひ給ふともすてに心空に成し人はいかてけふも亦かく堅固にあらかひ給ふやうにては暮し給はんと也ィかゝてはけふも文かゝてはいかて暮さんと也蜘のいなかくといへは也

みかさやまさしはなれぬ
雨もよ歌林良材云もよは夜の心也一説もよは催す也云々笠は指といへはさしはなれぬといはん枕詞に三笠山といへりいかにさしはなれたりと宣ふ共雨夜にはゆき給はんと思ひし物を案のごとくとの心なるへし

なけかしなつねに　たさひ相そふとも死別する世也是は生別と思ふ斗にこそあれ終に別へき世なれは歎いとなと觀念せし心也

いにしへのきならし衣　序歌也裳の腰を物越にそへて其裳の腰とけさらんやといひてよし物越に語らひ給ふとても打とけ

そらになる人の心はさゝかにのいかてけふ又かくてくらさん

男の物いひ侍ける女を今はさらにいかしといひてのち雨のいたく降けるにまかりけると聞てつかはしける

みかさやまさしはなれぬときゝしかと雨もよにとはおもひしものを

年頃住侍ける女を男思ひはなれて物の具なとはこひ侍けれは女のよめる　　よみ人しらす

なけかじなつねにすましきわかれかはこれはあそ世にと思ふはかりそ

兼房朝臣女のもとにまうてきて物語し侍けるをかくと聞てうたてといひつかはしたりける返事に物こしになんと女のいひをこせて侍けれはよめる　　中納言定頼

いにしへのきならしころも今さらにそのものこしのとけすしもあらし

大貳資通むつましきさまになんいふと聞て遣しける

給ふましきかはとうたかへる心なるへし

まことにやそらになき名

ふりぬらんはふれぬらん也此なき名の誠にやふれわたらんよもさはあらしかく天照大神の蠱なき世にと也晴天に雨はよもふらしなとの心をそへて貧通のぬれ衣を云のかれし歌なるへし

こりぬらんあたなる人に

化人に忘られてこりぬらんさりとも我淺からす思ふためしは習はさんに我にあひこゝろ見よと也

はるさめのふるめか　春雨はふるめかしといはん枕詞もりにしも其緣語也心は倫子(リンシ)のもとへかよひ給ふはとく露顯の事を古めかしくも今告給ふよとの心也兵衛佐を柏木といへは柏木の森をいひかけてよめり聊恨る心有けるなるへし

いにしへのとこよの國や　常世を床とそへて彼れ所のみえし事をよめり唐ほと遠く見ゆるは古のとこよのかはりけるにや

相模

まことにやそらになき名のふりぬらんあまてるかみのくもりなき世に

元輔文かよはしける女にもろともに文なとつかはしけるに元輔にあひて忘られにけりときゝて女のもとにつかはしける　　藤原長能

こりぬらんあたなる人にわすられてわれならはさんおもふためしは(イに)

入道前太政大臣(道長公也)兵衛佐にて侍ける時一條左大臣(雅信公道長公の北方倫子の父也)の家にまかりそめてかくなんあるとはしりたりやといひをこせ侍ける返事によめる　　馬内侍

はるさめのふるめかしくもつくる哉はやかしはきのもりにしものを

はやうすみ侍ける女のもとにまかりてはしのかたにゐて侍けるに

ぬる所の見え侍けれは　　清原元輔

いにしへのとこよのくにやかはりにしもろこしはかりとをくみゆるは

と也

わたのはらたつ白波の　大風の波の〻ち風なくても波立を餘波（ナコリ）といへり何ほどの恨の我にあれはかくなこり久しく見やるそと也さて和田のはらたつ白波といふに腹立事をそへてと也

風はたゝおもはぬかたに
君かしわさは思はすなる
事有しかと我に腹立事は
なかりしと也

人しれす心なからや　心つからの獨居なれは人しれす心なから泪しくれ給はんかく秋ふかき長夜のれさめにと也

あふさかのせきのあなた
あつま琴を知ぬといふにいまた其人にあひ見ぬ恨を述て也　古今著聞には此歌匡房卿若かりし時内裏の女房逢あなつりて和琴を出したれは此歌よめるに女返しえせさりけりと有

函谷關のことにや　史記列傳七十五云孟嘗君至レ關（ニノ）關法雞鳴而出レ客（ステ）孟嘗君恐ル（ノラン）追ノ（ヲチノ）至レ客之居下座（ニ）者有二能爲（ナス）レ鷄鳴（テン）而雞盡鳴（クニ）逢發レ傳（テフ）出上（ヲ）孟嘗君乃鳥のれをいつはりて函谷關を出しことく早（ハヤ）く歸らん計略にやと也

是は逢坂のせきに侍　又あふへきの心云々

夜をこめてとりの　支旨云はかるはたはかる也逢坂の關はやるさしとは逢事をやるさしと也ふにあふさかのといふよにといふ詞は助字也函谷云夜ふかきに偽の鳥をなかせてたはかり給ふとも此逢坂は函谷のことくにはゆるさしと也彼行成の夜深く歸たるを陳して鳥の聲に催されてと偽の給ふをさやうの偽にはかられては逢しとの心也

ふるさとのみわの山へ　心は明也

あつまちのそのはらから　曾の原信濃也其兄弟といひかけて心明也

赤染衛門うらむる事侍けるころつかはしける　右兵衛督朝任（アサタヲ）

わたのはらたつしら波のいかなれは名こりひさしく見ゆるなるらん

返し　赤染衛門

風はたゝおもはぬかたにふきしかとわたのはらたつ波はなかりき

中納言定賴家をはなれてひとり侍ける頃住侍ける所の小柴垣の中にをかせ侍ける

人しれす心なからやしくるらん和琴也ふけゆく秋のよはのねさめに

女のもとにまかりたりけるにあつまことをさし出て侍けれは　大江匡衡朝臣

あふさかのせきのあなたもまたみねはあつまのこともしられさりけり

大納言行成物語なとし侍けるに内の御物いみにこもれはとていそき歸りてつとめて鳥のこゑにもよほされてといひをこせて侍けれは夜ふかゝりける鳥の聲は函谷關（カンコクワン）のごとにやといひつかはしたりけるをたちかへり是は逢坂のせきに侍（イの事）とあれはよめる　清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかのせきはゆるさし

三輪の社わたりに侍（なるひとをイ）ける人を尋ぬる人にかはりて　素意法師

ふるさとのみわの山邊を尋れと杉間の月のかけたにもなし

はらからなといはんといふ人の忍ひてこんといひたるかへりことに　さかみ

あつまちのそのはらからはきたりともあふさかまてはこさしとそ思ふ

俊綱朝臣たひ〳〵文つかはしけれと返事もせさりけるを猶なゝひ侍けれは櫻の花にかきてつかはしける　兵衛ノ姫君

ちらさしと思ふあまりに
花をおしむにつけて菜を
もおしみつると云て世に
しられしとつゝむあまり
に返事の詞をもおしみし
と也

さらてたに岩間の水は　さ
らてたにはうちとけぬさ
へ世にもれていひさはか
るゝにましてとけたらは
と也

能通朝臣　但馬守四位皇太
后宮太夫永頼男

いのりけんことは夢にて
祈りて逢よしの夢見給ひ
しとならはも早其夢にて
かきりて又あはん事を思
ひ給ふなたとひ夢にても
あふといふ名はおしきにましてまことにあふましきとの心也

園韓神の祭の内侍に　公事根源云此二神は宮内省にまします也延暦遷都の時造宮して他所に移し奉んとせしに只此所に在て帝を守り奉んと託宣有き延喜式に園神一座韓神一座のせたり祭禮は年に二度二月と十一月と也上卿辨内侍むかふ下略江次第五云二月用二春日祭後丑二十一月用二新嘗會前丑二云々内侍女藏人等參進云々

ちらさしと思ふあまりにさくらはなことの葉をさへおしみつる哉

むつましくもなき男に名たちける頃其男のもとより春も立ぬいま
はうちとけぬかしなといひて侍ければ

下野守源政隆女　太皇大后宮女房

さらてたに岩間の水はもる物をこほりとけなは名こそなかれめ

能通朝臣女を思ひかけて石山にこもりてあはん事をいのり侍けり
逢よしの夢を見て女のめのとにかくなん見たるといひ遣して侍け
れはかく讀て遣しける

四條宰相四條中宮女房

いのりけんことは夢にてかきりてよさてもあふてふ名こそおしけれ

資良朝臣藏人にて侍ける時園韓神のまつりの内侍に催すとてみそ
うけすもなりにける哉の心なるへし　神はきすれと此世の神はしるしなけれは園から神にいのらんといひて
侍ける返事によめる

少將内侍　能登守實方女　白河院女房

ちかきたにきかぬみそきを何かそのから神まではとをくいのらん

家綱朝臣文かよはし侍けるにあはぬさきにたえ〳〵に成けれはつ
かはしける

伊賀少將　前註

わするゝもくるしくもあらすねぬなはのねたくと思ふことしなけれは

左衛門藏人に文つかはしける

にかきてつかはしけ
ならされぬみそのゝうりとしりなからよひあかつきとたつそ露けき

人のむすめのおさなく侍けるをおとなびてなと契りけるをことさ
まに思ひなるへしと聞て其わたりの人の扇に書付侍ける

左大將朝光

おひたつをまつとたのめしかひもなく波こすへしときくはまことか

秋をまてといふ女につかはしける　源道濟

いつしかとまちしかひなし秋かせにそよとはかりも荻のをとせぬ

男の文つかはしけるに此二十日のほとにとたのめけるをまちとを
しといひ侍けれは　和泉式部

君はまたしらさりけりな秋のよのこのまの月ははつかにそ見る

中納言定頼馬にのりてまうてきたりけるに門をあけよといひ侍けるをとかくいひてあけ侍らさりけれはかへりける又の日つかはし

相模

さもこそは心くらへにまけさらめはやくも見えし駒のあしかな

物いひかはせし人のをとせすとうらみけれは

中原長國

をのつからわか忘るゝになりにけりひとのこゝろを心見しまに

つらかりけるわらはを恨むとて音し侍らさりけれはわらはのもとよりわれさへ人をといひをこせて侍けれは

律師朝範平棟仲子

うらみすはいかてか人にとはれまし憂きもうれしき物にそ有ける

橘則長父のみちの國の守にて侍ける頃則長也馬にのりてまかり過けるを見侍て男はさもしらさりけれは又の日つかはしける

さかみ

君はまたしらさり　廿日をはつかなるといふ詞にそへて也

さもこそは心くらへに　たかひの意地を立るわ心くらへといへりさこそ心くらへにまけす意地をたて〻歸り給はめさすかにさはかり駒を早めて歸り給はてもの事をとの心なるへし

をのつから我か忘るゝに　我をとせすはそなたより也驚かし給ふかと試る間にかく恨らるれは我忘るゝに自然と成しと也

われさへ人を　音し給はれは我さへうらみまいらするとの心にや

うらみすはいかてか　心はあきらか也

橘則長父　陸奥守則光也即此集の光朝法師母の歌のことはかきに有

つなたえてはなれ　おふちの駒牧の名の由八雲抄に有我もとにによらて過しをつなたえてはなれはてにしとよめるなるへし

ことの葉につけても　わかなの宿も分すさびしき嵐なるを木葉のちるに付ても思ひ出て詞の音つれもあるへきことゝの儀なるへし

やへふきの隙たに　隙なき故とはぬそ隙あらは問へしとしれ偽はあらしとの心なるへし和泉式部か「隙こそなけれ芦のやへふきと同し

わりなしや身は九重　九重は禁中也承香殿に侍る人なれはかくよめり九重に對してとへとは人のといへりゝ人を實方の身つからといへり

しはしこそおもひも　長柄へ行に存命行をそへていまこそさもおもはめ行末には忘れんと也難波なるなからの橋なとよめはおなし所にや

つなたえてはなれはてにしみちのくのおふちのこまをきのふ見しかな

木葉のいたくちりける日人の許にさしをかせける

ことの葉につけてもなとか問さらんよもきのやともわかぬあらしを

返し

中納言定頼

やへふきの隙たにあらは蘆の屋にをとせぬ風はあらしとをしれ

三條太政大臣家忠義公に侍ける女承香殿にまいりて見し人とたに更に思はすとうらみ侍けれは

藤原實方朝臣

わりなしや身はこゝのへの内なからとへとは人のうらむへしやは

高階成棟小一條院の御供に難波にまいるとていかに戀しからんすらんといひをこせて侍けれは

中宮ノ内侍

しはしこそおもひも出めつのくにのなからへゆかはいまわすれなん

人にはかなきたはふれことといふとて恨みける人に

上總ノ大輔

これもさはあしかりけりな津の國のこやことつくるはしめなるらん

小一條院かれ〳〵になり給ひける頃よめる　土御門御匣殿

こゝろえつあまのたくなは打はへてくるをくるしとおもふなるへし

日頃うしをうしなひて求め煩ひけるほとに絶ゑに成にける女の家に此牛入て侍けれは女のもとよりひかせてうしと見し心にまさりけりといひをこせて侍りける返事に　祭主輔親

かすならぬ人をのかひの心にはうしとも物はおもはさらなん

人のつほねを忍ひてたゝきけるにたそとひ侍けれはよみ侍ける　大貳成章

いそなるゝ人はあまたに聞ゆるをたかなのりそとかりてこたへん

久しうをとせぬ人の山吹にさして日頃のつみはゆるせといひて侍けれは　和泉式部

これもさはあしかりけりとの戯いふも悪きと恨むるはあまりの事なりこの事にかこつけて中絶んとのもといならんと也昆陽芦刈其縁語也

こゝろえつあまの　蜑ノ拷縄海人のたくりをくなは也打はへての枕詞也くるも其縁なるへし心は明也うしと見し心に　輔親は絶々なるにうしは入來たりけれはうき人にまさるといふ事に牛をいひかけていひをこす也

かすならぬ人を　野飼に遍るゝ心をそへて也數ならぬ人をのかれはなつ心には絶々をうしともおもはされと也

いそなるゝ人はあまた　童蒙抄なのりそは神馬草をいふ日本紀十三濱藻（ハマモ）なのりそもといふ云々　磯馴るとはこゝに通馴る人は多しときくを誰か名乗をかりて答んそと也誰そといひしに答ての歌也

とへとしもおもはぬ　とへとしもといふに十重を添て也心明也

あちきなく思ひこそ　徒然として獨居たまふかと思ひやりてこの山吹をまいらするそなたにはさまてさも思ひ給ふましきをかく思ふ事のあしきなさよと也初めの歌にとへとしも思はぬといひし故亦かく慰めし心なるへし

れぬなはのくるしき　外にはかよひて我には絶給ふをしらて煩ひの苦しきほとのことたえさおもひし事よと也

ゆくすゑをなかれて　なかれてとは末かけての心を河の緣にてよめる也中河は京極河也夫婦の中にそへて也心は明也

長しとてあけすやは　たとひしはしまたせたりとてあけすにはをかぬをいましはしまてかしと也待せて遲く明るを秋の夜の長きにそへしはしといふ事をとはかりといへは眞木の戸はいりとそへて也

とへとしもおもはぬやへの山吹をゆるすといはゝおりにこんとや

おなし人の物よりきたりとき、ておなし花につけて遣しける

あちきなく思ひこそやれつれ〳〵とひとりやゐてのやまふきの花

わつらふといひて久しうをとせぬおとこのほかにはありくと聞て　少將内侍

つかはしける

ねぬなはのくるしきほとのたえまかとたゆるをしらておもひけるかな

師資朝臣の物いひわたりけるをたえじなゞこちきりて後又たえて年頃になりにけれはかよはしける文をかへすとてそのはしにかきつけてつかはしける　式部命婦

ゆくすゑをなかれて何に頼みけんたえけるものを中川の水

門をそくあくとて歸りにける人のもとに遣しける　和泉式部

長しとてあけすやは有む秋のよはまてかしまきのとばかりをたに

あまのはらはるかに　月は下界に遠くわたる物なれどそれたに出るは人にしらるゝに君はしらせす里に出給ふよと也

内より出はかならすつけんなと契りける人のをともせて里に出にけれはつかはしける　藤原道信朝臣

うき事もまたしら　世にうきさいふ事もしらさりしにかやうなるをやつらきとはいふらんとの心をまたしら雲のかゝるなとそへて也

あまのはらはるかにわたる月たにもいつるは人にしられこそすれ　藤原元眞

題しらす

ふくかせになひくあさちは　淺茅の風になひきて秋をしらするやうに我ありさまの徒然なるにて人の心の秋を知すると也

うき事もまたしら雲の山のはにかゝるやつらきこゝろなるらん　齋宮女御

ふくかせになひくあさちは我なれやひとのこゝろの秋をしらする

後拾遺和歌集第十七

雑三

備中守棟利身まかりにけるかはりを人〻望み侍と聞て内なりける人のもとにつかはしける　清元元輔

たれか又年へぬる身をふりすてゝきびの中山こえんとすらんぬ中に侍ける頃つかさめしを思ひやりて　源重之

はることにわすられにける埋木は花のみやこをおもひこそやれ

つかさめしにもれての年の秋うへのおのことも大井にまかりて舟にのり侍けるによめる　大江匡衡朝臣

河舟にのりて心のゆくときはしつめる身ともおもほえぬかな

大納言公任宰相になり侍らさりける頃よみてつかはしける　大江爲基

世の中をきくにたもとのぬるゝ哉なみたはよそのものにそ有ける

備中守棟利身まかり　任せられてのちうせたる其かはりの備中守を望めるなるへし

世の中をきくに　泪は我目より出るとおもへは世上の事を聞につけて袖をぬらせはよそのの物そと也公任卿をとふらふ心なるへし

たれか又年へぬる身　我こそ年へて望み申せしに誰か又さしこえて備中を申すらんとの心なり吉備中山は備中也和名云備中キビノミチノナカノクニ

はることにわすられ　埋木は春に忘られて花も咲ぬを身に比しておほやけの御めくみにあつからぬ身はよそのさくはなを思ひやり都戀しき心なるへし

河舟にのりて心の　心は明なるへし

いたつらになりぬる人の
昇進せていたつらに朽果
るたくひの又もあらはと
也我たくひなき沈淪のほ
とを歎き申上る心なるへ
し

なつき給ふ　名簿とて我姓
名勢なと書てある册也そ
れ申給はる心なるへし

みちのくのあたちの　一二
句はひくやとてこいはん
枕詞也我を御最負(ヒイキ)もやあ
らんとて也

よゐつかふまつり　禁中の
二間に夜居(ヨルコウ)の僧とて夜候
せらるゝ事なるへし源氏
物語に有

雲のうへにひかりかくれ
後朱雀院のゝち後冷泉院
の御時侍る心也夕日入て月を見る心なるへし

藏人にてかうふり　巡爵の事前に註

かきりあれはあまの羽衣　童蒙抄云殿上人をは天人にたとふれは其衣を天羽衣(ノ)といふ八雲抄(ニ)雲の梯(カケハシ)は禁中云々六位藏人五

つかさめし侍けるに申文にそへて侍ける
藤原國行　内匠頭有親子　諸陵頭

いたつらになりぬる人の又もあらはいひあはせてそねをはなかまし
小一條右大將になつき給ふとてよみてそへて侍ける
源重之

みちのくのあたちの眞弓ひくやとてきみに我身をまかせつるかな
後朱雀院の御時としころよゐつかふまつりけるに後冷泉院位につ
かせ給ひて又よゐにまいりてのち上東門院(山)に奉り侍ける
天台座主明快　大僧正　文章生俊宗子

雲のうへにひかりかくれしゆふへよりいくよといふに月を見つらん
藏人にてかうふり給はりける日よめる
源經任(ツネタ)　木工頭(ノ)　政職子　越後守

かきりあれはあまの羽衣ぬきかへておりそわつらふ雲のかけはし
右大辨通俊藏人頭(トウノ)になりて侍けるをほとへてよろこひいひにつか
はすとてよめる
周防内侍

うれしてふことはなへてになりぬれはいはておもふにほとそへにける
後冷泉院御時藏人にて侍けるをかうふり給て又の日大貳三位のつ
ほねにつかはしける
橘爲仲朝臣

さは水におりゐるたつは年ふれとおなし雲ゐそこひしかりける
同し御時藏人にて侍けるに世中かはりて前藏人にて侍けるを當時
に臨時祭の舞人にまかり入て試樂(レカクノ)日よめる
播磨俊宗　備後守　後經子　太皇太后宮少進

おもひきや衣の色はみとりにてみよまて竹をかさすへしとは
位のゝち地下におるれは
よろこひはしなから猶殿
上をしたふ心をよめる也
うれしてふことは　よろこ
ひいはんはなへての事な
れはいはて思ふほとに今
まて延引せしと也

さは水におりゐる　鶴鳴(カウニ)ク
九皐(サハ)一　時前注六位藏人叙爵
のゝち又還昇の望みある
心にやさらても殿上おり
て侍らは繼しかるへき事
勿論にや

世の中かはり　後冷泉院崩
して後三條院の御代とな
りて御在位四年にて白河院の御時を當時と云也

前藏人　六位藏人四年のゝち不レ預(ラ)二巡爵一(ニ)也

臨時祭　石清水は三月中午日賀茂は十一月下酉日也試樂は祭日に禁中にてあり先音樂をこゝろむ心也

おもひきや衣の色は　緑(ミトリ)は六位の袍(ウヘノキヌ)也藏人をはなれて久しく叙爵せぬ歎きなり みよまて竹をかさすとは三代(ミヨ)は後冷泉

後三條白河院也試樂舞人(ノウド)　駿河歌を出す時奚竹を頭にかさす事　江次第十にあり公事根源にも竹臺の下にて竹の枝を折て

かさしにさすと八幡臨時祭の試樂の所にあり六位藏人は四年のゝち必巡爵にあつかりて緋衣(アカキヌ)を着すへき身のさもあらて

前藏人にてかく舞人に出んと思ひきやと也緑は竹の緑語也

をしなへてさく白菊は　八重〳〵は最下の心なるへし清輔朝臣昆第は四位に至て我は度々四位にもれて叙位の時申文に「やへ〳〵の人たにのほる位山老ぬる身には苦しかりけりとよめる事袋草子にありやへ〳〵の花の霜とは下をいひかけて身の沈める事をそへてよめるなるへし

まつことのあるとや　かく世に沈みては死たにもせまほしきに猶人は待事ありてなからふるとや思はん何を待といふ頼みもなき物をと也

きみをたにうかへてし　我こそは沈め足下をたに昇進させまほしきと也下句はあきらかなる我のみとおもひしかとも　世に有かひなくてなからふるは我のみと思ふに高砂の松も年ふるしるしもなくてまた立て有と也古今著聞云播磨へ下りけるに高砂にて各歌讃けるに　義定か此歌を人々感あへり其遲其所に在けるか　女牛に腹突れぬる

世の中をうらみてこもりぬて侍けるころ八重菊を見てよみはへりける　前大納言公任

をしなへてさくしらきくは八重〳〵の花のしもとそ見えわたりぬる

年頃しつみぬてよろつを思ひ歎き侍けるころ　藤原兼綱朝臣

まつことのあるとや人のおもふらんこゝろにもあらてなからふる身を

はらからなる人のしつみたるよしいひをこせて侍ける返事につかはしける　藤原元眞

きみをたにうかへてしかなゝみた川しつむなかにもふち瀬ありやと

身のいたつらに成果ぬる事を思ひ歎きつゝはりまにたひ〳〵かよひ侍けるに高砂の松をみて　藤原義定織部頭定通子太皇太后宮侍長

我のみとおもひしかともたかさこのおのへの松もまたたてりけり

世の中をうらみける頃惠慶法師か許に遣しける

世の中をいまはかきりとおもふにはきみこひしくやならんとすらん

賀茂神主成助かもとにまかりて酒なとたうへて今まて冠給はらさりける事をなけきてよみ侍ける　津守國基

もみちするかつらの中にすみよしの松のみひとりみとりなるかな

司召にもりて歎き侍ける頃女のもとにつかはしける　中納言基長内大臣能長子前彈正尹

われふねのしつみぬる身のかなしきはなきさによする波さへそなき

年頃しり侍けるむまきのうれへある事ありて宇治前太政大臣にいひ侍ける頃雪ふりたるあした爲仲朝臣のもとにいひつかはしける　源兼俊母前筑前守成順女母伊勢大輔

尋つる雪のあしたのはなれ駒きみはかりこそあとをしるらめ

小一條院春宮と聞えける時おもはすに位おり給ひけるに火たき屋

哉と云り袋双紙ニモアリ

世の中をいまはかきり　世を見かきりて遁世の身ともならんと思へは惠慶法師のありさまうらやましきからにかく讃なるへし

冠給はら　叙爵せぬ事なり五位を冠給ふと云也

もみちする桂の　桂は賀茂の神木にて紅葉するを叙爵して赤衣に比し松は住吉の神木にて緑なるを我か六位にて年ふるに比するなり

われふれのしつみぬる　沈淪せし身を誰心よせて最頁の人もなき歎き也

しり侍けるむまき　牧也知行せし牧也源氏物語に領し給ふ御庄御牧と有

尋つる雪のあした　奥儀抄雪中放レ馬朝尋レ跡と詩の心也愚案牧の愁なれは駒を讃て序歌也君こそ此事の證據にておはせとの心也

おもはすに位おり　小一條院みつから一院にて侍らんと御望にて寛仁元年八月九日東宮を辭して小一條院と申しける事榮花物語十三に有

雲ゐまてたちのほる　天子にならせ給ふへき御身のおもひの外なる心を煙になそらへて思ひの外なとよみ給へり火燒屋をこほつより讀給ふ也

松風はいろやみとりに　是も堀河女御の歌也心は明也

世の中をおもひみたれ　心は明也風情さひしく哀なる歌なるへし

こゝろには月見ん　心かくれたる所もなし

ことありて播磨へ　長德四年四月廿四日隆家卿左遷の事なるへし榮花物語五に伊周公は播磨隆家卿は出雲とこそ侍れ書寫の誤なるへし

世の中のうきにおひ　うきは水ある所なるを憂にそへて端午の藥玉を袖にかくる事の緣になく音をかくると也

なとこほちさはくを見て讀侍ける　堀河女御（左大臣顯光女　小一條院女御）

雲ゐまてたちのほるへき煙かと見えしおもひのほかにもある哉

同院高松女御（御堂殿御女母高松上高明公女）に住うつり給ひてたえ〳〵（堀川女御にたえ〳〵に也）になり給ひての頃松風心すこく吹けるをきゝて

松風はいろやみとりに吹つらん物おもふひとの身にそしみぬる

源道濟（秋イ）

題しらす

世の中をおもひみたれてつく〳〵となかむるやとに松かせそふく

世中心にかなはて恨み侍ける頃月を詠てよみ侍ける

藤原爲任朝臣左大將濟時子

こゝろには月見んとしもおもはねとうきにはそらそなかめられける

ことありて播磨へまかりくたりけるみちより五月五日に京へつかはしける

中納言隆家中關白道隆子

世の中のうきにおひたるあやめ草けふはたもとにねそかゝりける

けふはてもあやめ　綾目文（アヤメテヤ）目八雲抄云物のあやめ也善惡也云々服者の愁傷に物の善惡のわかちもしられぬ御心には藥玉に引たかへたるなく音をやかくらんと也引たかへもあやめの緣也

さつきやみこゝぬの　こゝぬの森八雲抄伊豆或寄（ハヨス）子事云々子をこふる心のやみを五月闇こゝぬのもりとそへて也

ほとゝきすこゝぬの　心は明也

すへらきもあら人神も　なこむは和の字也彼五月闇の歌を感せし心なるへし

朗詠「さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしのはらへ成けり此詞の佛にて感鬼神（セシメ）和（スル）人倫（ヲ）ことはりをよめり

けふとてもあやめしられぬたもとにはひきたかへたるねをやかくらん

前讀岐守兼房子　靜範法師八幡の宮の事にかゝりて伊豆の國になかされて又のとしの五月に內の大貳三位のもとにつかはしける

藤原兼房朝臣（中納言兼隆子　前讀岐守）

五月五日服なりける人のもとにつかはしける

小辨

さつきやみこゝぬのもりのほとゝきす人しれすのみなきわたるかな

返し

大貳三位

ほとゝきすこゝぬの森になく聲はきくよそ人の袖もぬれけり（けるイ）

これをきこしめしてめしかへすへきよしおほせくたされけるをきゝてよめる

素意法師（紀伊守重經法名也　前註）

すへらきもあら人神もなこむまてなきける森のほとゝきすかな

丹後の國にて保昌朝臣（式部大夫也）あす狩せんといひける夜鹿の鳴を聞て讀る

和泉式部

ことはりやいかてかあすは狩におふへけれはなくもことはりやとなり此歌によりて夫の保昌狩をやめたりしとそ

西宮の家　拾芥云四條北朱雀西高明御子家云々但惠慶歌は岸うつ波とよみて海邊也こゝは攝津國の西宮にや

松風もきしうつ波も　心明也

をこたりてのち　病氣平愈の事也

しぬはかりなけきに　行てとふへき身なられはまいりてとはさりしといふに生きをそへて也袋草子に大二條殿小式部内侍をおほす比の事のよしみゆ

おほそらに風まつほとの　序歌也蜘のいの細くて吹やらるへき風まつ心の上句也下句は御身の上なるへし

思ひやるわか衣手は　さゝかにのくもらぬといひかけて思ひやる袖も泪のこほるゝ心なるへし

世の中さはかしき比　疫癘なとをこりて人々うせ給へる比なるへし

ことはりやいかてかしかのなかさらん今宵はかりのいのちとおもへは

高明公

西宮のおほいまうちきみつくしにまかりてのち住侍ける西宮の家を見ありきてよみ侍りける　惠慶法師

松風もきしうつなみももろともにむかしにあらぬこゑのする哉

二條前大まうちきみ日比煩ひてをこたりてのちなとはさりつるそといひ侍けれはよめる　小式部内侍

しぬはかりなけきにこそはなけきしかいきてとふへき身にしあらねは

題しらす　齋宮女御

おほそらに風まつほとのくものいのこゝろほそさをおもひやらなん

返し　東三條院詮子兼家女圓融院后

思ひやるわかころもてはさゝかにのくもらぬそらに雨のみそふる

世の中さはかしき頃久しうをとせぬ人のもとにつかはしける

なきかすにおもひなしてやまた世に在さいひかけてかくなからへてある物をなき人の數に思ひなしてとひ給はぬかとなるへしちるをこそあはれと　ことしは人々なくなれは梅花や人を戀しのはんとなりおもひ出す　京よりの女を忘し也

とへかしないく世もあらしいく世もえなからふましき露の身をとへかしとふ言の葉にしはしかけとゝむる事もやと也露は葉にかゝる物なれは也

物をのみおもひし程に　淺茅か末は露をく物なれは露の世に成しといはんためにや万葉十に「秋くれはをく白露に我宿の淺茅か原は色付にけりなとよめり

伊勢大輔

なきかすにおもひなしてやとはさらんまたありあけの月まつものを

世の中はかなかりけるころ梅花を見てよめる　小大君

ちるをこそあはれと見しか梅の花はなやことしは人をしのはん

京より具して侍ける女をつくしにまかり下てのちこと女に思ひ付ておもひいてすなりにけり女たよりなくて京にのほるへきすへもなく侍けるほとに煩ふ事有てしなんとしける折おとこのもとにいひつかはしける　よみ人しらす

とへかしないく世もあらし露の身をしはしもことの葉にやかゝると

或人云この女經衡筑前守にて侍ける供にまかりくたれりける人のめになん有けるかくて女なくなりにけれは經衡後に聞つけて心うかりけるもの、ふの心かなとて男をひのほせられにけり

世の中つねなく侍けるころよめる　和泉式部

物をのみおもひしほとにはかなくてあさちかすゑに世はなりにけり

忍ふへき人もなき身は　わかなき跡に哀と戀忍ふへき人もなき身は只生てある折に哀々といひをかんと也我ならて哀といふ人もなき身は誠に哀なる事なれはかくよめるなるへし

いかなれはおなし色にて紅葉は目にとまれとも泪も紅なから目にとゝまらすこほろゝと也泪のこほれやすき事をいはんとてかくよめり

つねよりもはかなき比の心は明也

草の葉にをかぬ　心は明也

古今「露をなとあたなる物と思ひけん我身も草にをかぬはかりを此詞を用て也

きえもあへすはかなき　上句は世のはかなき事をよみて序歌也有やなしやと露ほと成とも音つれよかしと也

世のなかを何にたとへん　万葉に沙彌滿誓か「世中を何にたとへん朝朝こきいにし舟の跡なきかごとゝよみし詞にて十首

忍ふへき人もなき身はあるおりにあはれ〳〵といひやをかましおもふ事侍りける比もみちを手まさくりにしてよみ侍ける

いかなれはおなしいろにておつれともなみたはめにもとまらさるらん

世中さはかしく侍ける比夕くれに中納言定頼かもとにつかはしける

堀川右大臣

つねよりもはかなきころの夕暮になくなる人そかそへられける

返し　中納言定頼

草の葉にをかぬはかりの露の身はいつそのかすにいらんとすらん

世中常なく侍ける比久しう音せぬ人の許に遣しける

赤染衛門

きえもあへすはかなき程の露はかりありやなしやと人のとへかし

世のなかを何にたとへんといふふることをかみにをきてあまた讀侍けるに

源順

順かよみし内の歌也應和元年七月に女子をうしなひ同年八月に男子をうしなひける時の事の由順家集にあり

世の中を何にたとへん　心は明也

あけぬなりかものかはらに法興院京極の東鴨河の邊也かく明ても又はかなく暮むと也けふもといへる

毎日〳〵の心有

蕭々暗雨打窓聲　白氏文集三上陽白髮人のうちの一句也　蕭々はすさましき心也奥委

こひしくは夢にも人を　夢も見すさひしき夜半の雨のさま也

王昭君　漢元帝宮人を爲にうつさしめて爲によりて幸せりよりて宮人皆絵師に賂せり昭君わが美色をたのみて賂せす胡國の爲ひす美人を求むる時爲によりて昭君を胡地につかはせり委西京雜記にあり云々

なけきこし道の露にも　昭君胡國に行さまなるへし

おもひきやふるき都を　此國人は胡國をいふ也

順かよみし内の歌也應和元年七月に女子をうしなひ同年八月に男子をうしなひける時の事の由順家集にあり

世の中を何にたとへん秋の田をほのかにてらすよひのいなつま

中關白のいみに法興院にこもりてあかつきかたにちとりのなき侍りけれは　圓松法師寛和比人

あけぬなりかものかはらにちとりなくけふもはかなくくれんとすらん

文集の蕭々暗雨打窓聲といふ心をよめる　大貳高遠從三位齊敏子

こひしくは夢にも人を見るへきにまとうつ雨にめをさましつゝ　王昭君を讀　赤染衛門

なけきこし道の露にもまさりけりなれにしさとをこふるなみたは　僧都懐壽山僧云々

おもひきやふるき都をたちはなれこのくにひとにならんものとは　懐圓法師源道濟子山大宮禪師

見るたびにかゝみの影の
是も昭君をよめり下句兩
説也かく美色ならすはか
く給に悪くかゝれて胡國
にゆかんやと也又胡地に
て鏡をみてかくこゝに來
さらましかはかくをとろ
へましやはと也

法成寺　拾芥云近衛北京極
東云々御堂關白寛仁四年
二月よりたて初給へり

後夜の時にあはん　此事榮
花物語十八にあり後夜の
御懺法の折にまいり合は
んと思ひて夜の明るもゝ
つかと心もとなく目を覺
して聞程に鳥の鳴も嬉て云々

見るたびにかゝみのかけのつらきかなかゝらさりせはかゝらましやは
入道前のおほいまうちきみ道長公法成寺にて念佛をこなひ侍ける比後夜
の時にあはんとてちかき所にやとりて侍けるに鳥のなき侍けれは
むかしを思ひ出てよみ侍ける

榮花物語には山の井の尼とあり

井手のあま

いにしへはつらくきこえしとりのねのうれしきさへそ物はかなしき
修行に出たつ日よみて右近馬場の柱に書付侍ける

增基法師

いにしへはつらくきこえし　榮花物語云尼君いかなれはつらくおほされしそといへはいなや昔おかしき人とうちふして物
語をもいひしに千夜を一夜にと思ひしに鳥の鳴しはいかゝつらかりしといへはけにとて笑ふ云々　是此歌の註にかける詞
と見やむかしつらかりし鳥のねの今念佛にあはんと嬉きにつけても猶昔の思ひ出られて悲しきと也

ともすれはよもの山邊にあくかれしこゝろに身をもまかせつるかな
かたらひ侍ける人のもとより世をそむきなんとありしはいかゝと
いひをこせて侍けれは

馬内侍

ともすれはよもの山邊にあくかれしこゝろに身をもまかせつるかな　榮花物語云尼君いかなれはつらくおほされしそといへはいなや昔おかしき人とうちふして物
語をもいひしに千夜を一夜にと思ひしに鳥の鳴しはいかゝつらかりしといへはけにとて笑ふ云々　是此歌の註にかける詞
ともすれはよもの山邊に　年比修行の望有てとかくすれは四方の山へに心のあくかれてとく出たゝまほしかりしに其心に
終に我身を任せてゐふかく出たつ事よと也

しかすがにかなしき物は
世はとく背かまほしけれ
と今はと世をうきたつほ
との心のさすがに悲しく
て猶え背き侍らすと也

なにかその身のいる　身は
かよはくても心たに深く
思ひ入なは山住の本意も
とくへき心也何かは其身
のたけく山にもすゝみ入
ぬへき只心を深き山に任
せて思ひいれと也

まことにやおなし　我と同
し道に入給しは誠にや我
も獨は往生もせじ君と同
道と思ひしにと也

いかてかく花の袂を　うら
なる玉とは法華經不レ
覺三内衣裏有二無價寶珠一の意也と奥儀抄云々愚案　衆生無明の酒に醉て我か佛性をしらさるを佛の示し教給ひし事也今内侍
花の袂なかへて出家せしは衣裏の玉を忘れす得たる心にてよめるなるへし

かけてたに衣のうらに　とくさらてまよひの身にて過せし事の悔しきと也　繫其衣裡の經文をかけてたにしらさりし心に
用たり

しかすがにかなしきものはよのなかをうきたつほとのこゝろなりけり
山にのほりて法師に成侍ける人につかはしける

藤原長能

なにかその身のいるにしもたけからんこゝろをふかき山にまかせよ
賴家朝臣世をそむきぬとき、てつかはしける

東山律師長濟宗經子

まことにやおなし道には入にけるひとりはにしへゆかしとおもふに
中宮の内侍尼に成ぬと聞てつかはしける

加賀左衛門

いかてかく花のたもとをたちかへてうらなるたまをわすれさりけん
返し

中宮ノ内侍

かけてたに衣のうらに玉ありとしらてすきけんかたそくやしき

万壽三年正月十九日出家法名清淨覺廿九歳
上東門院あまにならせ給ひける比讀て聞え侍ける　選子内親王（村上皇女 大齋院）

きみすらもまことの道にいりぬなりひとりやなかきやみにまとはん

高階成順世をそむき侍けるにあさの衣を人のもとよりをこせ侍とて　伊勢大輔（高階成順妻）

よみ人しらす

けふとしも思ひやはせしあさころもなみたの玉のかゝるへしとは

かへし　伊勢大輔

おもふにもいふにもあまる事なれやころものたまのあらはるゝ日は

一條院皇子御母上東門院
後一條院うせさせ給て世のはかなくおもほえけれは法師に成て横河にこもりゐて侍ける比上東門院よりとはせ給ひたりけれは　前中納言顯基

世をすてゝやとを出にし身なれともなをこひしきはむかしなりけり

御返し　上東門院（後一條院御母）

ときのまも戀しき事の慰まは世はふたゝひもそむかさらまし

きみすらもまことの道にいりぬなりひとりやなかきやみにまとはん

御返し

世をそむく人〻おほく侍るころ　前大納言公任

おもひしる人もありける世の中をいつをいつとてすくすなるらん

三條院東宮と申ける時法師になりて宮のうちにたてまつりける　藤原統理

きみに人なれなゝらひそおく山にいりてのゝちはわひしかりけり

御返し　三條院御製

わすられす思ひ出つゝやま人をしかそこひしく我もなかむる

花山院の御供に出家　仮室　榮花物語梅とあり
法師になりて住侍ける所に櫻のさきて侍けるを見て　前中納言義懷（謙德公子）

みし人もわすれのみゆくふるさとにこゝろなかくもきたる春かな

榮花やまさきに
世をそむきて長谷に侍けるころ入道中將のもとよりまた住馴しかしなと申たりけれは　前大納言公任

万壽三年正月四日出家委榮花物語廿七に有
所へ春は心永く忘

みし人もわすれのみやく　榮花物語袋草子等飯室にて讀るよしみも昔見馴し人も忘行のみしてとひこゐ

なるへし云々上東門院萬壽三年正月十九日御さまなかへ給ひて法名清淨覺と申（御年二十九）又長暦三年五月七日に御くしおろさせ給ふよし同物語に有帝を戀給御心慰かたき故とも

おもひしる人もあり　心明也

きみに人なれなならひそ東宮に馴奉て山中にても忘奉ぬ心なるへし

わすられす思ひ出つゝしかそ戀しくは我もさのことく統理を思召詠るとの御心なるへし

みし人もわすれのみやく　榮花物語袋草子等飯室にて讀るよしみも昔見馴し人も忘行のみしてとひこゐ

れす問來て花も咲たるよと也義懷は花山院の外戚寛和二年六月廿三日院御祝髮翌日出家世をそむきて長谷　公任卿万壽三年正月四日於二長谷一出家榮花物語廿七に委入道中將のもとより　榮花物語勘物云源成信（ムスコ）藤成房（義懷子）此兩人之間誰人哉（ヤ）また住なれしかし　同物語云三井寺より入道中將のきみの聞え給へりける「またなれぬみ山かくれに住そむる谷のあらし

はいかゝふくらん返しと
ありて此歌あり
谷風になれすと　とく心を
すまして山居せし物をと
也

谷風になれすといかゝおもふらんこゝろははやくすみにしものを

良遲法師大原にこもりゐぬときゝてつかはしける　素意法師

良遲法師大原なる所に遊行に
各騎馬而後賴朝臣か俄に
下馬す人々驚て問之答云
此所は良遲か菴房也いか
てか不下馬哉人々感歎し
て皆以下馬云々

みくさゐしおほろのし水底澄てこゝろに月のかけはうかぶや

返し　良遲法師

みくさゐしおほろの　みく
さは水草生る也朧清水は
北大原にあり所は水草居
し朧清水なれとも良遲か
心に月はすみうかふらん
と也

ほとへてや月もうかはん大はらやおほろの清水すむ名はかりに

良遲法師のもとにつかはしける　藤原國房

ほとへてや月も　朧清水すむといふ名はかり也ほとへてのちは月もうかひやせん今は心のすむといふ事もなしとなるへし
おもひやる心さへこそさひしけれ大原やまの秋のゆふくれ

おもひやる心さへこそさひしけれ大原やまの秋のゆふくれ

をとうとなりける法師の山こもりして侍けるかもとよりかくてな
んありとぐまじきといひて侍ける返事につかはしける　律師朝範

おもはすに入とは見えきあつさ弓かへらは歸れ人のためかは

おもひやる心さへこそ　心は明也
ありとくましき　え住はつましきと也
おもはすに入とは　えとくましき物の思外に山に入とは見えて　初めよりありきよしとけかたくあらは歸れ　何事も誰ためそ

や山居も身のため堪かた
くて歸るも身のためなれ
はと也いる歸る弓の縁也
何事かといひて　何事かあ
る別義もなしやと問詞也

長樂寺にすみ侍けるころ人のなにことかといひて侍りけれはつか
はしける　上東門院中將道雅卿女

おもひやれとふ人もなき山里のかけひの水のこゝろほそさを

おもひやれとふ人も　山居のさひしき風情哀なる歌なるへし
上陽人事　奥儀抄云玄宗と申けるみかとの時上陽人十六にてまいりたりけるか　楊貴妃にそはめられて六十まて　帝にもみえ
奉らて一生むなしき床にむかひて夜をあかしかれ日を暮し侘て　春行秋過る事をもしらて上陽宮の中にむなしく老たる也

則光朝臣のもとに　則光陸奥の國守にて有しほと季通父をとひ下りしほとなるへし

たけくまの松は　袖中抄云武隈松はみちのくの武隈と云所に二木ある松也宮内卿元良か陸奥の任に件の松を植云々下略　此歌は見しといふ詞を三木とそへてなるへし

みちのくへふたゝひ　發草子云能因實には不レ下ニ向奥州一爲レ詠ニ此歌一竊に籠居して下ニ向奥州一の由風聞云々二度下向の由あり於ニ一度一者實歟書ニ八十嶋記一云々

たけくまの松はこのたひ　松千年に枯といへは也

さと人のくむたに　彼河原院の泉のもとにて「松陰の岩井の水を結ひあけて夏なき年と思ひける哉」と惠慶かよみし岩井のあせ果しさまなるへし

としへたる松たになくは　さしもそのかみ繁花の地の淺茅が原と成て松のみ殘りたる風情哀にや

後拾遺和歌集第十八

雜四

則光朝臣のもとにみちの國にくたりてたけくまの松をよみ侍ける　季通父也　橘季通陸奥守則光子駿河守中宮少進

たけくまの松はふた木をみやこ人いかゝとは、みきとこたへん　能因法師

みちのくにゝふたゝひくたりて後のたひ武隈の松も侍らさりけれはよみ侍ける　大江嘉言

たけくまの松はこのたひ跡もなしちとせをへてや我はきつらん　大江侍從

河原院にてよみ侍ける

さと人のくむたにいまはなかるへし岩井のし水みくさゐにけり　江侍從

おなし所にて松をよみ侍ける

としへたる松たになくはあさちはらなにかむかしのしるしならましもとすみ侍ける家を物へまかりけるに過とて松の木末の見え侍ければよめる　左衛門督北方

年をへて見る人もなき古里にかはらぬ松そあるしならましきみかうへし松はかりこそ殘りけれいつれの春の子日なりけん　源爲善朝臣

六條中務親王家に子日の松をうへて侍けるをかのみこ身まかりて後その松を見てよみ侍ける

けふは中の子日とはしらすやとて友たちなりける人のもとより松をむすひてをこせて侍けれは讀る　むまのないし

たれをけふまつとはいはんかくはかりわする、中のねたけなるよに

緑竹不レ辨秋　大藏卿師經

みとりにて色もかはらぬくれ竹はよのなかきをや秋としるらん

永承四年内裏歌合に松をよめる　前太宰帥資仲

いはしろのおのへの風に年ふれと松のみとりはかはらさりけり

年をへて見る人も　心は明也イ見し人もなきはそのかみ見し人も今はなき心なるへし

六條中務親王　後中書王具平を六條宮と申せしなれは是にや

きみかうへし松はかり　心明也

中の子日　初子日の次の子日をいふ也

松をむすひて　作り花なとにせし心なるへし

たれをけふまつとは　かく忘る、中の妬けなるに誰を待といはんと也松と中の子とをそへて也

みとりにて色も　色不變にて秋を不辨竹は夜長きに秋を知んと也竹の節長きをそへて也

前太宰帥資仲　大納言資平子中納言

いはしろのおのへの　岩代紀伊也

松澗底(カンテイ)におひたり　松のたにのそこに老たる心なるへし

うへのおのことも松澗底(マツカンテイ)におひたりといふ心をつかうまつりける　御製今上御製

よろつよの秋をもしらて過きたる葉かへぬ谷のいはねまつかな

題しらす　藤原義孝

みやま木をねりそもてゆふ賤のおはなをこりすまのこゝろとそ見る

宇治にて人々歌讀侍けるに山家旅宿といふこゝろを　民部卿經信

旅ねする宿はみ山にとちられてまさ木のかつらくる人もなし

關白前大まうち君の家にてかつまたの池をよみ侍ける　藤原範永朝臣

鳥もゐでいく世へぬらんかつまたの池にはいゐのあとたにもなし

すまの浦をよみ侍ける　藤原經衡

たちのぼるもしほの煙たえせねはそらにもしるき須磨の浦哉

鳥もゐでいく世へぬといふ心なるへし

池八雲抄下總云々袖中抄「かつまたの池に鳥ゐし昔より世はうき物と思ひ知にき良玉集云「朽たてるいゐなかりせはかつたちのぼるもしほの　心あきらか也

またの昔の池と誰かしらまし大和國云々槻井は後撰抄委註

くる人もなきおく山　來る(クル)を繰(クル)にそへて水の涌(ワク)を篁(ワク)にそへよめり龍門瀧は伊勢集に大和國龍門寺の瀧あり是也

彼國の守　義忠大和守なりしほと也

物いはゝとふへき物を　桃のものいはぬといふ事前註

せきいるゝ名こそ　美作の一任のほとは久かられはかくせきいるゝ我名こそなかれての世々にもとまるとも身はやかて歸京すへけれは絶す見るへきかはと也絶すは糸の緣也

大覺寺の瀧殿　嵯峨大澤の北にあり公任卿名こそなかれてと讀給へる所なるへし

あせにける今たに　今さへかくあせにけるをまして後には荒果ん早く見て置ん事そと也

としことにせくとは　大井河は井せきして田の用水なれは年ことにせけとも名はむかしのことしと也　せくといふに流るゝ

龍門瀧にて　中納言定頼

くる人もなきおく山の瀧の糸は水のわくにそまかせたりける

やよひの月龍門にまいりて瀧のもとにて彼國の守義忠朝臣の桃の花の侍けるをいかゝ見るといひ侍けれは　辨のめのと

物いはゝとふへき物をものはないく世かへたる瀧のしらいと

美作守にて侍時瀧の前に石たて水せきいれてよみ侍ける　藤原兼房

せきいるゝ名こそなかれてとまるともたえす見るへきたきのいとかは

大覺寺の瀧とのを見てよみ侍ける　赤染衛門　拾芥云嵯峨天皇御在所

あせにける今たにかゝる瀧津瀨のはやくそ人は見るへかりける

法輪にまいりてよみ侍ける　源道濟　拾芥云大井河西道昌建立元亨釋書委

としことにせくとはすれと大井河むかしの名こそ猶なかれけれ

よめり

さきの日にかつらの　月の桂の事なるべし歌の心明也童蒙抄云閻浮提地閻浮樹あり一名は波利質多一名龍樹高さは八万四千里樹影月中に現せり世又月を見るに樹あり實にはなし則これ閻浮樹の影也云々是經文云々月の桂是也

いつるやのわくに　出る湯のわくといひかけ來るを繰にそへて景と用ひたる讀也

すみよしの神も　奥儀抄云院をむなしき舟にたとふ位におはす程はおもく物つみたる舟の如く恐おほかる故也又經敎を舟にたとふ般若經は畢竟空をとく故空き舟と云此經を神も崇め給なれは空き舟と云にわか身をよせて神も哀と思ふらんとよみ給ふ也

おきつかせふきにけらし　八雲抄水なとにはせてしつえとはよめとも只下枝を云也云々此歌心は明也古今「住吉の松を秋かつらなる所に人ゝまかりて歌讀て又こんどいひて後にかのかつらにはまからて月の輪といふ所に人ゝまかりあひてかつらをあらためてきたるよしよみ侍けるにかはらけとりて

祭主輔親

さきの日にかつらの宿を見しゆへはけふ月の輪にくへきなりけり

修理大夫惟正信濃守に侍ける時ともにまかりくたりてつかまのゆを見て

源重之

いつるゆのわくにかゝれるしら糸はくる人たえぬものにそありける

延久五年三月住吉にまいらせたまひでかへさによませ給ひける　榮花物語二月廿日とあり彼物語委

後三條院御製

すみよしの神もあはれとおもふらんむなしき舟をさしてきつれは

民部卿經信

おきつかせふきにけらしな住吉の松のしつえをあらふしらなみ

風吹からにの歌七間四面の寢殿の南面に何の宮なと申ておはしまさんに參して中門廊より入て寢殿の階間に參て言談を給はらんは此歌也と常に經信卿の自嘆のよし發草子に有

すみよしの浦風いたく　心は明也

松見れは立うき物を　松の景に立歸りうきをと也波の閑ならぬに立うき物をと秀句を求めたる也

わすれ草つみて　住吉の岸をいひかけて來し方の世に思出もあらはこそ忘かたからめさもなけれは只忘草つみて忘るゝとてもおしからぬとの心也

おもふ事神はしるらん　たがせとは誰かための祈念とも神は知んと也波の立瀨に添て也

ときかけつ衣の玉　衣の玉はかの法華經の衣裏寶珠なるをいま供養するほけきやうになそらへて松の梢にときかけつとよ

花山院の御供に熊野へまいり侍ける道に住吉にてよみ侍ける　那智山に三年おはしける事元亨釋書にある此時にや

恵慶法師

すみよしの浦風いたく吹ぬらしきしうつ波のこゑしきるなり

右大將濟時住吉にまうて侍けるともにてよみ侍ける

藤原爲長　刑部卿雅正子

松見れはたちうき物を住の江のいかなる波かしつこゝろなき

すみよしにまいりてよみ侍ける

平棟仲　安藝守重茂子周防守

わすれ草つみてかへらん住よしのきしかたの世はおもひでもなし

藏人にて侍ける時御祭りのつかひにてなにはにまかりてよみ侍ける

源頼實　美濃守頼國子藏人右衛門尉

おもふ事神はしるらんすみよしのきしのしらなみたがせなりとも

熊野へまうて侍けるに住吉にて經供養ずとてよみ侍ける

增基法師

ときかけつころもの玉は住よしの神さひにける松のこすゑに

めり繫其衣裏の文により
て也

和泉の任果て　和泉の國司
に任して四ヶ年置て上京
也

たのみてはひさしく　住吉
の松を先といひかけて多
年祈念の驗を先今度みせ
給へと也袋草子云其時人
の夢に白髮老翁社中より
出來て此幣を取て入其後
病平愈云々

上東門院住吉に　榮花物語
卅一云長元四年九月廿五
日女院住吉石清水にまう
てさせ給ふ云々

都出て秋より冬に　九月廿
五日に都出て十月二日に
歸京の由榮花物語にみゆ

よろつよをすめる　聖德太子に道人の返歌「いかるかや富の小河の絶はこそ我大君の御名は忘め太子の跡なれは其流と云也
橋はしらなからましかは　なかれての名とは末代までとゝまる名の事也延久五年後三條院住吉詣の時長柄の橋柱只一殘れ
る由榮花物語卅八に有歌の心は明也

舉周和泉の任果てまかり上るまゝにいとおもく煩ひ侍けるを住吉
のたゝりなといふ人侍けれはみてくら奉侍けるに書付ける　大江匡衡子

赤染衛門　舉周母

たのみてはひさしくなりぬ住よしのまつこのたひのしるし見せなん

上東門院住吉にまいらせ給ひて秋の末より冬に成て歸らせ給ける
に讀侍ける　上東門院新宰相參議廣業女

みやこ出て秋より冬になりぬれはひさしき旅のこゝちこそすれ

天王寺にまいりてかめ井にてよみ侍ける　辨乳女

よろつよをすめる龜井の水やさはとみのを川のなかれなるらん

長柄橋にてよみ侍ける　前大納言公任

橋はしらなからましかはなかれての名をこそきかめあとを見ましや

天王寺にまいるとてなからの橋をみて讀侍ける

われはかりなからの橋は　我程也長柄の橋も我朽たる如く也されは何事も古
もく悲しさよと也難波を
添て也

いにしへにふりやく　むか
しなからの名殘ある橋の
さまをみるに付ても古果
たる身のほとあはれに思
ひあはせらるゝと也

「世の中に古ぬる物は津
の國の長柄の橋と我と成
けり

名にたかきにしきの　錦浦
八雲伊勢云々來て見るか
つかねなといふ詞錦着る
にそへかつけ物なとにそ
へて也

をとなし河　八雲抄紀のく
にとあり

山からすかしらも　八雲云烏の頭しろきといふは燕太子歸時相也童蒙抄云燕丹子曰燕太子丹質於秦秦王過之無禮不
得意欲歸秦王不聽請言曰今烏白頭馬生角乃可歸丹仰天歎烏即白頭馬爲生角秦王不得止而遣之云々

われはかりなからの橋はくちにけりなにはのこともふるゝかなしさ

上東門院住吉にまいらせ給て歸るさに人〻歌よみ侍けるに　伊勢大輔

いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしなからのはしを見るにも

錦の浦といふ所にて　道命法師

名にたかきにしきの浦をきてみれはかつかぬあまはすくなかりけり

熊野にまいりてあすいてなんとし侍るに人〻しはしはさふらひな
んや神もゆるし給はしなといひ侍けるほとにをとなし河のほとり
にかしら白き烏の侍けれはよめる　增基法師

山からすかしらもしろくなりにけりわか、へるへきときやきぬらん

住吉にまいりて歸りにけるに隆經朝臣難波といふ所に侍と聞てま
かりよりて日頃遊ひてまかりのほりけるに名殘戀しきよしいひを
こせて侍けれは道より遣しける　藤原孝善

わかれゆく舟はつなてにまかすれとこゝろはきみかかたにこそひけ

賀茂にまいりける男の狩衣の袂のおちぬはかりほころひて侍けるを見てまたまいりける女のいひつかはしける

よみ人しらす

道すからおちぬはかりにふる袖のたもとになにをつゝむなるらん

返し

ゆふたすきたもとにかけていのりこし神のしるしをけふ見つるかな

まつりのかへさに思ひさまたれたるかた書たる所を

安法法師

と、のへし賀茂のやしろのゆふたすきかへるあしたそみたれたりける

實方朝臣女のもとにまうてきてかうしをならし侍けるに女の心しらぬ人してあらましけにとはせて侍りけれは歸り侍にけりつとめて女のつかはしける

よみ人しらす

あけぬよの心ちなからにやみにしをあさくらといひしこゑはきゝやあけぬよの心ちなからにやみにしをあさくらといひしこゑはきゝやこの古事也

わかれゆく舟はつなて　別

ゆく舟は綱手引にまかせて京に上れと心は君にひかれて留るとなり

おちぬはかり　落るほどになり

道すからおちぬはかり　賀茂に所願成就して嬉しさをつゝむへき袖のさほとにほころひたるは何をつゝむへきそと也

ゆふたすきたもとに　祈念のしるしみしと云て嬉しさを含めし也

ゆひさまたれ　醉亂也

とゝのへし賀茂の　心明也

かうしをならし　格子をたゝきならす也

あけぬよの心ち　あさくらといひしとは神樂朝倉の詠物也「朝くらや木の丸殿に我をれは名のりをしつゝゆくは誰子そ梁塵惡案抄云朝倉木丸殿は土佐國に侍を古來誤て筑紫に在といへり木の丸殿は行宮をいへり丸木の黑木にて作る名也天智天皇いまた春宮と申侍る時齊明天皇に從ひて朝倉の行宮にとゝまり給へる時此宮へ參る者の名(ナタイノ)謂しして罷出侍る事を名のりをしつゝ行は誰子そと詠し給ふ也。案戸たゝき給ふを名をとはせしに只歸り給へは明ぬ闇の夜の心ちなからにやみにしをいかて名のらて歸給ふそ誰子そと問しこゑはきゝ給ひしやきゝ給へらさりしかと也

返し

ひとりのみ木の丸殿　君一人はかりおはすおりふしならは名のるへけれとこゝとおとこ有ときゝしやへなのらて闇夜に歸りしと也

たれとしりてか　名のり給へ誰と知てか宿かさんとの心也

なのりせは人しりぬ　忍ひの旅なれは名のりて人しらんもうし名のらすは宿らんかたなしいかにせんとの心也

ひとまきにちゝの金　こゑはのこれりとはこの貫之集の歌に金玉の聲の今殘れると也白氏文集廿一云題二故元少尹集一(カニ)遺文三十軸軸々金玉聲(アリ)龍門原上土埋(ニテ)骨不レ埋(ラス)レ名かの孫興公か天台山賦を試に之を地になけよ金玉の聲有へしといひし事也いにしへのちゝの金は　千金といふもかきり有を惠慶の玉章は無量なりといふに秤とそへたり金玉を對して也

實方朝臣

ひとりのみ木の丸とのにあらませはなのらてやみにかへらましやははつせにまいり侍けるにきとのといふ所にやとらんとし侍けるにたれとしりてかなといひけれはこたへすとて

赤染衛門

なのりせは人しりぬへし名のらすは木のまろとのをいかて過ましなのりせは人しりぬへし名のらすは木のまろとのをいかて過ましと貫之か集をかりて返すとてよみ侍ける(十卷あり卅六人集にあり)

惠慶法師

ひとまきにちゝのこかねをこめたれは人こそなけれこゑはのこれり

返し

紀時文貫之子後撰撰者

いにしへのちゝのこかねはかきりあるをあふはかりなき君かたまつさ

かへしけんむかしの人の
元輔集云貫之か集を人の
かりて返し侍りける折に
ときふか許に遣し〻云々
是彼惡度か返したる事に
や歟儀云唯將ニ老年涙一
ヲ灑ニ故人文一と云詩
也

花のしへ紅葉の下葉　かき
つめてはかき集て也我か
言葉の色々を集て世にち
らさんとなるへし
たつねすはかきやるかた
尋ね給へはこそ昔の人の
詞も書てまいらすれと也
流水に水草積りてかきや
るかたなきにいひかけて
也

いにしへのいへのかせこそ
越前の局先祖歌人にやむ
かしの家風のうれしさは
かゝる勅旨をかうむるとの心を風に木葉ちる事にてよめり

紀時文かもとにつかはしける　清原元輔

かへしけんむかしの人のたまつさをきゝてそゝく老のなみたは
家集のはしにかきつけゝる　祭主輔親

花のしへ紅葉の下葉かきつめて木のもとよりやちらんとすらん
伊勢大輔か集を人のこひにをこせて侍けるにつかはすとて　康資王母伊勢大輔女

たつねすはかきやるかたそなからましむかしのなかれみくさつもりて
後三條院御時月あかゝりける夜侍る人なと庭におろして御覽しけ
るに人〻おほかる中にわきて歌よめと仰事侍けれは　後三條院越前越前守源經宗女

いにしへのいへの風こそうれしけれかゝることの葉ちりくと思へは
七月はかりにわかき女房月見に遊ひありきける夜藏人公俊新少納
言かつほねに入にけりと人〻いひあひつゝわらひけるを九月晦日
かたにうへきこしめして御たゝうかみに書付させ給ける　後三條院御製

秋風にあふことの葉や　落
葉の木末は月影もりくる
物なれは人の言葉のいひ
ちらすより其夜のありさ
まの世にもり聞やとの心
なるへし

まことにやをは捨山　更級
姨捨信濃なり伯母を捨て
といへる心をそへよもさ
あらじといひかけて也住
女のめいにはよもさやう
の事はあらしと思ふにと
也

たえやせんいのちそ　たえ
やはせん中絶はせじ乍去
命そしらぬ命のかきりは
かたらはんよし行末にも
心見よと也此歌道命の中
絶やせんと疑へる折なとよみたるなるへし

村上の女三宮　保子内親王規子の御姉配ニ兼家公一
いはぬまをつゝみし　そこもとよりいひをこさせ給はぬまをつゝ
し山吹口なし染の色なれはいはぬ色なる花と讀來れり

秋かせにあふことのはやちりぬらんそのよの月のもりにけるかな
義忠朝臣物いひける女のめいなる女に又すみうつり侍けるを聞て
つかはしける　赤染衛門

まことにやをはすて山の月は見るよもさらじなとおもふわたりを
かたらはんといひて道命法師のもとにまうてきたる人のよみ侍け
る　よみ人しらす

たえやせんいのちそしらぬみなせ河よしなかれてもこゝろ見よきみ
ちかき所に侍けるにをとし侍らさりけれは村上の女三宮のもとよ
り思ひへたてけるにや花心にこそなといひをこせたる返事に
規子内親王村上第四皇女母齊宮女御

いはぬまをつゝみしほとにくちなしの色にや見えしやまふきのはな
良暹法師物いひわたるひとにあひかたきよしをなけきわたり侍け
るとの心なるへ

うれしさをけふは何にか
日比あひかたきよし歎き
給ひて朽果しと聞し秋に
けふのうれしさをいかに
つゝみしそと也「嬉しさ
を何につゝまんから衣た
もとやたかにたてといは
ましを
かたらへはなくさむ　あた
人と思ひながらも語らへ
は慰む事もあるにさやう
の戀のまきれに我事は忘
れやしなんうたてさよと
也

しのひねをきゝこそ　忍ひ
てかよふ事を聞わたりし
との心を郭公の忍音を聞
しとの心にそへてよめり
そらごとなけき　なき名お
ほせられて歎くなるへし
うかりけるみのふの　琵宇浦八雲抄に石見云々　うかりける身とうけてむなしき名といはんためみのふの浦のうつせ貝とよ
めりかやうのうき名たつ事を知給はゝやらんとふらひ給はぬよとの心也

るにけふなんかの人にあひたるといひをこせ侍ければつかはしけ
る

藤原孝善

うれしさをけふはなに、かつ、むらんくちはてにきと見えしたもとを
かたらひたるおとこの女のもとにつかはさんとて歌こひ侍ければ
まつわかおもふことをよみ侍ける　和泉式部

かたらへはなくさむことともある物をわすれやしなんこひのまきれに
五節の命婦のもとに高定忍ひにかよふとき、て誰ともしられでか
の命婦のもとにさしをかせ侍りける

六條齋院宣旨

しのひねをきゝこそわたれほと、きすかよふかきねのかくれなければ
そら言歎侍ける頃語ふ人の絶て音し侍ぬに遣しける

馬内侍

うかりけるみのふのうらのうつせかひむなしき名のみたつは聞きや
御あか物のなへをもちて侍けるを大盤所より人のこひ侍ければつ
かはすとてなへにかきつけ侍ける　藤原顯綱朝臣　前讃岐守四位参議兼經子

おほつかなつくまの神のためならはいくつかなへのかずはいるへき

御あか物のなへ　御贖物公事根源六月の所に云朝餉にて主上にまいらす四の土器を御指をして上に張たる紙にあなをあけて御息を入る也云々鍋の事可尋之大盤所は女の侍ひ也禁秘抄云奎盤所三間北間朝餉ノ敷ニ黄端疊一東倚子其南女房簡入袋云々

おほつかなつくまの　筑麻祭の鍋の事拾遺抄に委つくまの神にはあふ人の數かつくといへはさして我ならてあふ人あるま
しきにいくつかいらん覺束なき也

後冷泉院みこのみや　長暦元年八月十七日立二春宮一

二條院　章子内親王也後一條院皇女母中宮威子道長公女長暦元年十二月十三日御裳着之参二春宮坊一後冷泉院后號二一品宮一委二栄花物語一

春ことの子日はおほく　二葉の松に二條院を比してよめり

前中宮の此藤つほに　二條院の御母中宮威子長元九年九月六日崩

しのひねのなみたせはしとおもふ比の秋とは彼中宮の御腹の姫宮の入内せさせ給ひかはらす藤壺におはしますは嬉しさ多き比そとの心也「嬉しさを何につゝまんとよみし心にて秋ゆたかならぬ事なるへし

春の日にかへらさりせは　一品宮入せ給ふは前中宮隠れ給ひても二たひ春の日に帰りたる心なれは春日影に秋をほすへきの心なるへし此宮いらせ給はすは中宮を忍ひれになく秋なからに朽ぬへきにと也　栄物語卅四に此歌の次に云誠に慰むかたならましとうはへは世にしたかへと藤壺にてはおはしまいし御ありさまよりゐさせ給ひしまき柱なとを見るは哀な

後拾遺和歌集第十九

雑五

後冷泉院みこの宮（東宮）と申ける時二條院はしめてまいり給ひけるを見奉る事やありけんよみ侍ける　出羽辨（中宮威子女房前加賀守平季信女つい）

春ことの子日はおほく過つれとかゝるふた葉の松は見さりき

二條院東宮にまいり給て藤つほにおはしましけるに前中宮の此ふちつほにおはせしなと思出る人の侍ければ　大貳三位

しのひねのなみたなかけそかくはかりせはしとおもふころのたもとに

返し　出羽辨

春の日にかへらさりせはいにしへのたもとなからやくちはてなましとおもふ比の秋とは彼中宮の御腹の姫宮の入内せさせ給ひかはらす藤壺におはしますは嬉しさ多き比そとの心也「嬉しさを何につゝまんとよみし心にて秋ゆたかならぬ事なるへし

春の日にかへらさりせは　一品宮入せ給ふは前中宮隠れ給ひても二たひ春の日に帰りたる心なれは春日影に秋をほすへきの心なるへし此宮いらせ給はすは中宮を忍ひれになく秋なからに朽ぬへきにと也　栄物語卅四に此歌の次に云誠に慰むかたならましとうはへは世にしたかへと藤壺にてはおはしまいし御ありさまよりゐさせ給ひしまき柱なとを見るは哀なる心の中也

はなさかり春のみやま　春宮の御榮へ一品宮の御有さまにも威子の御事を忘れ給すなと也

よろつよを君か守り　太刀造江八雲抄攝津云々顕昭袖中抄云太刀つくりえたるしるしとを見よとよまれたるにこそ後頼の年つくりえにも年作りえつと讀る也云々　愚案　所の名にもあるを太刀作得たるとそへて讀給ふにや

いにしへのちかきまもり　近衛大將をちかきまもりといへり敦儀親王の御母は左近衛大將濟時の娘なれは濟時生であらは御太刀なとをも取あつかふへきなと思召に其しるしの有てかく道長公のまいらせ給ふと御滿足の心也次の註に委ちゝにつけおもひそ出る　千々につけは万事に付ての心也何事にもむかしをは思ひ出ると也謙德公　おはしまさは此子の行

後冷泉院みこの宮と申ける時うへのおのことも一品宮の女房もろともに櫻の花をもてあそひけるに故中宮の出羽も侍るとき（二條院の御事也）ゝてつかはしける　源爲善朝臣

はなさかり春のみやまの明ほのにおもひわするな秋のゆふくれ（櫻の二字なし）

三條院春宮と申ける時式部卿敦儀親王生れて侍けるに御はかし奉るとてむすひつけ侍ける　入道前太政大臣道長公

よろつよを君かまもりといのりつゝたちつくり江のしるしとを見よ

御返し　三條院御製

いにしへのちかきまもりをこふるまにこれはしのふるしるしなりけり

或人云此歌は故左大將濟時みこたちのおほちにて侍けれはけふの事をかの大將や取あつかはましなと思し出て讀せ給ひける也

一條攝政かくれ侍て後少將義孝子うませて侍ける七夜に昔を思ひ出てよみ侍ける　法住寺太政大臣爲光公謙德公弟

ちゝにつけおもひそいつるむかしをはのとけかれともきみそいはまし

（謙德天禄三年十一月日薨　謙德公子）

末のとけかれ共新申給はん物をと也

たかさことたかくな　おのへのしらへとは秋風拂レ松ヲ疎音落の心歟奥儀抄云彼父大臣は高名の琵琶ひき也絃のしらへを松の聲かよふ事にいへは高砂ときけは昔の父のしらへ思ひ出らるゝと讀る也高砂の尾上には松有故ひかり出るあふひの影　あふひを日にいひかけて也かやうの日影をみてあれは久しく齋院にておはすも嬉しきと也日は天子の象也後一條院四歳にて東宮九歳にて御即位也選子内親王は已に五代の齋院なれはとしへにけるもとよみて長命のかひある心なるへし

もろかつら二葉なからも　おさなきを葵の二葉にそへ奉りてかくめてたき齋院に逢給ふ事神のしるしなれは御行ふたのもしき心なるへし但大鏡には後一條後朱雀二所なから御堂の御膝にすへ給ふとあれは二葉は二所にや

重信公長徳元年五月八日薨

六條左大臣身まかりて後播磨國に下り侍けるに高砂のほとにてこは高砂となんいふとあるひとといひ侍けれは昔を思ひ出る事や有けんよみ侍ける　源相方朝臣重信公子權左中辨正四位下

たかさことたかくないひそ昔聞おのへのしらへまつそ戀しき　大齋院也

榮花物語八寛弘六年四月云々後一條院三歳也

後一條院おさなくおはしましける時まつり御覽しけるにいつきの渡り侍けるおり入道前太政大臣道長公いたき奉侍けるを見奉てのちに太政大臣のもとに遣しける　選子内親王

ひかり出るあふひの影を見てしかはとしへにけるもうれしかりけり　入道前太政大臣

返し

榮花物語十三寛弘元年十一月廿餘日云々

もろかつらふたはなからも君にかくあふひや神のしるしなるらん

後一條院御時賀茂行幸侍けるに上東門院御こしにのらせ給て紫野より歸らせ給ける又のあした聞えさせ給ける　選子内親王

みゆきせしかもの河波かへるさにたちやよるとそまちあかしつる

後冷泉院御時上東門院にみゆきあらんとしけるをとゝまりて後内より硯の箱のふたに櫻の枝をいれて奉らせ給ひたりける御返しに　上東門院中將道雅卿女

おほせことにてよみ侍ける

みゆきとか世にはふらせていまはたゝこするゑのさくらちらすなりけり

小辨齋院にまいり侍てほのかに見奉たるよしいひをこせて侍ける返事に　六條齋院宣旨源頼國女

齋院を也

ゆふしてやしけき木のまをもる月のおほろけならて見えしかけかは

宇治前太政大臣少將に侍ける時春日の使に出たち侍るに又の日雪に降侍けるに大納言公任かもとにつかはしける　入道前太政大臣道長公

頼通公十三歳の二月也榮花物かたり

わかなつむかすかのはらに雪ふれはこゝろつかひをけふさへそやる

返し　前大納言公任

七十歳公卿補任

みゆきせし賀茂の院齋院へ立より給ふかと待給しと也

みゆきとか世にはふらせみゆきを雪にそへていまはたゝこすといひかけて也行幸とやらん世にはいひふらせて終におはしまさゝりしとの心を櫻の花の雪とふるにそへて讀なり

ゆふしてやしけき　木綿四手や木の間の茂きに月の見えかたきをそへて齋院を見奉る事はおほろけならてあきらかにはえあるましき事と也

宇治前太政大臣少將に　頼通公道長公一男長保五年左少將十三歳康平四年十二月廿日太政大臣

わかなつむかすかのはら　頼通公の使に出立給ふ　折の雪に父君の御心つかひ誠に哀に侍にやきのふ使に立給へる故に心遣ひをけふさへと也

身をつみておほつかなきは
我身をつみても思ひやら
るゝにかゝる雪には如何
とおほつかなしとの心也
身をつみて若菜の緣なる
へし

二條前太政大臣少將に　教道公道長公子公任璧寛弘四年十月右少將同五年正月十八日中將延久二年三月二十三日太政大臣七十五歳公經輔任

みかさ山春日のはらの　無事に歸京を待給ふ心也歸立は霧の緣也

長家民部卿　道長公子寛德元年十二月十四日民部卿稱號大宮又號二條

としつもるかしらの雪は
老の身には君の御惠み一入うれしき心にや古今「春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき」此歌東宮の御息所のおまへにて康秀か歌也是を太歌なるへし

女の石井に水くみ　重之集云又繪に女石井に水くむとてさしのそきて影見るとあり

身をつみておほつかなきは雪やまぬかすかの野へのわかななりけり

二條前太政大臣少將に　教道公中イ侍ける時かすかの使にまかりて又の日霧の道長公

いみしう立侍けれは入道前太政大臣のもとにつかはしける

みかさ山春日の原のあさきりにかへりたつらんけさをこそまて

上東門院長家民部卿の三條の家にわたらせ給ひたりける頃俄に行後朱雀なるへし

幸有てちかき人々のいへめされけれはまかるへき所なきよしそうせさせ侍ける其御返ことに歌をよみてまいらせよと仰られけれは

雪ふる日よみてまいらせける　伊勢大輔

としつもるかしらの雪はおほそらのひかりにあたるけふそうれしき

家をかへしにすとおほせられてゆるされにけり

冷泉院東宮天暦四年七月廿三日東宮と申ける時女の石井に水くみたるかたるにかきたるを

よめとおほせこと侍けれは　源重之

としをへてすめるし水　心は明也かの女を檜垣なとになそらへてなるへし後撰集檜垣嫗の歌「年ふれは我黑髮もしら川の……」

みつわくむは老かゝまり　しさま也童蒙抄に支離と書云々

春くれときえせぬ　心は明也三姝詩人生莫レ遺レ頭如レ雪縱得二春風一亦不レ消

大嘗會の御禊　御代に一度の神事なれは河原にて御祓あり江次第十四に委

世にとよむとよのみそき　とよむ八雲抄に響也云々豐御禊は大嘗會の御禊の事也深雪を行幸にそへて御禊行幸をもよそにして小鹽山の雪をみて閑におはすらんと也

小鹽山こすゑも見えす　そやはそれや也すへらきは帝の御事を木の字をそへてよめるなるへし

としをへてすめるし水にかけみれはみつわくむまて老そしにける　花山院御製

春かしらしろき人のゐたる所繪にかけるを

春かしらしろき人のゐたる所繪にかけるを　花山院御製

春くれときえせぬものはとしをへてかしらにつもる雪にそありける

三條院御時大嘗會の御禊なと過てのころ雪のふり侍けるに大原にすみける少將井のあまのもとにつかはしける　伊勢大輔

世にとよむとよのみそきをよそにしてをしほのやまのみゆきをや見し

返し　少將井ノ尼長和の比の人云々

小鹽やまこすゑも見えすふりつみしそやすへらきのみゆきなるらん

寛弘八年六月廿二日崩一條院うせさせ給ひて上東門院里にまかり出給ひにける又の年五節の頃むかしをおもひ出てうへのおのことものこともひきつれてまいりて侍ける中に讀て出しける　伊勢大輔

はやく見しやまゐの　はや
く見しは昔見し也やまゐ
は山藍(ヤマイ)とて五節の小忌衣
の事に山井をそへて山井
の水の源氷と序歌にふめ
り扨ド句はかの殿上人達
のまいられてうちとけ給
へるありさまはむかし禁
中にて五節のころをみの
君達のさまにかはらすと
むかしを思ひ出し心なる
へし

はやく見しやまゐの水のうす氷うちとけさまはかはらさりけり
閑院太政大臣公季公子長徳四年十月廿二日右中將長和四年十月廿八日權中納言　義子
中納言實成宰相にて五節奉りけるにいもうとの弘徽殿女御の御も
一條院女御　一條院中宮上東門院これ也
とに侍ける人かしつきに出たりけるを中宮の御かたの人〻ほのか
にきゝて見ならしけんもゝしきをかしつきにて見るらんほとも哀
送り物する也　扇なりの奉なるへし
と思ふらんといひてはこのふたにしろかねの扇にほうらいの山つ
くりなとしてさしぐしにひかけのかつらをむすひつけてたき物を
たて文にこめてかの女御の御方に侍ける人のもとよりとおほしく
て左京のきみのもとにいはせて果の日さしをかせける
（かのかしつきの名にや　辰の日をいふなるへし卯日童御覽辰日節會云々）

かしつきに出たり　五節の
童女の傅(カシツキ)也枕双紙にか
しつき十二人云々源氏乙
女卷にもありかいしやく
の人をいふと諸抄に有
かの女御の御方に侍ける人
のもとよりとおほしくて
に委可勘合

よみ人しらす

おほかりしとよの宮人さしわけてしるき日かけをあはれとそ見し

おほかりしとよの宮人　數多の人の中に取分て其人のさまのきよけなりしとの心也日陰の糸を五節の時付る事あれは也
沈の櫛銀(ヂンクシシロカネ)のかうかい　榮花物語には使の君のひんかき給ふへき具とおほしくてしたり云々

かくて臨時(リンシ)祭になりて二條前太政大臣(教通公)中將に侍て祭の使し侍りけ
中宮の御方よりきたる箱也
るにありしはこのふたにぢんのくし白かねのかうかい金のはこに
中宮の御方よりとはいはて　彼女御の給へるやうにしなしたはかりなり　此事榮花物語八初花卷

中宮のはらからなれはにや
教通公は上東門院御弟也
あしてにて　蘆手歌繪と源
氏梅枝卷にも有歌を繪の
やうに書たる也榮花物語
には此箱の内に泥(デイ)にて蘆
手をかきたるは有し返し
なるへしとあり

ひかけ草かゝやく影や　日
蔭を日にそへてなり
あをすりをして　白き布を
張て山藍にて樫木をすれ
る物也是を小忌といふ也
一條禪閤御説也
あをき紙の　青摺の色也
神代よりすれる衣と　神代
とはむかしの事也むかし
より用たる青摺なから此
たひは又珍しと也重れて
は衣の縁也こゝもと皆榮花物語也
かいつくろひ　江次第に理髮とあり五節の舞妓の髮なとつくろふ女房也
あしひきのやまゐの　紐を氷(ヒモ)にそへて也是も山藍を山井といひかけてなるへし心は明なるへし

か、みなと入てつかひは中宮のはらからなれはにや日かけとおほ
しくて鏡のうへにあしてにてかきて侍ける

藤原長能(榮花物語には此作者なし)

ひかけ草かゝやく影(榮花ほとや)やまかひけんますみのかゝみくもらぬものを
實成の事也此事も榮花物語おなし所に有
おなし人の五節のわらはのかさみかしつきのからきぬにあをすり
紗をたゝみて泥繪かきて右の肩に二筋付云々
をしてあかひもなとつけたりけり人〻見侍りけるにあをきかみの
はしにかきてむすひつけさせ侍ける

選子内親王

神代よりすれるころもといひなから又かさねてもめつらしきかな
定子中關白道隆公女此事枕双紙にあり
一條院御時皇后五節奉らせ給ひけるにかいつくろひつかうまつり
ける人のつけて侍けるあかひものとけていかにせんといひけるを
きゝてむすひつくとてよみ侍ける

藤原實方朝臣

あしひきのやまゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらん

こと人にときゝて　こと人にあひしと也

物いひ侍ける女の五節に出てこと人にときゝ侍けれはつかはしける　源頼家朝臣

まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなきよにる

人のこをつけんとちきりて侍りけれとこもりゐぬとき、てこと人につけ侍けれはよめる　法眼源賢摂津守満仲子

まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなきよに

おもひきやわかしめゆひしなてしこをひとのまかきの花と見んとは

ち、のしなのなる女を住侍けるもとに遣しける　平正家出羽守正濟子駿河守

しなのなるそのはら信濃の曾の原の布施屋の帯木を其腹には生れれとも今よりは母と頼ん心也

しなのなるそのはらにこそあらねともわかは、き木といまはたのまん

一條院御時大貳佐理つくしに侍けるに御手本かきにくたしつかはしたりけれはおもふ心をかきて奉んとてかきつくへき歌とて讀せ侍けるに讀る　源重乏

大貳佐理　公卿補任云正三位前太宰大貳參議佐理卿左中將敦敏子清慎公孫　三跡の一人也筑前の太宰府に在しほとの事にやみやこへといきの松はら　生の松原筑前なり　いきかへりといはん枕詞にをけりやかて都にやき歸りて君かちとせにあはん

みやこへといきの松はらいきかへりきみかちとせにあはんとすらん

おさなくて父のもとに筑前國に侍て後年(ノチ)へて成順か其國になりて

と也

そのかみの人はのこらし箱崎筑前也昔の人は生のこらしなれは我をしる人もあらしと也年久しくて下りし事をいはんとて也

こつかみ　木津神浦阿波の國也

藤原基房　中納言明經(ノ)朝臣子前常陸介

こつかみのうらに年へておなし國に受領せし心を波によせてよめり

老の波よせしと人は　ことさらに物もいはて老人をいとふとも若の浦にはまつらんといひて波の緣によめり

うちむれしこまも　義清と

うちむれて駒にのり行しに下國の〻ちは駒もをとせれは嵯峨野の桔行迄も見る人なしと也

侍けれはくたりてよめる　中將尼大和守源清時女

そのかみの人はのこらしはこさきの松はかりこそ我をしるらめ

阿波守になりて又おなし國にかへりなりて下りけるにこつかみの浦といふ所に波のたつを見てよみ侍ける　藤原基房朝臣

こつかみのうらに年へてよる波もおなしところにかへるなりけり

頼國朝臣紀伊守にて侍ける時いふへき事有てまかりてけるをこと更に物いはさりけれはよみ侍ける　連敏法師長保比の人

老の波よせしと人はいとふともまつらん物をわかのうらには

肥後守義清くたり侍ての年の秋さか野の花は見きやといひをこせて侍ける返事につかはしける　源兼長

うちむれしこまもをとせぬ秋の、は草かれゆけと見る人もなし

あつまに侍けるはらからのもとにたよりにつけてつかはしける　源兼俊母前筑前守成順女母伊勢大輔

にほひきやみやこの　東風のかへしの風は日比東風吹て其返しに西より吹を云也花の都の事ともを風便に告やりしは届きしかとの心を匂ひきやと云也ふきかへすこちのかへし心明なるへし

博多に　筑前也高遠太宰の大貳にて下りける時なるへし

とりわきて我身に　菊はいまたうつろはさるに我身は都にうつろへはとり分て我身に露やをきつらんと也露に菊は移へは也泪の心もあるか

やすらはておもひ立　憚闕八雲抄陸奥云々物をためらふ事をやすらふと云可憚闕あるにやすらひためらふ事もなく思ひ立し事よと也東行を悔る心なるへし

みちのくのあたちの　序歌也弓を撓(タユ)るを思ひためをきし事にそへて也久しくあはて思積りたる事をも君にこそかたらめと

にほひきやみやこの花はあつまちのこちのかへしの風につけしは返し　康資王母父母同二乘後母一

ふきかへすこちの返しは身にしみきみやこの花のしるへとおもふにつくしよりのほらんとてはかたに侍ける館(タチ)の菊のおもしろく侍りけるを見て　大貳高遠

とりわきて我身に露や置つらん花よりさきにまつそうつろふみちのくに、侍けるに中將宣方朝臣のもとにつかはしける　藤原實方朝臣

やすらはておもひ立にしあつまちにありける物をは、かりのせきかたらひ侍ける人のもとにみちのくにより弓をつかはすとてよみ侍ける　大江匡衡

みちのくのあたちの眞弓君にこそおもひためたることはかたらめ實方朝臣みちのくに、侍ける時いひつかはしける　大江匡衡

いひて弓を造す心を謂也都にはたれをか　心は明なるへし

わすられぬ人の中には　都人の忘られぬかおほき中には取分て君を我は忘れぬを都に我を待らん人の中に取分て君我をまつやさはあるましきとの心なるへし

ありてやはをとせさる　津の國の生田を行といふにそへていまそ行といひし人はよも京にありながらをとつれすあるへきあやしき事哉ととかめかこちたる心なるへし

六波羅　六波羅密寺十一面觀音　空也上人建立

かうにまいり　菩薩講舍利講八講なとの類也

きのふまて神に心　法に逢といひかけて心をかけしも爽の緣なるへし心は明也

石山に　近江如意輪觀音　朋辨僧正建立

今歸るさに　今やかて歸るさに立よらんとなるへし

都にはたれをか君はおもひいつるみやこの人はきみをこふめり返し　藤原實方朝臣

わすられぬ人の中には忘れぬをまつらん人のなかにまつやは津の國にかよふ人の今なんくたるといひてのちにもまた京にありけるを聞(キイテ)て人にかはりてよめる　赤染衛門

ありてやはをとせさるへきつの國のいまそいくたのもりといひしは六波羅といふ寺にかうにまいり侍りけるにきのふまつりのかへさ見ける車のかたはらに立て侍けれはいひつかはしける　さかみ

きのふまて神に心をかけしかとけふこそのりにあふひなりけれ石山にまいり侍ける道に山科といふ所にてやすみ侍けるに家あるしの心あるさまに見え侍けれは今歸るさになといひ侍けるをよに

よにさしもと　よには助語也さしもあらしといへる也

さしもといひ侍ければ　和泉式部

かへるさをまち心見よかくなからよもたゝにてはやましなの里

南都興福寺也前の集註　山階寺供養のゝち宇治前太政大臣頼通公のもとにつかはしける　堀河右大臣頼宗公

かへるさをまち心みよ　かく立出るまゝにてはやましといひかけて也

ふかき海のちかひはしらすみかさ山こゝろたかくも見えしきみかな

山階寺供養　康平三年五月四日興福寺炎上の後造營有て治暦三年二月廿五日に供養し給へり准ニ御齋會ニと或記に見ゆ

山里にまかりて歸る路に家經か西八條の家ちかしと聞て車を引入て見ありきけるになにはわたりの心ちせられていとおかしう侍けれは硯の箱のうへに書つけ侍ける　伊勢大輔

ふかき海のちかひは　是彼供養のさまを稱美し給ふ心なるへし佛の誓ひの深き事はしらす今此太政大臣の供養のさまは心高き大營かなと也奥儀抄弘誓深如ジンニヨカイ海の心也云々

こも枕かりのたひねに　詞書に難波渡りの心ちとあれは全躰難波の入江にして讀也　薦枕は草枕の類也薦コモは竹の節のごとくこも枕かりのたひねにあかさはやいり江のあしのひとよはかりを

日もくれぬ人もかへりぬやまさとはみねのあらしのをとはかりして

よあれは一夜はかりをとつゝけたり面白き難波わたりにこも枕して一夜旅ねせまほしと也

山里にまかりて日くれにけれは　源頼實美濃守頼國子藏人右衛門尉

日もくれぬ人もかへりぬ　山城也後綱の山莊

伏見といふ所に四條宮の女房あまたあそひて日暮ぬさきに歸らんとしけれは

四條宮　皇后寛子頼通公女後冷泉院后

都人くるれはかへる　京に近けれは一夜もふさて歸れは伏見と云名もかひなしと也名殘をおしむ心なるへし續世繼十五云白河院一に面白き所はいつこと問せ給ひけれは石田こそ侍れ次には高陽院第三には後綱か伏見や候らんとそ申されける云々中略註

都人くるれはかへる いまよりはふしみのさとの名をもたのまし

橘俊綱朝臣前註至寛治八年

杉もすきやともむかし　心明也

かたらふ人のもとに年頃有てまかりたりけるにおほめくさまにや有けん讀侍ける

たしかに覺えぬさま也

よみ人しらす

二月五番　今は斷絶の事にて山の人々も不知云々

ひえの山に二月五番とて花なとつくろ事侍けり其花作らせんとて

おもひきやふるさと人に身をなして花のたよりにやまを見んとは

人の山によひのほせて侍けれは昔此山にて物なと學ひける事思出

蓮仲法師佐渡守爲信子

おもひきやふるさと人に　ある所に庚申しけるにみすのうちの琴のあかぬ心をよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

庚申しける　庚申待事也前抄註

たえにけるはつかなるねをくり返しかづらのをこそきかまほしけれ

たえにけるはつか　童蒙抄云絶にけるとは唐に伯牙といふ人琴をひく鍾子期これを聞知れり子期死にて聞知人なし伯牙身を終るまて琴の絃たちてひかすといへり。又かつらのをとは葛絃也　陶淵明葛を絃にしてひく。心に曲をあやつれは聲なけれと同事なりとて又絃もなくて琴をもてあそへり云々

人しもこそあれ聞さかめ
我思ふ事のかよふにやそなたにしも聞さかめられし事よと也我そなたを思ふ故そなたも我を思ふらんとの心也
いつか又こちくなるへき
こちく八雲抄云胡竹也童蒙抄鷓の囀そへしとは春鷓囀と云樂によせて讀る也　愚案胡竹をこちへ來るといひかけてあまたよめり笛に漢竹胡竹なとありを鹿ふすしけみに　鹿は木の茂き所にふす也上句は序歌也葛葉は裏を賞する故うらさひしといはんとてをける詞也
つれならぬ山のさくら　無常世界のかりの色欲におほれて八功德池の蓮生をいとはなち捨る事なかれと也山櫻に池蓮を對して池の槭を放つ事にそへてよめり
もちなから千世も　持なからを月の望にそへて也月は日の光をうけて盈虛すれは也かけすして望なから千世もめくらんと

陽明門院三條院皇女入道一品宮に人々まいりて遊ひ侍けるに式部卿敦貞のみこ笛なとおかしく吹侍けれはかのみこのもとに侍ける人のもとに又の日よへの笛のおかしかりしよしいひつかはしたりけるをみこつたへきて思ふ事のかよふにや人しもこそあれき、とかめける事なと侍ける返事に　三條院皇子實小一條院御子

相模

いつか又こちくなるへきうくひすのさへつりそへし夜半の笛竹

大中臣能宣朝臣

人の扇に山里の人も住ぬわたりかきたるを見てよめる

を鹿ふすしけみにはへる葛の葉のうらさひしけに見ゆるやま里

源　重之

法師のいろこのめるを見てよめる

つねならぬ山のさくらに心いりていけのはちすをいひなはなちそ

人のかめに酒いれて盃にそへて歌よみて出し侍けるに

藤原爲頼朝臣

もちなから千世もめくらんさかつきのきよきひかりはさしもうけなん

は盃なれは也下句心は明也

小倉の家　兼明親王龜山の麓に幽居し給て魯の隱公の苑裘に比して苑裘賦序云余龜山之下聊卜二幽居一欲三辭レ官休レ身終二老於此一云々猶あまた本朝文粹にあり

なゝへやへ花はさけとも　山吹の實のなきを裘なきにそへて也

陸奥守則光　橘季通父也此事枕草子委せうとなれはしるらん　枕草子には宰相中將齊信卿の清少納言あり所をきかまほしかりて日比兄妹といはるゝ則光なれは案内しらんとせめ給へる由也

かつきするあまの　海士のすなとりするをかつきすると云也かの和布を道し心は我在所をやめ〳〵いふなとの目くはせの心そと也此とまりめをくはせけりといはてけんといへる優ありて面白にや

小倉の家にすみ侍ける頃雨の降ける日みのかる人の侍けれは山吹の枝をおりてとらせて侍けり心も得でまかり過て又の日やま吹の心もえさりしよしいひをこせて侍ける返事にいひつかはしける

中務卿兼明親王延喜皇子

なゝへやへ花はさけとも山吹のみのひとつたになきそあやしき

陸奥守則光くら人にて侍ける時いもせなといひつけてかたらひ侍けるに里へ出たらん程に人〻尋んにありかな告そといひて里にまかり出て侍ける人〻せめてせうとなれはしるらんとあるはいかかすへきといひをこせて侍ける返事にめをつゝみてつかはしたりけれは則光心も得でいかにせよとあるそとまうてきて問侍けれはよめる

清少納言　兄弟也實は忍ふ中也　清少納言の則光に云詞也　則光詞　和布

かつきするあまのありかをそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん

駿河守國房と車にのりて物にまかりける道に父の定季かはか有とて俄に車よりおり侍けれはよめる

源　頼俊　此集作者藤原國房は別人歟　卿前守頼房子陸奥守五位

たらちねははかなくてこそやみにしかこはいつことてたちとまるらん

山にすみうかれてこしの國にまかりくたりけるに思ひかけす良暹法師なとあそひてむかしの事おもひいてゝいひ侍けれはよめる　慶範法師 右京亮致行子

おもへともいかにならひし道なれはしらぬさかひにまとふなるらん

伊周公長德四年十一月歸京敦康親王生給ふ故也

つくしよりのほりて道雅三位のわらはにて松君といはれ侍けるをひさにすへて久しう見さりつるなといひてよみ侍ける　帥前内大臣伊周公

あさちふにあれにけれとも古里の松はこたかくなりにけるかな

前伊勢守義孝宇治前太政大臣のむまやにくたりたりときゝてつかはしける　天台座主教圓伊賀守孝忠子

いにしへのまゆとしめにもあらねともきみはみまくさとりてかふとか

松君のおほきになり給ふ心なるへし榮花物語五云殿のありさまなと昔にもあらす哀に荒にけりうへも何事もきこえ給はす泪におほれて見奉給ふ松君のおほきに成給へるをかきふて〻殿いみしうなかせ給へは松君もいかにおほすにか目をすり給ふいとうれしとおぼしたるもことはりなりと有

勘事によりてなるへし

いにしへのまゆとしめには　催馬樂呂眉止之女のうたひ物にみまくさとりかへまゆとしめ下ゟ梁塵愚案抄にまゆとしめは女の名也云々此うたひ物にて義孝のむまやに下りたる事をよめり心は明也

はなれてもかひこそ　是も催馬樂呂青馬に「あをのまはなれはとりつなけさをのまはなれはとりつなけ下ゟ梁塵愚案抄云あをのまは青毛の馬也さをのまは少あをき馬也愚案此詞を用ひていまやるされてむまやをはなれてもかひなし一たひとりつなかれし我身なれはこの述懷也作者義孝は後少將と文字は同けれとものりたかとよみて時代以下別人也

つかひこさりけるさきにゆるされたりけれは返事　義孝

藤原のりたか肥前守敦倫子

はなれてもかひこそなけれあを馬のとりつなかれしわか身とおもへは

後拾遺和歌集第二十

雑六

神祇

長元四年六月十四日伊勢のいつき内宮にまいりて侍けるに俄に雨降風吹ていつきみつから託宣して祭主輔親を召ておほやけの御事なと仰られけるつゐてにたひ〳〵御みきめしてかはらけたまはすとてよませ給ひける　祭主輔親

伊勢のいつき　後一條院御時の齋宮なるへし具平親王の御娘婿子女王にやおほやけ　後一條院の御事なるへし

天照太神の神勅を齋宮みつから口はしり給なるへし託宣（タクセン）とは神勅を人によりてのたまふ（ヨリノタマフ）給ふ心也

さかつきにさやけき影のみえぬれはちりのをそりはあらしとをしれ

さかつきにさやけき　盃を月にそへてにやをそりは恐なるへし清浄（チンジヤウ）の心あらはれたれは塵垢の恐もあらしと輔親をほめさせ給ふ心にや

おほち父むまこすけちかみよまてにいたゝきまつるすへらおほん神

おほち父むまこすけちかおほちは澤のほとりの盤も　童蒙抄には保昌に忘られて侍ける時云々伊勢物語に「思ひあまり出にし玉のあるならんといへる詞なるへし心明也

男に忘られて侍ける頃きふねにまいりてみたらし河に螢の飛侍けるをみて讃る　いつみしきふ

物おもへは澤のほたるも我身よりあくかれいつるたまかとそ見る

物おもへは澤のほたる　みは皇大神也

御返し　藤原長能

おくやまにたきりておつる瀧津瀨の玉ちるはかり物なおもひそ

おくやまにたきりて　神詠なれはさかくいふへきにも侍らぬにや心は大かた明なるへし

此歌は貴船の明神の御返し也男のこゝにて和泉式部か耳にきこえけるとなんいひ傳へ侍る

世中さはかしく　公事根源云紫野今宮是は疫癘の神也正暦五年長保二年天下閑ならさりし時此神社をまつらる云々

世中さはかしく侍ける時さとのとね宣旨にてまつりつかうまつるへきを歌二つなん入へきといひけれはよみ侍ける　里のとねらうたを望む詞也

しろたへのとよみてくらを取持ていはひそ初るむらさきの野に

さとのとれ　刀禰は諸人をいふ詞也

しろたへのとよみてくら　白幣也祝初るを染る紫とそへて也心明なり

今よりはあらふるこゝろましますな花のみやこにやしろさためつ

今よりはあらふる　あらふるは荒也社定るは鎮座とてしつむる儀也然は荒る心ますなと也

此歌或人云世中さはかしう侍けれは舟岡の北に今宮といふ神をいはひておほやけも神馬たてまつり給ふとなんいひ傳たる

いなり山みつの玉かき　童蒙抄に三の玉垣とは瑞籬と神垣をいへとも稲荷の三の社にておはします心なり延喜式云稲荷神社三座下社大山祇中社倉稻魂上社祖神れき言は神に申詞也

稲荷によみて奉り侍ける　惠慶法師

いなり山みつの玉かきうちたゝき我ねきことを神もこたへよ

住吉の宮うつりの日かきつけ侍ける　山口重如河内國人云々

すみよしの松さへかはるものならはなにかむかしのしるしならましすみよしの松さへかはる

一條院御時はしめて松尾の行幸侍けるにうたふへきうたつかうまつりけるに　源　兼澄

ちはやふる松のお山の影みれはけふそちとせのはしめなりける

後三條院御時はしめて日吉社に行幸侍けるに東遊にうたふへきうたおほせ事にてよみ侍ける　大貳實政從三位資業子

あきらけき日吉の御神君かため山のかひあるよろつ代やへん

おなし御時祇園に行幸侍けるにあつまあそひにうたふへき歌めし侍けれは讀る　藤原經衡

千はやふるかみのそのなる姫小松よろつよふへきはしめなりけり

大原野祭の上卿にて參て侍けるに雪の所〻きえけるを見て讀侍けるにや

おなし御時　延久三年正月廿六日祇園行幸云々

千はやふる祇の園　祇園行幸是はしめなれは此君にひかれて千年の松も万代ふへしとの心也

大原野祭　二月上卯日十一月中子日兩度也公事根源云近衛使は春日祭に同し上卿辨内侍なとむかふ云々

上卿　神事公事なとの上卿は節會の内辨のことし其日の奉行也

さかきはにふる　心は明也神慮和樂し給ふ心をとくらんといへり雪のきやるに付て也

うとはまにあまの　煮蒙抄云昔するかの國の有度濱に神女の天くたりて舞しをうつして今の世にはするか舞とて東遊にする也愚案けふの祝子の舞も其世の如しと也

阿蘇社　日本紀に景行天皇筑紫におはせし時阿蘇都彦阿蘇都媛の二神あらはれ給ふ云々

あめのしたはくゝむ神　童蒙抄云やたけにそたつとは豊に裁と云也奥儀抄神前のみつの廣前と云也又衣にやたけと云事有前をわらで廣なから有也廣前共云世をはぐゝむかみの去なれは廣くたゝんと也

こゝにしもわきて　涌と分てとそへて也

住吉の松のしつえに　松の緣の中に玉垣の緋の見やるさまなるへし

治部卿伊房

さかきはにふる白雪はきえぬめり神のこゝろもいまやとくらん

式部大輔資業伊豫守に侍ける時彼國の三島明神にあつまあそひして奉けるをよめる　能因法師

うとはまにあまの羽ころもむかしきてふりけん袖やけふのはふりこ

大貳成章肥後守にて侍ける時阿蘇社に御裝束奉り侍けるにかの國の女のよみ侍ける　よみ人しらす

あめのしたはくゝむ神のみそなれはゆたけにそたつみづのひろまへ

八幡にまいりてよみ侍ける　增基法師

こゝにしもわきて出けんいはし水神のこゝろをくみてしらはや

すみよしにまいりてよみ侍ける　蓮仲法師

住吉の松のしつえにかみさひてみとりに見ゆるあけの玉かき

住吉の社を　八幡に住吉を勸請申也

さもこそは宿は　尤住吉の石清水におはせは宿はかはりしかとも松さへ杉にかはりけるあやしさよと也

おもふことなる河かみに
おもふことなるとは所願成就の心也貴船といふに付て人をわたすとよめり諸人の所願を成就せしめて心身安穩に濟度し給ふ神德をよめるにや

きさいの宮の歌合　榮花物語卅六に皇后宮歌合せさせ給ふ左は春右は秋也云々天喜五年三月皇后寛子頼通公の御女のせさせ給へり

けふまつるみかさの　春日は天照太神と相殿の御契約より君を守り國家を護給ふ心也三笠と雨とを對してよめり

いにしへのわかれの庭に　誠の跋提河の入滅の世に逢たりとも今の感涙の外はあらしと也

石清水にまいりて侍ける女の杉の木のもとに住吉の社をいはひて侍けれは社の柱に書付て侍ける　讀人しらす

さもこそは宿はかはらめ住よしの松さへ杉になりにけるかな

貴布禰にまいりていかきにかきつけ侍ける　藤原時房上野介成經子皇后宮權大進

おもふことなる河かみにあとたれてきふねは人をわたすなりけり

後冷泉院御時きさいの宮の歌合に春日の祭をよみ侍ける　二月上申日江次第公事根源に委　藤原範永朝臣

けふまつるみかさの山の神ませはあめのしたにはきみそさかへん

釋教

山階寺の涅槃講にまうて、よみ侍ける　二月十五日也不生不滅名言涅槃云々　山光源法師長元比人云々

いにしへのわかれの庭にあへりともけふのなみたそなみたならましい

前律師慶遥

つれよりもけふの霞　法華經序品云佛此夜滅度如二薪盡火滅一云々けふたつ霞を柄榁の煙によそへて哀めるも也

いかなれはこよひの月の
涅槃經序品第一曰二月十五日臨二涅槃一時會仲春之時用表二中道一月滿之時用表二圓常一以二仲春滿月之日一表二中道圓明之法一云々猶師子吼品之四委いかなれはと此歌によめりし心この疏の心にて心得へし

世をてらす月かくれ　此歌も佛を月に比して入滅を歎く衆生の心を闇とよめり

山のはに入にし夜半の　僧肇法華翻經後記云佛日西入遺燿將レ及二東北一茲典在二緣於東北一汝慎傳弘この文の心にてかくよめるなるへし

つもるらんちりをも　法にあふ扇の風につもる五濁の塵をも六塵のけからはしさも拂ふ事をよろこふ心なるへし

つねよりもけふの霞そ哀なるたき、つきにしけふりと思へは

二月十五日の夜中はかりに伊勢大輔かもとにつかはしける　慶範法師

いかなれはこよひの月のさよ中にてらしもはてゞいりしなるらん

返し　伊勢大輔

世をてらす月かくれにしさ夜中はあはれやみにやみなまとひけん

二月十五日夜月のあかく侍けるに大江佐國かもとにつかはしける　よみ人しらす

山のはに入にし夜半の月なれとなこりはまたもさやけかりけり

寛子榮花卅九卷　二條南町西南北二町　太皇大后宮東三條にわたり給ひたりける頃其御堂に宇治前太政大臣頼通公かくれ給ひて跡にや

臣の扇の侍けるにかきつけゝる　伊勢大輔

つもるらんちりをもいかて拂はましのりにあふきのかせのうれしさ

法華懺法觀音懺法等あり懺摩悔過の儀也猶委懺法をこなひ侍けるに佛に奉らんとて周防内侍のもとに菊をこひ

やへきくに蓮の露　佛に奉りし菊なれは蓮の露をなきそへてと也九品の蓮の色にましへうつろはせしと也

五部大乘經　華嚴經六十卷大集經五十卷大品般若經三十卷法華經八卷大般涅槃經四十卷經寸法等拾芥抄委

さきかたきみのりの花に方便品云如二是妙法一諸佛如來時乃說レ之如二優曇鉢華時一現一この文の心にて咲かたきみ法の花と也衣の玉前注露を玉とよめり

故土御門右大臣　師房公具平親王子保安二年十一月十二日薨八十歳

もろともにみつの車　三の車とは法華譬喩品に長者の子の火宅にあるを出しすくはんはかり事に羊車鹿車牛車をあたへんといひて彼子ともよひ出し後に平等大會の車にてこ〳〵くすくひたすけたる事聲聞緣覺菩薩等の三乘を終に一乘に歸せしめ給ふ佛の方便のたとへ也一味の雨とは藥草喩品に以二一味雨一潤二於人華一とある心也童蒙抄云釋迦如來一音にときたまへとも衆生は品々に從ひてさとりをうる事雨は一味なれとも草木は種々にうるほひをうくるかことしされは我は覺を得つとよめる也

侍けるにをこせて侍ける返事に　辨乳母

やへきくにはちすの露ををきそへてこゝのしなまてうつろはしつる

太皇大后宮五部大乘經供養せさせ給けるに法華經にあたりたる日よみ侍ける　清仁親王子　康資王母　筑前守成順女　太皇大后宮女房

さきかたきみのりの花にをく露ややかてころものたまとなるらん

故土御門右大臣家の女房車みつにあひのりて菩提講に參りて侍けるに雨の降けれは二つの車は歸り侍にけり今一つの車にのりたる人かうにあひて後歸りにける人のもとにつかはしける　よみ人しらす

もろともにみつの車にのりしかとわれはいちみの雨にぬれにき

月輪觀をよめる　僧都覺超　巨勢氏泉州大鳥郡人云々

月輪觀　元亨釋書覺超傳云嘗修二月輪觀一其胸常冷如レ水

月のわに心をかけし　此歌月輪を觀して覺超の心に成て始て其心を可レ知と也口訣有

この身は　維摩經方便品云是身如二芭蕉一中無レ有レ堅

風ふけはまつやふれ　芭蕉の風に破る事錢起か詩に葉大怯二秋風一云々歌の心は明也

同喩の中に此身如二水月一　維摩經第七觀衆生品十喩云如三智者見二水中月一菩薩觀二衆生一爲レ若レ此云々

つねならぬわか身は　世に住に澄を添て也

ちる花もおしまは　花嚴經三界唯一心心外無別法の心也惜む心とともに花も留れと也

こしらへてかりの　かりのやとりは化城をよめり法華經化城喩品云寶處在レ近此城非レ實我化作耳この心は寶の山に入人の遠路嶮難につかれて中途より歸らんといふに導ひく人かりに一城をつくりてそこにやすめて後是は化城なりまことの寶山はちかしといさめて終に至二寶山一大乘にいまた機の熟せさる者にしはらく小乘を說て機を熟せしめて終に法

月のわに心をかけしゆふへよりよろつのことを夢と見るかな　維摩經の十喩の中にこの身は芭蕉のことしといふ心をよめる　前大納言公任

風ふけはまつやふれぬる草の葉によそふるからに袖そ露けき　同喩の中に此身水月のことしといふ心をよめる　小辨

つねならぬ我身は水の月なれは世にすみとげんこともおほえす　三界唯一心　伊勢大輔伊賀少將伊勢中將

ちる花もおしまはとまれ世の中はこゝろの外の物とやはきく　化城喩品　赤染衛門

こしらへてかりのやとりにやすめすはまことのみちをいかてしらまし

華をときゝかせて眞實の寂光土をさとらしむるたとへ也其心をよめるうた也

みちとをみなかそらにてや歸らましおもへはかりのやとそうれしき　康資王母

みちとをみなかそら　是も同品に前路猶遠今欲ニ退品選一とある詞にてよめる上句也下句はかの化城にやすみしもの〻終に寶所にいたり方便によりて眞實を得し心也

五百弟子品

ころもなるたまともかけてしらさ〻ひさめてこそうれしかりけれ　赤染衛門

五百弟子品　此品は法華經四の卷五百羅漢成佛の記別をうけて未來に其名を同く普明如來と號する事の故五百弟子受記品といふなり

壽量品

わしの山へたつる雲やふか〻らんつねにすむなる月をみぬ哉　康資王母

ころもなるたまとも　是はかの記別をうけ[illegible]の佛弟子心中の得解を釋尊へ申さるゝたとへに貧窮の人醉ふしぬて親友の來て寶珠を衣のうらにかけあたへゝ　もしに目覺ても猶しらさりしを親友又來て其寶珠のある事をいひしらせて無價の玉を得て富榮し也是過去大通智勝佛の王子に結緣せし衆生の中比小乘の酒に醉迷ひて我にある佛性を知さりしに今釋尊の御教化にて彼むかしの結緣の覺り開けて醉醒て玉を得しか如しと喜ふ心也

普門品

わしの山へたつる雲や　壽量品は佛の壽命の長遠なる分量を說給ふ故如來壽量品といへり其中の文に於ニ阿僧祇劫一常在靈鷲山一とあり又我常住ニ於此一以ニ諸神通力一令下顚倒衆生雖レ近而不レ見ともあり佛は常におはしませとも衆生憍恣厭怠の心雲のふかくて恭敬戀慕の心なき故え見奉ぬ事をかくよめり

普門品　普はあまねしとよめり門はよく通する義なるへし觀世音菩薩はあまねく一切の法にわたりて妙智力をもつて衆生を利益し給ふ故に觀世音菩薩普門品といへり天台大師種々の釋猶有

世をすくふうちには　歌の義は前の普門の義にてあきらかなるへし門をさ〻されは其内に誰かいらさらんと云の緣をうけられたり此菩薩の救世の數にはもる〻者あるへからすとの心也

世をすくふうちにはたれかいらさらんあまねきかとを人しさ〻ねはは

書寫のひしり　性空上人從五位橘善根子永延二年に化人きたりて播磨の書寫山は靈鷲山の一峯也是に居る者は菩提心を發し六根淨を得ると告しらせて性空此山に菴をむすひ寺を立て圓教寺と號す元亨釋書委結緣經供養しけるに人々あまた布施　元亨釋書に空於ニ山中一毎歲三九月轉ニ妙典一爲ニ州民之福一と云々又所レ止之處細白成レ市施利如レ雲云々是也

書寫のひしり　聖人宮木か施物を思案して性空のうけさりし也

におもふ心やありけんしはしとらさりけれはよめる

つのくにのなにはの　諸法實相なれは何の事か佛法ならさらんと也遊ひたはむれ迄とは維摩經云至ニ博奕戲處一輙以度レ人

遊女宮木

津の國のなにはの事かのりならぬあそひたはふれまてとこそきけ

誹諧歌

題しらす

よみひとしらす

笛のねの春おもしろく聞ゆるは花ちりたりとふけはなりけり

橘季通　此集雜四にある事也

みちのくに〻くたりてたけくまの松を歌によみ侍けるにふさま〻〻有猶古今集にて委沙汰する事なるへし

誹諧　史記滑稽傳註に姚察云滑稽猶ニ誹諧一云々廣記には諧部あり誹諧の字は古今集にあり清輔奥儀抄八雲御抄等に

笛のねの春おもしろく　ちりたりは笛の聲也或說に落梅曲笛に有菅家の落梅曲蕊唇吹レ雪と作らせ給ふ是也其心なり云々

たけくまの松はふた木　よく詠るとよくかそへよむとなそへて也

さかさらは櫻を人の　花の見事なる故におらるれはみつからあたする心也鹿は皮の文うるはしき故に射らるゝとおなしたくひなるへし

またちらぬ花もや　あなかしかましはあらかしまし音なせそ花有ともてさはかはうき風もや尋みんと也

桃の花やとに　すけるは婿色の事をいへり桃の味酢きにそへてなるへし

三日のよのもちゐくへ　新枕の三日めに餅飯いはふ事也

みかのよのもちゐは　わつらはしはうるさき心也淀野に花蘆子を摘さよみて夜殿に母君の此むすめをつむ事をそへたる也順和名花蘆子世にはは

た木の松を人とは、見きとこたへんなとよみて侍りけるをつてに聞て讀侍りける　僧正深覺師輔公子東大寺

たけくまの松はふた木を見きといはゝよくよめるにはあらぬなるへし　源道濟

題不知

さかさらは櫻を人のおらましやさくらのあたはさくらなりけり　藤原實方朝臣

またちらぬ花もや有と尋ね見んあなかしかまし風にしらすなとなりより人の三月三日に桃の花をこひたるに　大江嘉言

桃の花やとにたてれはあるしさへすけるものとや人の見るらん　三條太政大臣忠義公のもとに侍ける人のむすめを忍ひてかたらひ侍けり女のおやはらたちてむすめをいとあさましうつみけるなといひ侍けるに三月三日かの北のかたの三日のよのもちゐくへとていたしけるによめる　藤原實方朝臣

みかのよのもちゐはくはしわつらはしきけはよとのには、こつむなりゐはくはしわつらはしきけはよとのには、こつむなり

こくさといふ物也

おもふことみなつきれ　皆盡れといふに水無月をそへたり心は明也公事根源六月大祓に法性寺關白記には此歌を詠すへしと見えたり云々

ひろくひ　蒜和名比流　韮菜也云々

きみかかすよるの衣を　夜の衣にひろくさしといひて盡といふ詞をそへて蒜くさきをよめり源氏帚木にひろまも何かまはせかちましも同

もみちはいにしきに目も綾はうつくしきこと也錦と綾と對して也

おちつもる庭をたに散つもりしをたにみんと庭に見るをさ也下句心明也

心さしおほはら山の北の大原山也心さしおほきなる心をそへて也おもひをそへて伊勢物語におもひをつけよとおなし火

みな月はらへをよみ侍ける　和泉式部

おもふことみなつきねとて麻の葉をきりにきりてもはらへつるかな

ひろくひて侍ける人今はかもうせぬらんと思ひて人のもとにまかりたりけるに名殘の侍けるにや七月七日に遣しける　皇太后宮陸奥

きみかかすよるのころもをたなはたはかへしやしつるひろくさしとて

小一條院入道前太政大臣のかつらなる所にて歌よませ給ひけるに紅葉をよみ侍ける　堀河右大臣

もみちはいにしきに見ゆとき、しかとめもあやにこそけふはなりぬれ

紅葉のちりはてたるに風のいたく吹侍けれは　增基法師

おちつもる庭をたにとて見る物をうたてあらしのはきにはくかな

人のすみたてまつらんいかゝといひたりけれはよめる　よみ人しらす

心さしおほはら山のすみならはおもひをそへてをこすはかりそ

をそへて遠る心に火を發すといひかけてよめる也

雲ゐにていかてあふきと　雲ゐ遠なるほとはいかて遠はんと思ひしにいまは近く手をかくるほとに成しと也扇には物かく事のあるをそへて也

題しらす　天台座主源心

雲ゐにていかてあふきとおもひしにてかくはかりになりにけるかな

はかなくもわすられにけるあふき哉おちたりけりと人もこそ見れ

法師の扇をおとして侍けるをかへすとて　和泉式部

はかなくもわすられにおちたりけりとは法師の落墜する事にそへて也おちたりと人もみんに忘置しよと也

たいしらす

さなくてもねられぬものをいとゝしくつきおとろかすかねのをとかな

さなくてもねられぬ人をつきおとろかす事に鐘つきおとろかすをそへて也わすれてもあるへき　月夜にはこぬ人もまたれ戀しき事も儘さるれは月夜よいたく人なすかせそと也すかすは好色心をおこさする心なるへし

七月はかり月のあかゝりける夜女のもとにつかはしける　少將藤原義孝

とのゐすとて　宿直とて夜の御番にまいる事也

わすれてもあるへき物をこのころの月夜よいたく人なすかせそ

みちしはやおとろのかみ　荊髮(ラトロノ)をいはんとて道芝やといへり荊はむはら也亂たる髮をおとろの髮といふ也詩に首如二飛蓬一(カウヘシ)

三條院御時上のとのゐすとて近く侍ける人ゝ枕をおとしてまかりいたく人なすかせそと也

出けれは書つけて殿上に遣しける　小大君

みちしはやおとろのかみにならされてうつれるかこそくさまくらなれ

といへる類也ならされては馴る心也荊といふより草まくらと讀るなるへし

よけかたのはつかしけ　朝かほをかゝみに見する心にてよめり

さすかにかよひ　兼家公其比まちの小路の女を時めかしなから此道綱母をもさすかに捨かたくかよひ給ふ比也蜻蛉日記委

おもひいつることも　人をおとろかすにやとよひかくる事を矢とそへてよめり我を思ひ出給ふ事もあらしと見やる此比のけしきなれとつといふに驚きたると也

しら波の立なからたに　豐浦の里のとよられよは重詞也立なからたに立られよいとまこひせんにの心なるへし

はかなくも思ひける哉　乳のなきを智のなきにそへてちもなくて博士の家の乳母せんとはかなくも思ひよりける哉と也

匡衡は江家とて世々儒業の家なれは也

人の草合せしけるに朝かほかゝみ草なとあはせけるにかゝみ草かちけれは　よみ人しらす

まけかたのはつかしけなる朝かほをかゝみくさにも見せてけるかな

入道攝政かれ〳〵にてさすかにかよひ侍ける頃帳のはしらに小弓の矢をむすひ付たりけるをほかにてとりにをこせて侍けれは遣すとて讀る　大納言道綱母

思ひいつることもあらしと見えつれとやといふにこそおとろかれぬれ

人のなかとへいまなんくたるといひ侍けれはよめる　能因法師

しら波の立なからたになかとなるとよらのさとのとよられよかしめのとせんとてまうてきたりける女のちのほそく侍けれはよみ侍りける　大江匡衡朝臣

はかなくもおもひけるかなちもなくてはかせのいへのめのとせんとは

6N149

赤染衛　門匡衡妻

返し　　季吟

さもあらはあれやまと心　　さもあらはあれやまと心しかしこくはほそちにつけてあらすはかりそやまと心は源氏乙女卷に　やまとたましゐといへる　やまとたましゐといふなるへしほそちは細乳なりうたの心は我子のやまと心しかしこくは乳のほそきはさに同し心にや和才たに賢くはといふなるへしほそちにつけてあらすはかりそやとなるべし

もあらはあれくるしからす只ほそちに付てあらすはかりそやとなるべし

自延寶八年二月廿三日至同年五月廿日註解畢

校本云長承三年正月十九日以禮部納言之自筆本書畢件本奥書云寛治元年九月十五日爲披露世間重申下御本校之先是在世本相違歌三百餘首不可信用件本其由奥書目錄序　　通俊

寛元四年三月日以藤亞相本又校之　　在判

文應三年三月廿二日以尚書禪門之本書寫畢　　公朝

于時寛正二年辛巳二月晦日書寫了　　法眼昭慶

此集書寫之謬多端之條以數本比校之僻書相違之處改正之雖然猶漏脱不足信用者歟寛正二載南呂日記之　　在判

911.135
Ki295h

086429-001-0

911.135-Ki295h

八代集抄

北村 季吟／著

上

M35

DBD-1265